江戸にいる私

山田風太郎

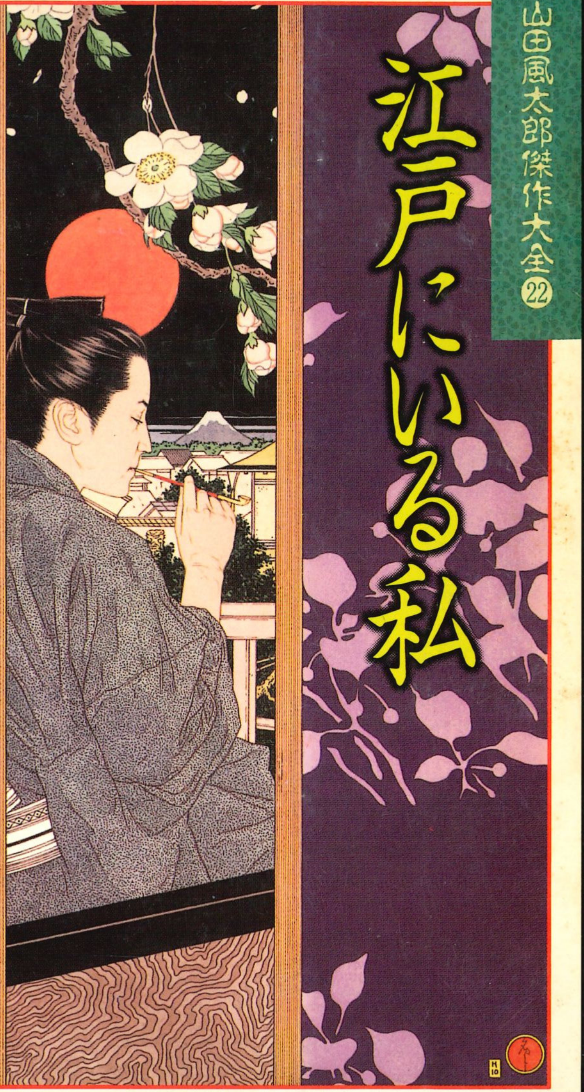
山田風太郎傑作大全㉒



廣済堂文庫

廣済堂文庫絶賛発売中！

カバーイラスト=山本タカト
カバーデザイン=原田幸生



江戸にいる私

山田風太郎

山田風太郎傑作大全㉒

廣済堂文庫

657
や7-22
543

山田風太郎　江戸にいる私　山田風太郎傑作大全㉒

廣済堂文庫　特選時代小説

ISBN4-331-60658-9
C0193 ¥543E
9784331606582
1920193005431
定価［本体543円］＋税

ある正月、藪井正一は妻と息子の笑いを期待してチョンマケのかつらを被って祝膳についたが相手にされず、激論の末立腹した彼は、酒をがぶ飲みし泥酔状態に陥った。頭の中は江戸の田沼時代にタイムスリップ。あまりの環境の変化にとまどいつつも何とか適応しようと努力し、さらには腐敗した社会を立て直そうと野望まで抱く。が、突如、江戸の家庭内の礼儀のすばらしさに感心し、野望はもろくも崩れてしまう。

特選時代小説
廣済堂文庫

山田風太郎
やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第２回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

江戸にいる私
定価［本体543円］＋税
平成10年5月1日　初　版
平成10年10月30日　2　刷
著　者　山田風太郎
発行所　廣済堂出版

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 22

江戸にいる私

山田風太郎

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎
江戸にいる私
廣済堂文庫

特選
時代小説

2230①

山田風太郎　江戸にいる私

山田風太郎

酔っぱらいの夢かはたまた現実か江戸の田沼時代にタイムスリップした男が描いた野望とは…

特選時代小説　廣済堂文庫

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全

妖異金瓶梅
十三角関係
修羅維新牢
誰にもできる殺人
売色使徒行伝
天国荘奇譚
叛旗兵
夜よりほかに聴くものもなし
剣鬼と遊女
青春探偵団
切腹禁止令
赤い蠟人形
いだ天百里
長脇差枯野抄
旅人　国定龍次㊤㊦
死なない剣豪
魔群の通過
ヤマトフの逃亡
八犬傳㊤㊦

廣済堂文庫注文カード

書店・取次店

570

部数

〈657〉や—7—22

山田風太郎傑作大全 22

江戸にいる私

廣済堂出版

山田風太郎

定価 本体543円＋税

ISBN4-331-60658-9 C0193 ¥543E

特選 時代小説

廣済堂文庫売上カード

廣済堂文庫

山田風太郎

山田風太郎傑作大全 22

江戸にいる私

657

や—7—22

☆本カード一〇〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105-8548 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(4444)5911

ISBN4-331-60658-9 C0193 ¥543E

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 22

江戸にいる私

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

山田真竜軒

千鳥足三十六番斬り

御存知の荒木又右衛門、伊賀（いが）の上野で三十六人斬っておとしたというのは、まっかな、うそっぱちだそうでございまして、実際は、たった二人。

もっとも、この二人だけが、敵の一行のうち、容易ならぬ槍とやっとうの先生で、又右衛門、まず走って、この剣術の先生の方をいきなり馬上から斬っておとし、槍の先生が槍持ちから槍をうけとらないうちに、反転してこれを斬った。この頭脳作戦のみごとさと、またその作戦どおりに、ことをはこんだ腕の冴えは、やはり又右衛門が、ひととおりの剣客ではなかったことを物語っております。

それでは、又右衛門の三十六番斬りは、まったく根も葉もないことかというと、これはたしかに斬ったことがある。故直木三十五先生は、一本の刀で、何人、ひとが斬れると思う、牛肉屋にいってみろ、牛切り庖丁で牛肉をきるのに、一斤きるあいだに二三度はとぐ。骨のない牛肉でもしかり、いかにいわんや、――とおっしゃっていられますが、この理屈は少々おかしい。

なに、牛肉を一斤きるより、人間を三十六人斬る方がらくな場合だってあるのです。三十六人、ぜんぶビフテキにするほどうすくきりきざむわけじゃああるまいし、極端なことをいえば、三十六回、ほそくびをとばせばすむことだ。

そこで、荒又氏（あらまたし）の三十六番斬りの実説ですが――そのまえに、この又右衛門、伊賀で三十六人侍を斬ったのはうそだが、仇討ちのまえに、鍵屋（かぎや）という茶屋で熱燗（あつかん）をグビリグビリとのんで待っていたということで、よほどお酒が好きな人だったことは、たしからしい。……が、いかに酒好きにせよ、この場合、一パイやるということは、ちょっとふつうの豪傑ではできん芸当で、そのとおり、この荒又氏、こういうときアルコールをいれると、いっそうつよくなる。――いや、人間を斬りたくなるという、因果なような好都合なような性癖があった。それをじぶんでちゃんと承知しているから、わざとキコシメシたのだ。……はじめから、余談ばかりしゃべっているようで恐れ入りますが。

要するにこの荒木又右衛門に、まあ、いってみれば、酒乱の気味がだいぶあったということをいいたかっただけの話。

この豪傑が、恩師柳生十兵衛先生から、じきじき手をとって教えられた、木の葉がくれ、松影の太刀、真剣白刃とりの三つの秘伝を、当時将軍家の御指南役、十兵衛先生の弟君、柳生飛騨守宗冬殿に伝授申しあげるために、江戸表へまいるつもりで――伊勢の桑名までやってきたときのことでございます。

又右衛門、立場に入って、れいによって大どんぶりで、ガブーリ、ガブーリとやっていると、船場の方で、ワーッというさわぎ。なにごとならんとみておれば、大地に土下座した病みやつれた浪人をとりかこんで、鬼のような船頭が三四十人。
「さあ、かんべんできねえ、尾州さまへ運上のあがる船だ。はなに、銭がねえといえば、ことしだいによっては乗せてやらねえこともねえ。それをいよいよ船賃というときに、一文もねえからかんべんしてくれとは、なんだ」
「いや、お怒りは重々ごもっともでござるが、船賃だけのたくわえはあると存じて乗りましたところ、あらふしぎやな、いずこへとりおとしたるか、すられたるか……」
「やかましいやっ、べらぼうめ。やい、おれたちが板子一枚下は地獄の海で、毎日汗みずたらしてはたらいているのはな、お客から銭をもらってかかあや餓鬼におまんまをくわせてえからだぞ。そんなことをいちいちきいて、ただ船へ乗せてたまるけえ」
「それ、簀巻きにでもして、海へたたっこめ」
と、よってたかって、いましも浪人へおそいかかろうとしたときに、うしろから、
「これ待て」
フラフラと千鳥足であらわれたのは、荒木又右衛門でございます。
「船頭ども、この御浪人の船賃、いかほどに相成る」
「これはお武家さま。……へい、船賃が六十八文、弁当が三十六文、ずうずうしい野郎で、酒

までうんとくらいやがって、これが七十二文……」
「なに、六十八文に、三十六文に、……」
「七十二文」
「ぜんぶでいくらに相成る。……三秒でこたえろ」
「旦那、ふざけちゃあいけません」
「ふざけてはおらん。なんじゃ、たかがそれだけのことで、武士たるものを土下座させて、なおそのうえ船賃をとろうとは、ふらち千万なやつらだ」
「御冗談を……。旦那、あっしたちは、なにもお侍に土下座してもらいたかぁねえんです。船賃さえもらえば――」
「だまれっ、いやしき船頭の分際をもって、こんご武士に対して乱暴無礼をはたらくにおいては、その分にすておかんぞ」
「いやしき分際……な、な、なにを勝手なことをぬかしやがる。そ、そんな理屈ってあるけえ」
「それが、あるのじゃ。武士と代議士は、タダで船や汽車に乗っても、船頭、ボーイ風情がとやかく文句をつけてはならん権利があるのじゃ。うそだと思ったら社会党にでもきいてみろ」
「な、なにい？　コウコウコウ……」
「なんじゃ、鳥みたいな奴じゃな。……あいや御浪人、もはやそれにて充分でござる。あとは

万事拙者がひきうけ申した。かような蚊とんぼ同様の者を相手にいたさずと、はやくゆきなさい」

「やいやい、と、とんでもねえさんぴんだ。蚊とんぼとはなんだ、蚊とんぼとは」

「これこれ、そう啼（な）くな」

「これが啼かずにいられるかっ」

それこそ、泣くような声をあげて、左右からうちかかるさざえのような拳（こぶし）、ベロベロに大酔しているようでも、さすがは荒木又右衛門、ヒラリと体をかわすと、ギラリ、ぬきはなった三池典太光世の大刀。

「やあ、こしゃくなり蚊とんぼども。われこそは剣豪荒木又右衛門吉村、いで柳生流（やぎゅうりゅう）の腕前、目にものみせてくれん」

ハッタとにらみつけたと思うと、エイヤッ、ハッヤッ、真っ向梨（なし）割り、唐竹（からたけ）割り、胴（どう）斬り、袈裟（けさ）斬り、車斬り、やっこ豆腐に千六本。……たちまちバッタバッタと船頭どもを斬りたおす。

――あとで勘定してみたら、これが三十六人。

剣豪荒木又右衛門、武勇伝の一席でございます。

こういう講談では、きのどくなことに、三十六人だろうが百八人だろうが、斬られた船頭の名もわからない。

神変鎌いたち

「えーっ、下にーっ。……下にーっ」

寛永七年六月なかば。――伊勢（いせ）から近江（おうみ）へこえる鈴鹿峠（すずかとうげ）をめざして、関の宿からはなやかにのぼってきた行列。まっさきに挟箱（はさみばこ）、つぎに鳥毛の槍、鞍馬（くらうま）。――いうまでもなく、大名行列だ。

しかも、その挟箱の定紋揚羽（じょうもんあげは）の蝶（ちょう）をみると、東海道五十三次の宿場という宿場の女が、

「あ、備前さまの御道中だ――」

と、眼のいろをかえてとび出す。

というわけは、この備前侯池田忠雄の行列にかぎって、鳥毛の槍のうしろに、ほかの大名行列にはないものがある。それは、華麗（かれい）な伊達奴（だてやっこ）に手綱をとられたまっしろなかざり馬にゆられている、今紫の大振袖、青地に金銀のぬいとりをした袴をつけた美少年で、これこそ備前侯じまんの寵童（ちょうどう）渡辺源太夫。

「下にーっ、下にーっ」

大名が江戸へ上るのを参覲（さんきん）といい、国元へかえるのを交代という。これは備前侯が岡山へかえる交代の行列だった。

路は右に、まるで支那の古画のように怪奇な山容をかさねあわせた筆捨山（ふですてやま）をながめつつ、美

しい青葉若葉のなかを、しだいに上り坂になる。

——と、白馬のうえで、驕慢な眼をかがやかせながらゆられていた渡辺源太夫が、突然、

「あっ、あれはなんじゃ？」

と、さけんだ。

前方の路上に、異形の少年群がむらがって、ワイワイさわいでいるのだ。——路ばたに朱面金歯の獅子がしらや笛太鼓などがおいてあるところをみると、獅子舞をなりわいとする大道芸人の子供たちなのだろう。——そういえば、このあたりは伊勢の国ほどあって、獅子舞は本場でもある。

ところで、彼らは、むちゅうで奇声、歓声をあげてひしめきつつ、すすんでくる行列など、とんと気がつかぬようである。

「下にーっ、下にーっ」

みると、彼らは、一方の山かげから路にたれた山ぐみに、蟻みたいにたかっているのだ。みるみる源太夫の美しいひたいに、癇癖の針がたった。

「えい、小ぎたない一文獅子どもめ、斬りちらしてしまえ！」

とさけぶ。

どうじに、小紋の手甲、脚絆、菅笠をかぶった侍たちが数人、ぶっさき羽織からこじりをあげて、バラバラとはしり出した。

「やあ、御行列をおかす無礼者ども、神妙にいたせ」

と、わめきながら、いっせいに抜刀して、獅子舞たちの群に殺到する。あお嵐のなかに、閃々と刀身がひらめき、少年たちは雀の舞いたつようにとびちった。

大名道中のさきをきったものは無礼討ちということは定法だが、なにしろ相手は子供だ。逃げちれば、それでよかったはずなのだが——おどろいたことにひとりとして路上に斬りたおされた少年のなかったことに、ひどく癇をたてた武士がひとりある。池田家家中の河合又五郎という侍。

びっくり仰天した少年たちが、みごとにとんぼをきってじぶんの刀をかわしたのをみると、腕の未熟さをたなにあげ全身恥のためあからんで、

「こやつ、手むかいいたすか、この乞食どもっ」

のぼせあがって、執拗にそのひとりのあとを追っかけた。その刀身のきっさきから、ぱっと真紅の血しぶきがたった。——とみえたのは一瞬の錯覚で、だれかが紅玉のような実もたわわなぐみの枝をなげたのだ。

「なにをするのさ、ばか！」

さっと山のなかからとび出したのは——いままで、ぐみの木のかげにかくれてみえなかったが、やはり、頭に獅子頭をつけ、紅染めの絹に黒繻子を縫った錏を背にたらし、たっつけ袴をはいているが、たったひとり、もう十七八にもなった美しい娘である。

「やあ、狼藉者(ろうぜきもの)。お供先を要撃する賊があるぞ」

と、わめきたてる又五郎のまえにすッくとたったまま、怒りの眼をかがやかせて行列の方をちらりとみた娘、はっとおどろくどころか、

「なにが狼藉者だい。子供を相手に弱いものいじめのさんぴんめ、いいかげんにしないか」

とさけんだのは、これまたひどく野性的な娘である。

これをきいて、いったん刀を鞘(さや)におさめかけていたほかの武士たちも、いっせいにふりかえった。

――ひとりが、血相をかえて、

「斬れっ」

と絶叫した。

どっと土ほこりをまいてあつまってくる乱刃のなかに、娘のからだが二三度もんどりうって身をかわしたが、あやうし、獅子頭につけた鶏(とり)の羽根が乱離(らんり)とちる。――

――と、そのとき、宙に舞う数本の白刃を、横から黒い蛇のようなものが、ブーンとたたきなぐって、三本ばかりの刀身が、つららのように折れとんだ。

「あっ――何奴?」

驚愕してふりむく侍たちの眼にうつったのは、いつのまにあらわれたのか、ひとりの虚無僧(こむそう)。それまで気がつかなかったが、さっきからむこうの山かげをまわってきて、このありさまをな

がめていたが、そのとき宙をとんでかけつけてきたもの。

ところで、その虚無僧の手ににぎられているのは、刀でもなければ、尺八でもない。左手に鎌、右手に――うなりをたててまわっている鎖と鉄球。

「――オおっ、くさり鎌だっ」

と、だれかが、愕然(がくぜん)たるさけびをつッぱしらせた。

「鎖鎌」

「くさり鎌!」

彼らは、この妖異(ようい)な武器と、いままでいちども立ち合ったことがない。流星のごとくとびきたる分銅(ふんどう)、これをさけると間髪をいれず大鎌がないでくる。――ひどく始末のわるいぶきみな兇器であるが――ようやく武士たちは気をとりなおした。

しょせん、これは女子の武術だ。一対一の場合にこそ、容易ならぬ武器ではあろうが、多数を相手には、ほとんどその威力はなかろう。さればこそ、古来合戦につかわれたためしをきかぬ。

「やあ、大名をおそれぬこの曲者、かまえてのがすな!」

呼びかわしつつ、どっとみだれうごく。

このとき、虚無僧は、天蓋(てんがい)のなかから、「――えほっ」というような奇妙な声をあげた。それは気合ともきこえたし、歓喜のさけびともきこえた。どうじに、水ぐるまのごとくまわる鎖

からふりこまれる八角の分銅。
　多数を相手にはおそらくなすところなからんと思われたこのくさり鎌。それはまったくの浅見で、この虚無僧はべつものだった。たんなる遠心力で同円周をうごく鉄丸ではない。それは、もみにもんで斬りかかる十人ちかい武士たちのあいだを、鷲(わし)の爪のように、自由自在にうねり羽ばたいた。
「うふっ」
「ぎゃっ」
　刀槍の傷では、これほど恐ろしい悲鳴はあがるまい。
　とぶよ、とぶ、鉄丸の荒れくるうところ、武士たちのあたまは、そのまま一塊の血へどと化した。卵のようにたたきつぶされた頭蓋骨のなかから眼球がとび出し、あお嵐のなかに脳漿(のうしょう)が奔騰(ほんとう)する。
　河合又五郎、腰をぬかして、尻ではしってにげた。
「各々がた、一大事、一大事でござるぞっ――」
　それとみて、発狂的などよめきが行列をわたり、何十人ともしれぬ武士たちが、奔流のごとく殺到してくる。
　このとき、実に奇怪なことが起った。獅子舞の群は、すでにどこへともなく逃げ去っていたが、まだ血の霧のたちまよう下に算をみだして横たわっている武士たちのところから、ふっと

その虚無僧の姿がかききえてしまったのだ。
「あはははははは！」
　頭上から高笑いがきこえてこなかったら、とっさに判断もつかなかったにちがいない。
「みたか、くさり鎌の妙術を――」
　声は、山から這い出した大木の枝からふってきた。とみるまに、樹上の虚無僧の手からびゅっとまたべつの枝に鎖がたぐり出されてからみつく。
　――ふつう、女子のつかうくさり鎌の鎖は二尺二寸八分だが、その虚無僧の鎖は、一間半にもみえた。それに、のばしきったからだと腕、実に一丈以上も遠くの枝へ、巨大な白猿(はくえん)のごとくその鼠いろの姿がとび、まるで幻術師にうなされたように茫然とたちすくむ武士たちの眼から、みるみるその影は樹海のかなたへのみこまれてしまった。

親の敵は荒木又右衛門

「――もしっ」
　伊賀国、上野をこえて奈良の方へ――木津川にそい、藤の花咲く初夏の街道をスタスタとあるいてゆくひとりの虚無僧(こむそう)。丸ぐけの帯に幾重にもたれて鳴る鎖、その肩にななめにさしているのは、刃を革鞘(かわざや)につつんであるが、たしかに妖異な鎌のかたちだ。
「もしっ、梵論字(ぼろんじ)さま。――」

うしろ、二間ばかりはなれて、また呼んだのは、獅子舞の娘だ。そのあとに、ゾロゾロと金魚のうんこみたいにくっついているのは、十二三人の子供たち。

さては、この虚無僧。さすがに鈴鹿をこえて近江へ出る東海道をさけて、横にそれてこの伊賀に入ってきたものとみえるが、この獅子舞たちもおなじコースをえらんだものとみえ、上野鍵屋の辻で、ヒョッコリあらわれたかと思うと、虚無僧のあとをどこまでもしたってきた。

「きのうは、危ういところをおたすけ下され、ありがとうございました」

「いや、なに」

と、虚無僧は、ぼっそりとつぶやいて、ふりかえりもしないでスタスタとあるく。実は、さっき二三度ふりむいて、天蓋のなかで、ちょっと迷惑そうな表情をしたのだが。

娘は、へいきだ。岡田茉莉子みたいなあどけない顔をして「梵論字さま、おつよいんですのねえ。あんなにたくさんのお侍たちが、まるで麦みたいにバッサバッサと刈りとられて――」

「おれは、大名とか旗本とかは大きらいだ。腕もないのに、父祖の功を鼻にかけて、むやみにいばりおる」

「あれ、くさり鎌でしょう？　……すごい」

「うむ」

「梵論字さま、そのくさり鎌、わたしに教えていただけません？」

「そなたに？　いや、それはむずかしい」

「でも、くさり鎌は、もともと女のならうものでしょう？」

「女のならうようなくさり鎌は、ものの役にたたん。刀や槍なら、木刀やたんぽ槍で修業できるがの。この術ばかりは、紐のさきにお手玉をつけてならうわけにはゆかぬ。あくまでも鉄の鎖と鉄の分銅と――修業中、十人のうち九人までは、生まれもつかぬ片輪になるか、落命いたす」

「命をおとしても、さしつかえございません。わたしたちは、親の敵をうたねばならない身のうえなのですもの」

「敵……わたしたちとは？」

虚無僧は、はじめて天蓋をかたむけて立ちどまった。

「仇討ちときけば、ききすてるわけにもゆかぬが……その獅子舞たちは、みんなそなたの弟か」

「まさか、十二三人の姉弟なんて……お大名の子じゃあるまいし――みんな親はちがいます。みんなの親が、ひとりのお侍に殺されたんです」

「はて、それは、どうして？」

「わたしたちの親は、みんな桑名の船頭でした。それが、三年ほどまえ、船賃をはらわないお客のもめごとから、或る酔っぱらいのお侍に、人参か大根みたいに斬り殺されてしまったんです。……」

娘は涙ぐんだ。

「家族は、みんな、乞食にでもおちるほかはありません。でも、あのにくいお侍を討って、かたきをとりたい。……それで、わたしは、おなじ望みの子供たちをつれて、西や東、獅子舞でその日その日をくらしながら、時のくるのを待っているの。……」

しゃべっているうち、うしろの子獅子たちも、みんなはなをすすりあげはじめる。

「時がくるのを……いつ、その時がくるでしょう。敵は、だれにきいても恐ろしい名人らしい。……だから、わたし、梵論字さまに、あのくさり鎌を教えてもらいたいと。……」

虚無僧もしめッぽい声になって、

「で、その敵の名は？」

「郡山、松平下総守さまの御家中で、御師範役の荒木又右衛門。——」

「おおっ、それなら、柳生の高弟じゃ」

虚無僧の声が急に鋼のようにひきしまったかと思うと、満天の雲雀の声の下に、しばらくじっとかんがえているふうであったが、やがて丁と尺八で掌のひらをたたいて、

「ウム」

と、うなずいた。

「おもしろい。敵は柳生流の名人、こちらは娘と子供ばかりの一文獅子、こりゃ知らぬ顔してわかれては、おれの武士がたたぬわい。……」

——それから、ちょうど十日ばかりたった六月末のこと。

郡山、松平下総守忠明につかえて二百五十石の知行をとる師範役の荒木又右衛門は、一日、北の方わずか一里半の奈良にあそんでのかえるさい、路上でふしぎなものをみた。

郡山城の天守閣が、まひるのように浮かんでみえる月明の夜だ。

「お、あれは？」

馬上の又右衛門、思わず手綱をひきしめたのもむりはない。街道のゆくてに、ズラリとならんだ小さな獅子の群。それが、この夜ふけというのに、いっせいに笛と鉦の交響もおもしろげにあるいてくる。

若党の森孫右衛門が、

「獅子舞の子供たちでございますな。……しかし、ずいぶんたくさんで」

「それはわかっておるわ。それより、きゃつら……なんとなく、われわれをからかっているようではないか」

「へ？」

なるほど、獅子舞たちは、こちらの姿をあきらかに見とめつつ、なお笛太鼓もいよいよにぎやかにおどってくる。蒼い月明りの底に、それはまるで妖精の乱舞のよう。

十間……七間……五間。

三間のところで、さすがに彼らはついと横の松林にそれた。しかもまだ笛と鉦をはやしつつ、

そのなかへおどってゆく。

「武右衛門」

と、又右衛門は、もうひとりの若党を呼んだ。

「おまえは、さきに家にたちかえれ。わしは、孫右衛門と、きゃつらを追ってみる。どうもおかしな奴らだわい」

小くびをかしげつつ、馬上の又右衛門と若党の孫右衛門は獅子舞たちを追った。松林をぬけて、丘をまわり、ただ灌木の生えた空地のなかへ。

「や？」

ふたりが、ふと立ちどまったのは、ほんのいましがたまで聞こえていた笛太鼓、見えていた獅子舞たちの姿が、忽然ときえていたからで。――と、その一瞬、

「それ！」

どこかで、ひと声合図が聞こえると同時に、びゅっと月光のなかをとんできた十数条の紐。しかも紐のさきに小石がむすびつけてあったらしく、きりきりと若党と――馬の四肢にからみついた。

「わっ」

とさけんでぶッたおれる孫右衛門と馬。もっとも、馬は、わっとはさけばなかったが。――たちまち、四方の灌木のしげみから、ムラムラとその紐をにぎった少年の群がわき出した。

「しめた！」

と、さけんで、屏風倒しになった馬を見て、ぎょっとした。たおれた馬のそばに、又右衛門の姿がない。

鎖の騎士道

「なに奴？」

声は、そこから二間もはなれた草のうえから聞こえた。たおれる馬から宙をとんだ荒木又右衛門、はや抜きはなった刀身をぶらさげて、すッくと立つ。

傍の松の樹かげに、きらりとひかりが浮動した。娘がひとり刃をかまえて立っていたが、さすがに又右衛門の早業に圧倒されて、しばらく茫然と声もないようすであったが、やっと胸をあえがせて、

「やあ、親の敵、荒木又右衛門」

と、鈴のような声をしぼってすすみ出た。

「なに、親の敵とな」

「おお、われらは、三年前、おまえに殺された桑名の船頭の子、いざ尋常に勝負におよべ」

「――いや、尋常に勝負はできんのう」

と、べつの声がして、うしろの樹かげから、虚無僧があらわれた。

「さすがは音にきいた荒木又右衛門。ひとすじ縄ではゆくまいと思うて、十数本——とりあえず子供らに投げ縄を教えてみたが、その目算みごとにはずれたのう」
カラカラと笑って天蓋をぬぐ。
あらわれた顔は、又右衛門と同年輩の——三十をちょっとこしたくらいだろう、総髪の蒼白い額、片頬に皮肉と叛骨のよどんだ笑いがあるが、眼には——存外、澄んだひかりがある。腕がありながら、運命と意地で流浪の生活をおくっている男特有の凄みをおびた顔だ。
「事情はいまこの娘が申したとおりだ。又右衛門、義によって、この山田真竜軒が助太刀いたす」
「なにっ、山田真竜軒？」
「いざまいるぞ！」
その名を知っていたとみえて、荒木又右衛門、鞭のように六尺もうしろへはねとんだ。
——どうじに、一瞬、凍りつく月光。
山田真竜軒、左手に刃わたり七寸の鎌をかまえ、右手を虚空にまっすぐにあげている。ほとんどそれはうごいているともみえないが、その静止した右手のこぶしから、ブーンとうなりをたてて空中を旋回しはじめた鎖。それは四尺か五尺のながさだが、なお左右の手のあいだに四五尺ぶんの鎖がたぐりのこされている。まわる鎖のさきには、八角の鉄分銅。
鎌がくるか、分銅がくるか。——荒木又右衛門、蒼白な顔になって、かまえは、丸木橋をわ

たるがごとく、からだの重心をとりつつ、ただ鍔を楯とし、敵のかかるを待つ柳生流丸橋のかまえ。
「えほっ」
かけ声もろとも、真竜軒の鎌が月光をはねた。せきれいの尾のように、ぴっと又右衛門の太刀がうごいたが、うねってきたのは一条の鎖。
「——うむっ」
さっとまた荒木はうしろへとんだが、はっと眼を拭くと、鎖の分銅は依然として真竜軒の頭上を旋転している。いまとんできたようにみえた鎖は、はやたぐりよせられたのか、それともこちらの幻覚であったのか、又右衛門にはわからなかった。
「旦那さま！」
悲鳴をあげたのは、子獅子たちにグルグル巻きになっていた森孫右衛門。彼は、この主人が敵と相対して、はじめて灰いろの額にあぶら汗をしたたらせているのをみた。
「旦那さまあ！」
又右衛門が肩で息をしたのをみて、真竜軒はきゅっと笑った。とたんに又右衛門、ほとんど必死の気力をしぼってうちこんだ逆風剣の太刀！　ぎりぎりっと鉄と鉄が触れ鳴った。
真竜軒はすでにとびのいて仁王立ちになっているが、その鎖はピーンと荒木の刀身にからみついている。

「……しまった！」

もとより、その声はでない。じりっと恐ろしい力でひかれる鎖にたよろうとすれば、相手の鎌が銀鱗のごとくうごく、その方に気をとられれば、またじりっと刀もろともまえへひきずりよせられる。……

九尺……七尺……五尺……

その刹那、又右衛門の全身が或る跳躍にうつろうとし――その機先を制して、不敵な真竜軒の笑いがながれた。

「講談ではな、又右衛門」

と、彼はすずしい顔でいうのだ。

「このとき――おぬしがその刀をはなす。わしがひっくりかえる。間髪をいれず、おぬしがとびかかって、小刀でわしを斬る。――ということになっておるがの。わしはそれを知っているから、その手はくわんぞ」

どっと子獅子たちが笑った。

「だいたい、左様なことを勘定にいれぬほど、くさり鎌が甘いものと思うか。それ、そのような場合のために、わしの左手には、まだ四尺の鎖がのこっておるではないか。それがみえぬ馬鹿は講談師と荒又くらいなものだ」

ぐたっと又右衛門のからだから力がぬけ、真竜軒の鎌が大きくふりかぶられた。――と、そ

のとき、ふっとその鎌が空にとまった。

「ちょっと待て」

むこうの松林を四つ五つの提灯が、右に左にながれている。ただごとでない叫びが聞こえた。

「又右衛門さま、又右衛門さまはどこにいられますするかっ。たいへんっ、大変でございまするぞ！」

「仇討ち、仇討ちのお旅にお出かけにならねばなりませぬ。いそぎお邸におかえりをねがいまする！」

真竜軒は妙な顔をした。

「なに、仇討ち？」

そして、声をあげて呼んだ。

「おうい、荒木又右衛門はここにおるぞ。仇討ちとは、なんのことじゃ？」

息せききってはしってきた提灯は、この草原のふしぎな決闘の景をみて、あっけにとられてたちすくむ。荒木家の若党か下男らしいが、そのなかに、赤い羽二重黒羽二重の袷に、ぶっさき羽織、いま旅からついたばかりのようすの美しい前髪の若衆があった。

「なんじゃ、仇討ちとは？」

と、真竜軒がきく。若衆はけげんな顔で片ひざをついて、

「義兄上、数馬でございます。ただいまいそぎ岡山からまいりました。この二十一日の夜、同

藩の河合又五郎のために、弟源太夫が討たれてござります。敵又五郎は、旗本をたよって江戸へはしった模様(もよう)。拙者はこれより仇討ちの旅に出ますが、義兄上、なにとぞ数馬めをお助け下されませ」

「ほう、河合又五郎が、旗本に？　……又五郎とは、もしや、あの河合半左衛門の伜ではないか？」

と、真竜軒がつぶやいて、しばらくかんがえていたが、急に右手をはなして、鎖をゆるめた。

「いや、それはおもしろい。旗本八万騎を相手の仇討ちとは、こりゃこっちの仇討ちより大がかりで、どうしたって講談ダネじゃ。こっちが先口だが、まずあとまわしとする。又右衛門、すぐに仇討ちの旅に出い」

おどろいたのは又右衛門より獅子舞たち。なかでもキリキリと柳眉(りゅうび)をさかだてたのは、れいの娘、ヒシと真竜軒にとりすがって、

「山田先生、それは！」

「まあ、待て、お蝶、怒るな怒るな。不服ではあろうが、そこが武士の情じゃ。ここで又右衛門が討たれては、仇討ちがひとつ消える。まず又右衛門の仇討ちをしとげさせてやれ。しかるのち――」

真竜軒は、妖(あや)しくひかる眼で又右衛門を見すえた。

「又右衛門の首は、きっとこの鎌でかきとって、そなたにくれてやろうわい」

真竜軒女難旅

伊賀上野鍵屋(かぎや)の辻の仇討ちの発端(ほったん)は、いちおうは、交代の道中で、白馬にゆられる絶世の美少年渡辺源太夫のあで姿に悩殺(のうさつ)されつくした河合又五郎が、ついたまりかねてモーションをかけ、肘鉄砲(ひじてっぽう)をくらってのぼせあがり、これを殺したことからはじまるのだが、その遠因はとおく二十数年前にまでさかのぼる。

又五郎の父河合半左衛門は、もと旗本安藤右京之進の家来であったが、一日、朋輩(ほうばい)と私闘をおこしてこれを殺し、進退窮して、岡山三十一万五千石池田忠雄の行列にかけこんだ。備前侯はこれを助けて半左衛門を安藤家にわたさなかった。これは大名対旗本の対立を如実に具象化した一例として、いまもひとびとの口にのぼる事件であったから、真竜軒も、さてはと思いあたったのだ。

その半左衛門の子、又五郎が、こんどは池田侯の寵童(ちょうどう)を殺して、逆に旗本のところへにげこんだ。

「いや、これはおもしろい」

と、真竜軒がひざをたたいたのは、そのなりゆきのはてを思いやったからだが――なるほど、ことはまさにおもしろくなった。

なんと、又五郎は、江戸にある安藤の一族のもとへかけこんだのだ。果然、安藤家では、父

の罪を以て子にむくいるどころか、これをかくまって備前侯にしッぺがえしをくわせようとし、池田家からの厳談に、「さらば、半左衛門をおわたし下されば、又五郎はおかえし申す」とうまいことをいって半左衛門を受けとると、又五郎をひきわたすどころか、知らん顔の半兵衛をきめこんだから、一パイくわされた備前侯、カンカンになって、「三十一万五千石を棒にふってもいいから又五郎をつかまえろ」というさわぎになった。

安藤家対池田家の争いは、そのまま旗本対大名の争いに発展する。

——さて、その又五郎をもとめて、深編笠、ぶっさき羽織の荒木又右衛門、渡辺数馬、若党ふたりの一行が江戸へたつ。渡辺数馬、源太夫の姉が、荒木の妻という縁なのだ。

それを追って、入道雲のわく東海道を下る山田真竜軒、お蝶。——それに、豆つぶのような少年獅子のむれ。

このあたりは、寛永武士道の象徴のような、すこぶる壮美な光景だったのだが。——さて、その結果は。

「それはおもしろい」

真竜軒にとって、そんな太平楽な事態ではなくなってきた。

というのは、大名たちがさわげばさわぐほど、意地になった旗本連、八万騎を動員して又五郎をかくすことにかかったから、どこに又五郎がいるかわからない。半年たち、一年たつ。

「先生、わたしたちは、いつ又右衛門を討てるんです」

「ゆるせよ、お蝶。いましばらく待て、武士道じゃ、武士道じゃ」

ながい旅のあいだには、病気する子供もでる。多人数のことだから、きょうの飯代にもさしつかえのできることも起る——じぶんがいい出したことだから、真竜軒、責任上、すててもおかれない。

そこでやむを得ず鉄鎖鬼山田真竜軒、獅子舞のあとの余興に、大道でくさり鎌の曲芸をごらんにいれる破目とあいなることもしばしばだ。世を白眼にみているが、それだけ武術一点ばり、自負のこころつよい真竜軒が、曲芸を演ずるときの哀愁にみちた顔よ。春風秋雨、また一年。

「真竜軒さん、仇討ちはまだ?」

「すまぬ、お蝶さん、もうすこし待ってやってくれ。わしの武士道をとおさせてくれい。……」

この対話をおききになってもわかるように、どうもふたりのあいだの勢力関係が、だんだんあやしくなってきた。

それにしても、いやお蝶の美しくなったこと。はじめ風にそよぐ野花のようだった小娘が、いつしか、あどけなさはどこかのこしつつ、その女豹のような野性が、眼に妖艶の灯をともし、唇に真紅の花をひらいて、全身から処女の匂いがもえたっている。

——左様、お蝶は処女なんです。ことばとは反対に、お蝶、いつしか真竜軒を恋しはじめた

らしく、なにかのはずみに、ぞっとするほどの色気がこぼれるが、真竜軒、眼をつむってがんばっている。なぜかというと、ここでお蝶と妙なことになれば、仇討も助太刀も、匹夫下郎のわざとなる。それではこの真竜軒の武士道がすたるわい。——

「竜軒さん」

「わかっておる。わかっておるわい、お蝶どの」

とうとう、真竜軒のアタマの方はなくなってしまった。そのうち、ケンさんだけになるかもしれない。山田真竜軒、すっかり女性恐怖症にかかっちまいました。——そうして、また一年。

それはいいとして、河合又五郎をさがして、江戸へ、京へ旅する荒木又右衛門。おしまいには、その一行もゆくえがわからなくなってしまった。さあ、一大事、このぶんでゆくと、山田真竜軒、ぜんぜんショタイじみて、一世の剣妖の面だましいを消磨しつくしてしまうかもしれない。……

——幸か不幸か、運命の幕は、天からきっておとされた。時の将軍家光が、天下の名剣士を召して、江戸城吹上でその妖術をごらんになる催しがあったのだ、時に、寛永十一年九月二十二日。

すなわち、世にいう「寛永御前試合」

山田真竜軒もこれに召されて、奥州きっての使い手といわれる伊達家の伊井直人と試合をし、これをやぶった。しかるに、この勝負にかぎり、そのあとに妙な一幕があったというのは。

この伊井直人の奥さん、貞女、これがたいへんな烈女でございまして、夫をそれまでの剣客にしたのは、このお貞さんの叱咤鞭撻のおかげだといわれるくらい。——その夫が、真竜軒にうちやぶられたのをみると、きりきりっと眼じりがつりあがって、

「ええ、ふがいない旦那さま。それではこの貞に、真竜軒どのと試合させて下されませ」

と申し出た。

薙刀こわきに出場してきた貞女の顔をひとめみて、山田真竜軒、ゲンナリとした。この烈女の顔の……いや思いつめたその印象の、なんとまあお蝶に似ていること。……山田真竜軒、うまれてはじめて敗れました。

「ホホウ、真竜軒どの、がらになく御婦人に対するエチケットをお心得でござるな」

と、なみいる剣士たちは微笑したが、なに真竜軒がまけたのは、かならずしもエチケットばかりではなく、その実、彼の心胆をおびやかす女性恐怖症のせいで、これを知っているのは、苦笑いをしている本人ばかり。

蛟竜、球を失いぬ

「よい知らせじゃ。吉報があるぞ、お蝶どの」

その夜、神楽坂ちかくの安宿にもどってきた真竜軒、めずらしく眼を生き生きさせてお蝶によびかけた。

もう、めざしをならべたように眠っている少年たちの枕もとで、獅子がしらの手入れをしていたお蝶は、ぱっと顔をかがやかせて、

「先生、勝った？」

「いや、まけたまけた。しかも、女にまけたよ。あははははは」

真竜軒はカラカラと笑って、

「吉報と申すのは、そんなことではない。荒木に会ったのじゃ。荒木もきょうの上覧試合に出おったわい。宮本武蔵の養子伊織とたちあって、これは相討ちであったがの。……なにはともあれ、これで荒木はつかまえた。きくところによると、木挽町の柳生家に逗留しておるそうな。まず安心せい」

「それで、河合は？」

「それはまだわからんが」

「真竜軒さん、それでまだ又右衛門が河合を討つのを、こうして待っているつもり？」

真竜軒は眼をつむり、頭をかかえて、

「弱ったのう。まったく以て面目ない……」

「面目ないなんて、先生、先生が又右衛門じゃあるまいし」

「いや、まったくばかげた役まわりじゃと、自分でもあきれておる。じゃが、ここまで待ってやったうえは、もうひといきの辛抱――」

といいかけて、涙のかがやくうらめしそうなお蝶の眼をみると、指をおって、

「十一、十二と……お蝶どの、もうことしもあと三月とちょっとじゃ。せめて、この年いっぱい待ってみようではないか」

――その夜だ。お蝶の涙の洪水におぼれる夢にウナされて、真竜軒眼をさました。

ふっと、むこうの壁にかかったくさり鎌をみる。どうもおかしい。……よくみると、たれさがった鎖のさきに分銅がない。

がばと真竜軒は起きなおった。少年獅子たちのめざしのむこうをのびあがってのぞきこむと、お蝶の夜具はペチャンコだ。真竜軒は小くびをかしげ、眼を宙にあげていたが、突然、

「おおっ。しまった！」

とさけんだ。

夜の江戸の町を、お蝶はヒタばしりにはしっている。獅子舞装束に刀を一本腰にぶちこんで、眼をかがやかせて、木挽町へ、柳生の道場へ。

もはや、真竜軒先生はたのまない。あのひとはすっかり愚図な駄馬みたいになっちまった。仇討ちをいつまで待ってもキリがないし、試合には負けたといってしゃぁしゃぁとしているし。――それでも彼女は、泣きながら、真竜軒や子供たちの寝顔におじぎをして、さて決然として宿をはしり出したのだ。

しかし、お蝶としても、荒木の腕は知りすぎるほど知っている。とうてい、尋常にたちあっ

て勝てる相手ではない。くさり鎌の手ほどきはいちおう真竜軒にうけたが、それがものになっているとはじぶんでも思えない。重い鎖がむしろじゃまになるのだ。

彼女は、胸に鉄のたまをいだいていた。くさり鎌の分銅だけははずしてきたのだ。これを荒木の顔にたたきつけ、ひるむところへ斬りこんで討つ。——それがお蝶のかんがえた、せいイッパイの兵法だった。

荒木は天下に名だたる柳生の大道場にいる。なみたいていのことで会えようはずがないが、お蝶はそこまでかんがえない。しかも——ああ、天なり、命なり、彼女は荒木の姿にまみえることができたのだ。

その夜、柳生家で祝盃をあげている又右衛門のところへ、客があって、河合又五郎が上方にいる、という情報をもたらしたのである。これを送って又右衛門、柳生家を出て、とちゅうでわかれ、三十間堀の土橋のところまでかえってきた。

この夜、あたかも満月。

酔眼もうろうたる荒木の眼に、星が——いやその月がながれた。とみえた刹那、彼の眼前七寸のところで鏘然たる鉄の音が散った。月光をはねて、いずこともなくとび来った鉄丸を、又右衛門、大刀の鞘もろともにぬきあげて、発止とその柄ではじきのけたのだ。

そのときはやく、このときおそく、彼の前方五尺の橋上に、ひとりの娘がたっている。いや、疾風のごとくはせよってきたのが、そこで、まるでみえない鉄壁にささえられたように棒立ち

になってしまったのである。

満月をあびて、その白蠟のような顔のなんたる美しさ。かっとはりさけるほど見ひらいた黒耀石の瞳。その瞳から、しずかに涙が頬につたいおちる。——と、その右手にひっさげていた刀が、ポトンと地におちた。そのとき、娘の顔に、ひたいからのどにかけて、ほそく、ほそく——すうっと絹糸のような黒いすじが浮かび出した。

「……綱はさわがず、太刀さしかざし、なんじ知らずや、王地を犯す、その天罰はのがるまじ……」

又右衛門、ひくく謡い出して、懐紙で刀身の血しおをぬぐう。いつ抜きはなっていたのかわからないが——そのとき、娘の顔のすじが、凄惨な墨汁のようににじみひろがったかとおもうと、その上半身が胸までふたつに裂けて、どっと地上にくずれおちた。

——こういう非情な描写は、むかしの講談にはありません。が、どうにもしかたがないんです。これは近代的講談なんだから。

「鉄杖をふりあげ、えいやと打つを、とびちがい、ちょうと斬る」

ユラリ、ユラリとあゆみ出す又右衛門、千鳥足でいいきもちそうだが、橋のたもとまできたとき、どうしたのか、冷風に吹きはたかれたように、全身を独楽としてぶンまわした。

——斬りすてた娘のかばねに、灰白色のものが、ぼやっとおおいかぶさっている。それがしずかにたちあがって、一個のひとかげとなった。

「山田真竜軒！」
　名状しがたい又右衛門のうめき声がはしる。
　真竜軒の眼に涙がひかっていた。涙のおくから、死魔のようにぶきみな妖光が、はたと又右衛門を射た。
「荒木――その方の仇討ちまで待つといった約定はやぶる。おぼえはあろう。冥途へいって、あらためてこの娘に敵を討たれえ」
　陰々たるうめきの尾につらなって、その頭にうなりはじめた死の音。――鉄鎖の音。
　ぱっと又右衛門の刀身が鞘をすべり出た。対峙すること三間。――数秒ののち、殺気と酔いにもえたぎる又右衛門の眼が、にっと笑った。どうじに、真竜軒の顔に、運命の黒雲のように或る動揺がゆらめきはしった。
　分銅がない！
　くさりのさきに、鉄球がないのだ！
　するすると、又右衛門がすすみよりはじめた。世にもむなしい音をたててまわっている空鎖の円周の下で、はや死固したような山田真竜軒の面から、蒼い月光がうすれる。
　大空に、みだれ雲がさざなみのようにひろがり出したのです。……
　一世の剣豪荒木又右衛門が、敵河合又五郎を討って、めでたく仇討本懐をとげたのは、それからわずか一ト月半後、寛永十一年十一月七日のこと。

悲恋華陣

血の砦

夕暮のように暗澹とたれこめた鰯雲のあいだからながれてきた黎明の最初の光が、城の、銃弾にけずられた甍や、矢羽根のつきささった壁や、まるで冥府の門のように陰鬱凄惨な櫓門などをてらし出した。

「つッ、痛う。……」

「みず——水をくれえ……」

「粥を一椀……粥をくれえ……だれか、粥を。……」

櫓門の内側のひろい庭には、まぐろのような負傷者のうめきや絶叫がみちていた。裂けた腹巻のあいだから腸のあふれ出ている者がある。折れた槍をつかんだ腕が、ほとんど肩の附根からちぎれかかっている者がある。いままで、風笛のようなあえぎとも叫びともつかぬ声をもらしていた者が、急にだまりこんだかと思うと、頬を地につけて、そのまま永遠に動かなくなっているのだった。

「どなたか、砥堀孫太夫を御存知ではござりませぬか？」

「牛島市之助は？」

その負傷者を縫って、眼をつりあげてかけまわる女たちの足もとから、白い埃がたった。呼びもとめているのは、その父か、夫か、子か？　いくたびか目撃し、覚悟していた光景ながら、なおあげずにはいられない狂乱の呼び声であった。

うちのめされた手負いの群は、まだ櫓門の下をくぐってつづいている。みんな乱髪に蘇芳をあびたような血潮にそまって、刀を杖に、夢遊病者のようにあるいていた。

「左馬之助さまはもどりませぬか？」

そのいたましい行列を、さっきから、前にゆき、うしろにはしって、こう叫んでいる娘があった。

「葉山左馬之助を見かけた方はござりませぬか？」

無我夢中で、手負い武者の顔をのぞいてまわっている。ときどき眼をかがやかせてかけてゆき、急に頬をひきゆがめて絶望の表情になり、またはしり出す。

「左馬之助さま、左馬之助さま。……」

まるで幼女のような泣き顔である。すすり泣きが、のどのおくからあふれて、しかもまだ憑かれたように、前へ、うしろへ、敗軍の武者たちの顔をのぞいてあるいている。

「沙羅っ……沙羅。……」

ゆきかかって、たちもどり、ふいに娘の肩をつかんだのは、さっきから、ともすれば倒れ伏そうとする負傷兵たちを叱りつけ、なぐりつけ、必死に激励していた、白髪の老武者である。この城の副家老粕谷玄蕃であった。

「父上さまッ、左馬之助さまは？」

「見えぬ」

と、うめくように答えてから、娘の頬が白蠟のようにかたくなり、瞳がうつろにひらいて、ふらりと崩れおちかかるのをみると、

「不覚者め」

と、声を張って叱咤した。

「めめしいぞ、沙羅。今日あって明日のないのがもののふの道じゃ。存ぜぬこともあるまいに、うつけ者め。殿の御家来は、葉山左馬之助のみではない。ゆけ！　いって、手負いに粥などすすめてやれい！」

「はいッ」

と、いったが、娘は首をたれて、しばらく動かなかった。

城外遠く、敵のときの声と、びょうびょうたる法螺貝の音がひびいてきた。

天正七年九月十日は、播州三木城にとって、何たる不吉な日であったろう？　頑強、堅守、よく十八カ月をこえる年月にわたって、名にしおう織田の大軍をささえてきた城兵が、乾坤一

擲の反撃を敢行し、しかもむなしく徹底的な冷水の飛沫をあびせられたのが、その暁であった。

西国に牢固たる毛利と、東に勃興した織田との両勢力の接触点に立つ播州三木城別所一族が、ついに毛利をえらんで織田に叛旗をひるがえし、羽柴筑前麾下の大軍が殺到してきたのが天正六年春三月。

さしもの秀吉をして攻めあぐねさせ、間接的ではあるが、この播州陣のあいだに、山中鹿之助、竹中半兵衛らを失うの犠牲をはらわせたが、相つぐ攻防戦に、衆寡敵せず、周辺の支城をうばわれ、しだいに糧食にきわまってきた城兵であった。すでに馬は屠った。草は喫した。壁は喰った。このうえは、人々たがいに相食むのほかはなかった。

「三木城飢餓についえんとす」

この飛報に、さすが鈍重の毛利もついに冒険的救援の手をさしのべてきた。陸づたいに兵粮をおくりこむなどということは、とうてい精鋭羽柴軍のたやすくゆるすことではない。そこで吉川元春、小早川隆景みずから二百艘の兵粮船を指揮して、魚住にきずいた橋頭堡から、包囲軍を突破し、どうじに城からも出撃して連絡し、糧を三木城にいれようとはかった。九月十日の夜明前である。

炯眼なる秀吉、なんじょう以てこれを見のがすべき。かくて封鎖網を突破しようとする城兵と、これを殲滅しようとする羽柴勢とのあいだに、兵粮をめぐって、凄惨きわまる死闘がくり

ひろげられた。——が、たたかい利あらず、雪崩をうって潰走する城兵のなかに、主将別所山城の姿を目ざとくも見とめた秀吉は、名代の荒小姓群に、黒つむじのごとき追撃をかけさせた。山城守のいのちは危急にせまった。

帰ってきた男

「……そ、そのときでござる。——そのとき、乱軍のなかから馬をかえしてただ一騎、これはさんぬる丹生山の合戦に、猿面冠者の胆をひやした淡河弾正なり、われと思わんものは寄れヤッとよばわりつつ、ま、摩利支天のごとく敵中にわって入られた。……」

戸板の上で、血の泡を口にうかべながら語るのは、手負いのひとりである。その手を握りしめたまま、粕谷玄蕃は大きくうなずいている。沙羅は胸を波うたせてききいっていた。

「それをみるより、また一騎、それがしお供つかまつる、と叫んであとにつづいた若武者が——だ、だれあろう、は、葉山左馬之助どのでござった……」

淡河弾正とは、三木城の東北にある淡河砦の主将で、それがこの三カ月ばかりまえに落ちてから、本城に合流していたもので、葉山左馬之助はその四天王のひとりといわれていた男だから、このふるまいは当然のことともいえる。

手負い武者は顔じゅうを血と涙にひきつらせながら、悲壮な退却戦の情景を物語るのだった。

もみにもんで追撃する羽柴軍に、山城守をとりかこんで敗走する城兵のなかから、淡河弾正

と葉山左馬之助がとってかえしたのを手はじめに、十騎二十騎、死の楯となってふみとどまり、みるみる乱軍のなかにのみこまれた。それから数町、またも怒濤のように追尾してくる敵に、さらに数十騎が突撃していった。——こうして、山城はついに虎口を脱して帰城することができたのである。

「娘、きいたか、沙羅よ。……」

粕谷玄蕃は涙声でふりむくと、膝をうって哄笑した。

「左馬は別所のさむらいじゃった！　これで、おれもおまえも、ずんと鼻が高うなったわ。——これ、泣くな！」

「……は、はいッ」

沙羅はしぼり出すようにいった。頬は涙にぬれつくしていたが、必死にかたい微笑をつくろうとしていた。

淡河弾正といえば、羽柴方にも無双の弓取と知られていた勇将である。その四天王の随一とよばれる葉山左馬之助と沙羅とは、玄蕃もゆるした許婚の仲であった。しかし、しょせんは、悲風蕭々たる孤城のかげに咲き、戦国の世の炎のなかにはかなく散ってゆく朝顔の恋であった。

——惨憺たる敗軍の日の夜、すでに魚住の毛利軍は、海上より撤退し、一方、橋頭堡を焼きはらい、ダンケルク戦国版を演ずることをおそれて、包囲軍はその鉄環を圧縮してきた。秀

吉はその塁を城の五六町ちかくまで接近させ、その前に丈余の複墻(ふくしょう)をきずき、望楼をたて、さらにその前に鹿柴(ろくさい)をうえ、柵(さく)をむすんだ。また、三木川、志染川(しそのがわ)には水中に杭をつらね、縄をはり、数千の哨兵を配置した。

もはや蟻一匹はいでる隙もない。三木城は餓死を待つのみとなった。しかも、城兵の士気はなおおとろえず、彼らの眼は、ひたすら復讐の悲涙にただれているのだった。

……その城へ——あの暁から三日めの夕、死んだと思われていた葉山左馬之助がかえってきたのである。

すぐに、大殿へお目通りにあがったと聞いて、沙羅はウロウロした。じっと坐ってはおられなかった。

「左馬之助さまは——」

天守から退ってくる人々に、沙羅は我慢もなくすがりついてきいていた。

「左馬之助さまは、どうでございます？」

「生きておるぞ。ちゃんと両足もあるぞ」

「き、傷は、もしや」

「かすり傷じゃ。傷は浅手ばかりじゃよ」

「お、お顔のいろは？」

「あはは、左馬より、沙羅どのの顔いろの方がただごとではないわい。うれしいか、沙羅どの。

なに、いまに退ってこよう。遠慮なく力いっぱい抱きつくがよいぞ。わははははは！」

暗闇(くらやみ)に灯をみたように、みんな哄笑(こうしょう)していた。狂喜のように沙羅も笑った。

「沙羅どの、よいか、こんどは、明日にも祝言をあげるのだぞ。どうせ、この城のいのちも——」

そうだ、そうしよう、父にねがおう。左馬之助さまと祝言さえあげれば、この城が明日にもおちようと、なんの哀しいことがあろう。

雨模様の真っ暗な夜空を、ときどきうなりつつとびすぎる敵の銃丸(たま)の音の下に、沙羅はうっとりと待っていた。

左馬之助が本丸からさがってきた。ただひとりである。

「左馬之助さまッ」

ふいに闇のなかからかけ出していった沙羅をみて、左馬之助はたちどまって、こちらをみた。片手にもった灯に、その眼が血いろにひかった。がくがくふるえていた沙羅は、恋人の狂気のような抱擁(ほうよう)を予感して、酒に酔ったような眼をなげた。その瞬間、左馬之助は一足よろめくようにさがって、ひくい、しずんだ声でいった。

「待たれい、沙羅どの。……お父上は、御本丸からおさがりか？　折入って、内々、申しあげたいことがある」

比翼茶碗

「なに、左馬之助が参ったと？」

白い灯の下で、陣刀の柄糸をつくろっていた粕谷玄蕃は、驚愕と狂喜のさけびをあげてたちあがった。多聞長屋のうち、着到櫓につづく玄蕃のすまいであった。

入口にからみつく蔦のかげに鳴いていた虫が、あわてて四方にとびちった。大手をひろげてはしり出してきた玄蕃は、いきなり若者の肩をしっかり抱きすくめていた。

「左馬、左馬、よくかえってくれたぞ。左馬、左馬。……」

白髪をぐいぐいと相手の頰にこすりつけて、まるでじぶんの息子の凱旋をむかえる父親のように、この副家老は、こけた頰に涙をつたわせているのだった。

「御家老さま。御家老さま……」

左馬之助は苦しげに顔をふってよろめいた。なかに入って、いそいそと茶碗などをとり出しながら、声をたてて笑っていた沙羅は、愛くるしく眉をしかめた。

「ほほほほ、父上さま、かんにんしてあげて下さいませ。左馬之助さまはおつかれでございますもの」

「なんの、なんの」と、老人はじぶんの歓喜に浮かれきっていっそうがむしゃらに左馬之助を抱きしめながら、

「おれは、さっき大殿の前に出た左馬を見ながら、なんどこう抱いてやりたいと思ったことか！　が、今夜はきてはくれんとかんがえておった。さすがはおれの婿どのじゃ。ひょろひょろしながらもきおったではないか？　これが抱いてやれずにおらりょうか、左馬、さああがれ、お茶など呑め、沙羅、これ、比翼の茶碗を出しておけよ」

沙羅はいま拭こうとしていた茶碗をながめて笑った。それは唯一の家宝である比翼の鳥をえがいた茶碗だった。

玄蕃はなお、気が狂ったようにしゃべりつづけている。

「きさまが死んだと思って、沙羅は泣いたぞ。だが、おれは叱ってやった。あのような天っ晴な討死をとげた婿じゃ。家門のほまれと笑えとな。……それが、どうじゃぶじに敵方の虜にもならず生きて帰ったとは！」

「御家老！」

恐ろしい声で、左馬之助は叫んだ。

抱きしめていた老人の手は、はじかれたようにふりはなされ、左馬之助は二三歩たたらをふんであとにさがると、肩であらい息をしながら、闇にうすびかる眼をしばらく老人の顔になげていたが、突然身もだえしながらこう叫んだ。

「それがしは、戸田左門どのに逢い申した。……」

「なにッ」

老人は雷にうたれたように、よろめいていた。一瞬に顔をいろどった驚愕(きょうがく)をふりおとすように、片掌を耳にあてて、
「なに、何と申した？」
「それがしは、小寺どの身内の戸田左門どのに逢ったのでござる。……」
老人の眼球はとび出さんばかりであった。口は、茫然(ぼうぜん)と暗い孔をつくったままであった。その一瞬に、彼は一切の思考をうしなったようにみえた。が、たちまちその額にむくむくと血管がふくれあがり、両のこぶしがふるえわななくと、嗄れた笛のような恐ろしい叫びを発した。
「うぬ、うぬは……虜となったのだな！」
がっくりと首をたれたまま左馬之助はたちすくんでいた。嵐のような玄蕃の息の音がきこえた。――が、やがて老人は突然しずかに、まるで哀願(あいがん)するような調子でいい出した。
「それでは、きさまの、大殿に申しあげた言葉、あれはなんじゃ？　気をうしなって、眼をあけてみたら大村の谷底であった――とたしかそう申したな？」
「気絶したことはまことでござる。ただ――気がついたときは小寺どのの陣屋のなかでござった」
「たわけ！　なぜ死なぬ」
「腰をさぐってみましたが、すでに太刀はおろか、首通しもござりませなんだ。……」
「舌を噛(か)め、きさまの手でくびれ」

「舌を噛もうといたしたとき、それがしの蘇生(そせい)した気配がわかったとみえ、ひとり、しずかに寄ってきて、若者、気がついたか？　と申す。――それが、戸田左門どのでござった。……それからまる二日間、責められてござる。城中、とくに兵粮(ひょうろう)のもようを告げいと。――それがし、一語も申しませなんだ。……」
「あたりまえじゃ！」
と、老人は憤怒(ふんぬ)の形相もの凄(すご)くさけんだ。
「そして、何故に、おめおめと城に帰ってきおった？　うぬ、その血泥(ちどろ)も、畜生狐のように、どこかの沼でぬたくりつけてきたものに相違あるまい。犬めが！　犬めが！」
「犬でござる！　まことにそれがしは犬でござる！」
がばと大地にひれ伏すと、左馬之助は慟哭しはじめた。
玄蕃は、炎のような、が残忍と冷酷をきわめた眼をすえていたが、ずかずかとちかよっていって、力をこめてその肩をつかんだ。
「申せ、うぬが――淡河弾正どの四天王の随一とうたわれた葉山左馬之助が、とりことなって死なんだわけを申せ」
「昨夜でござる。責苦(せめく)にうつらうつらしておったそれがしがもとへ、また戸田左門どのが参られて、若者、そちは粕屋玄蕃を知っておるか？　と申す。――なんでその名を忘れましょう、それがし、思わず渇いたものが泉の音をきいたように、おお粕谷さまと！　叫び申した。

……」

「──それで？」

と玄蕃はまたかすれた声でいった。すでになにかを予感したものか、その白い眉は或る恐怖のためにぴくぴくとうごいていた。

「二日、小寺の陣所にあって羽柴の軍の気をみまするに、その武具のそなわったこと、その士気のさかんなこと。……三木城のありさまとひきくらべて落城は眼前にせまっていると思い申した。──御家老！　それがし命は惜しみませぬ！　信ぜぬと申されるかも知れませぬ。が、それがしは、おのれの命は惜しみませぬ！　ただ御家老のお命と──せめては、せめては沙羅どのの命は助けたく存じ申した！」

地上に左馬之助は顔をあげた。

玄蕃は唇をふるわせたが、口はきけなかった。

「それで──それゆえに、戸田どのから貴方さまへの書状をわたすため戻ってきてござる。その書状はここに──」

玄蕃の足もとに一通の封書がなげ出された。

玄蕃は爪さき立ってあとずさった。

戸田左門は、左馬之助がいったように、小寺官兵衛の家老であった。どうじにまた粕谷玄蕃の刎頸の友でもあった。

別所の三木城、また小寺の御著城。──おなじく播州の居城の家老として、お互いの人物を熱愛し、傾倒し、まねかれた能に玄蕃が謡えば左門が舞い、まねいた鷹野に左門が指させば玄蕃が射、ともに剛毅な性だけに涙もろく、ともに老いているだけに清くふかく、それは組みあわされた二本の柱のようにたのもしい友情であった。しかも、ひとたび、別所叛旗をひるがえし、織田先鋒の小寺軍が殺到するや、その柱は、かなしくもがっきと噛みあった二条の刃とならないわけにはいかなかった。……

毛利加担の評定で、主君の傍に侍する粕谷玄蕃のぶ厚い胸を、すっとかげっていった一抹の雲は、ただこの不幸な友情のうれいのみだった。そうして、すでに落城ちかい昨日今日──着到櫓にのぼって、狭間から攻囲軍を見わたす玄蕃の眼が、つねにじっととどまるのは、小寺家定紋の藤の丸に三橘をえがいた旗であり、悲願はただ親友戸田左門の手にじぶんの首をわたすことであった。

（その左門が、いまさら、おれに何をいおうとするのか！）

なつかしい友の筆に、ふと玄蕃は酔ったように片手をさしのばし、ふらふらと腰をかがめそうなそぶりをみせた。

が、次の瞬間、かっと両眼をむき出して、

「──きさま、いま、おれの命を助けたいとか申したな？」

といった。熱病やみのようにかがやく眼で見まもっていた左馬之助は、かすかにうなずいた。

突然、老人はおどりあがって、その書状をはたと蹴った。

「けがらわしい！　見そこなったな戸田左門」

そして、月にきらきらする眼をはっしと左馬之助になげて絶叫した。

「おれの顔にも泥をぬりおった卑怯者め、死ね！」

片手を地についていた左馬之助は、急にこのとき朽木の折れるようにまた地上に顔を伏せた。

「それがし、御家老を見くびり申した。天魔が魅入ったとでも申そうか――申しわけござりませぬ、申しわけござりませぬ。それがし、腹切ってお詫びつかまつりまする！」

「いえ、死んではなりませぬ」

だまりこんで、石のように立ちすくんでいた沙羅は、このとき、ふたりのあいだにがばと身をなげ出すと、父の方へ蒼醒めた顔をふりあげて、

「父上さま、いま左馬之助さまがお腹をめされたら、ひとびとはなんと申しましょう？　わけをうたがわずにはおきませぬ。そして、きっとお城の士気はおちまする！」といった。

鞭でうたれたように玄蕃は沈黙した。沙羅は左馬之助にとりすがって、その肩をゆさぶった。

「死んではなりませぬ、左馬之助さま。いまさら死んだとてお殿さまへの申しわけはたちませぬ。犬死となりまする！　つぐないをなさりませ。生きて、かならず、このつぐないをなさりませ！」

左馬之助は水をあびたような面色になった。沙羅も幽霊のような顔つきに変っていた。髪をみだしたまま、ふらふらと立ちあがって、暗い地上を見つめながらつぶやいた。

「――それにしても……とりことは？……」

「沙羅、きさま、その紙屑をな、ひきさいて、やきすてて、灰は糞つぼへでもたたきこんでおけ！」

玄蕃は顔を覆って、蹌踉くように長屋の奥へきえていった。

左馬之助は泣いていた。その肩の傍に、沙羅がいつのまにとり落したのだろう、ぽっかり割れた、茶碗がころがっていた。連理の枝を二つに折り、比翼の鳥を二つに分けて――。

矢文

その翌日から、沙羅の様子がひどく変ってきた。面のように顔がひきしまり、眼は遠いところを見つめ、小鳥のように無邪気だった唇は、めだってことば少なになった。

「沙羅。――おまえの罪ではない。あまり気にやむなよ」

おなじ打撃にうちのめされていた玄蕃が、さすがに見かねてそうなぐさめたとき、彼女はさびしい片笑みの顔でうなずいてみせただけであった。

三人のあいだだけの恐ろしい秘密として、人々はなにもしらなかった。したがって、沙羅の様子の変ったことにも、もとよりちかしい女たちが、ときどきふっと彼女の顔を見つめて、小

首をかたむけるにすぎなかった。

　左馬之助の帰城した翌日の夜のことである。急用でお城の裏側にあたる茶畠のなかをいそぎ足であるいていたひとりの女房は、ふと遠い桐の木の下に、白いものがぼんやり立っているのをみて、息をのんだ。彼女は五六歩あとへ逃げはしってから、気をとりなおして、もういちどふりかえった。

　十四日の月が、雲間から出て、その白いものをはっきり照らし出した。

「お沙羅さまではござりませぬか」

と女房は叫んだ。

　それは沙羅だった。おそるおそるちかよってゆく女房の姿にも気づかないのか、彼女はじっとうごかなかった。桐の木にもたれかかったまま、その双眸はかがやき、その唇は愛くるしく微笑んでいた。

　——それにもかかわらず、のちに女房は夫に語った。

「あんな美しい、あんな恐ろしい顔を、わたくしはみたことはござりませぬ」

　またその翌日の午後のことである。

　本丸からさがってきた父親の玄蕃が、長屋に入るや否や、沙羅が背をみせて、かまどの前に坐っているのを見とめた。

　なんの変てつもないうしろ姿であったが、玄蕃はなぜか一種の鬼気をかんじた。それにあたりには、異様な臭いがたちこめていた。

「沙羅、何をしておる」

と玄蕃はさけんだ。

　狼狽して沙羅はたちあがった。足もとにころがりおちた一本の鉄火箸は、しめった土間で白煙をたてた。

　彼女は苦痛の微笑をほのぼのと浮かべていった。

「さむらいの娘でございますもの、さむらいの痛みくらい知っておいてもよいではございませんか？」

　彼女は灼熱の火箸を、みずから左腕におしあてていたのだ。

　三日目の夕ぐれであった。

　夕日のうす暗い石垣や建物のかげをひろって、とぼとぼあるいていた葉山左馬之助は、ひとけのない西の丸の下で、ふとしのびやかにじぶんの名が呼ばれたのをきいた。

　ふりかえって、彼は眼を大きく見ひらいた。

「沙羅どの！」

　そこに立っているのは沙羅だった。けれども、彼女の顔は氷のように冷やかだった。沙羅は無表情な声でいった。

「左馬之助さま、おねがいがござりまする」

「――何でござる？」
「この矢文を――」
と、彼女は白くむすんだ一通の文をさし出して、
「小寺の陣所へ射込んで下さりませ」と、無造作にいった。
「小寺の陣所へ！」
と左馬之助は叫んだ。
「はい」
「なんのために？」
沙羅はしずかに左馬之助を見あげた。
「戸田左門さまへ、お礼を申しあげたいとの父のねがいでござりまする」
左馬之助は首をたれた。そして、恐怖と恥と肯定の意をこめて、ひくい、いたましいつぶやきをかすかにもらした。
「よろしい」
しばらくののち、三木城内南東の土塁のかげに、白い矢文をむすんだ鏑矢をつがえ、重籐の弓を満月のようにひきしぼっている左馬之助と、その足もとに片膝折って、石のように見あげている沙羅の姿がみられた。
夕日はすでにおちた。空はぶきみな暗雲をながし出し、蒼みをおびた風は草を鳴らし、矢羽

根をふるわせ、沙羅の黒髪をふきみだしていた。それも意とせず、こぶしをにぎりしめ、瞳に異様なひかりをかがやかせた娘の姿は、そのときこころある人が見たなら、きっとひきしぼられた弓よりも緊張したものにみえたであろう。
矢は弦をはなれた。鏑矢は風返しから凄然たるひびきをひいて、宙をとんでいった。夕闇のかなたへ、おぼろにはためいている城外小寺の戦旗をめがけて。……
――がっくりと弓をおろしてふりむいた左馬之助は、じぶんを見あげた沙羅の顔が微笑んでいるのを見とめた。この場合として、それはいかにも奇怪な微笑であった。
「沙羅どの」
立ちあがろうとして、沙羅はゆらりとよろめいた。
われしらず抱きかかえた左馬之助の腕のなかで、沙羅はついに笑い声をあげた。
「ほほほほ、おほほほほほほ！」
「沙羅どの、どうしたのだ、沙羅どの」
左馬之助は沙羅が気が狂ったのかと思った。実際その笑いにはただごとでない妖しいひびきがこもっていた。そして、腕にもきちがいじみた力をいれて、沙羅はひしと左馬之助にしがみつきながら叫んだ。
「左馬之助さま、沙羅は左馬之助さまの罪のつぐないをしたのでござりまする！」
「つぐない？　おれの罪の、つぐない？　いまの矢文が、どうして？」

左馬之助はぽかんと口をあけた。狂気に対する恐れと、漠然たる予感の恐れとのために彼の顔は蒼白くなった。

沙羅はこたえない。ただ、がむしゃらに男の胸に抱きついたまま、うわごとのようにつぶやいているのである。

「沙羅は——貴方の妻でございます。婚礼こそあげませねどそうだと思っております。左馬之助さま！　沙羅は、葉山左馬之助の妻だ、淡河弾正四天王のひとり、葉山左馬之助の妻だとどうぞおっしゃって下さりませ！」

沙羅のやわらかなからだは、火のようにもえていた。涙が頰をあらっている。さっきの氷のような態度にひきかえて、この変りようはいったいどうしたのだ？　しがみつき、頰をすりよせ、まるで狂ったような娘のまるい肩に手をまわしたまま、左馬之助は夢をみているような気持だった。……

その夜、玄蕃のまえに出た沙羅は、端然と手をつかえ、首をたれてこういった。

「父上さま、沙羅は出すぎたことをいたしました」

「どうしたのじゃ？」

柱にもたれたまま、暗然と亡き人々の数をかぞえていた玄蕃は、うっすらと半眼にして、けげんそうに娘をみつめた。

「先夜、焼きすていと仰せつけられました戸田左門さまの御書状、灰にする前に、沙羅が拝見

つかまつりましてございまする」

「——きさまが、読んだと！」

と、玄蕃はかっと眼を見ひらいたが、やがてうめくように、

「ふむ、なんとかいてあった？」

「まず、お命を助けたいと、そして、筑前さまへのとりなしに、日を決めて、ひそかに織田勢を、城内へひき入れいと……」

「ぬかしおったな！」

がばと膝をたてると、玄蕃は猛然と怒り立った。

「左門、うぬは——この粕谷玄蕃が裏切りをするような人間とみておったか？　ちっ——ば、馬鹿め！」

額に静脈がふくれあがっていた。歯ぎしりしながら娘をねめつけて、

「き、きさま、いらざるたわけをして、あたら眼をけがしおった。いかにも、出すぎた者じゃ！」

「父上さま。沙羅が出すぎた者と申したのは、そのことではございません」

沙羅は冷然としていった。彼女の瞳はかがやいた。

「わたくしは——それで、今宵、矢文をもって戸田さまへ、御返事さしあげましてございまする！」

怒り狂っていた玄蕃は急にきょとんとなった。それはまるで炎天の下の人が、一杓の冷水をあびせかけられたようだった。衝撃のため玄蕃は刹那的の白痴となったのである。

「……何と、はねつけてやった？」

と、彼は無意識的に声をもらした。

「はい、明夜――十七日の夜の子の刻を期し、お言葉通り搦手より手引つかまつりましょうと、――」

一声、笛のように気味悪い息を吐いたまま、玄蕃は沙羅をにらんでいた、恐ろしい沈黙がおちた。――

が、突然、玄蕃は笑い出した。うつろな、なんともいいあらわしようのない、かろやかな笑い声であった。

「沙羅、きさま、たしかにおれの娘であったな？　ははははは、いや、おれは妙な気持になってきた。だが――まだねんねじゃ！　おかげで玄蕃が地獄におちるんだわい。戸田左門が――小寺官兵衛が――羽柴筑前が、うぬごとき子供の悪戯になんで乗ろうか！　矢文ひとすじではい左様かと、百も二百もの軍兵をいれる、それほど甘いきゃつらか！」

「父上さま、沙羅もそれほど甘うはござりませぬ」

といって沙羅は笑った。それは沙羅が嬰児であったころを混迷錯覚するほど、いたずらめいた笑顔だった。

「手引をするまでの人質に――今夜――娘の沙羅をさしあげると――書きやりましてございまする」

「きさまを！」

と叫んで玄蕃はおどりあがった。そして、身もだえしながら、部屋じゅうをあるきまわった。が、突然、すさまじい音を立てて床の間の陣太刀をひっつかむと、

「沙羅！」

と叫んだ。

「未練者、卑怯者、不孝者、もはや吼え面たたくな。父としてのこころやりに、今よりぶった斬ってくれる！」

沙羅は顔をあげた。灯が頬に映った。それは鋼鉄のように冷たいひかりを反射した。彼女は笑った。しずかな、身ぶるいするほどはなやかな微笑であった。

「父上さま。沙羅を斬るより――」

あとの声は、笑い声にかきけされた。が、玄蕃はそれをどうきいたか、

「なにッ――」

と息をつまらせたまま、顔色蒼白にかわった。やがてその額にあぶら汗がにじんで、歯ががちがちと鳴り、全身がおこりのようにふるえ、発狂したように絶叫した。

「き、きさまが？――ならんッ」

けれど、笑いつつも、すみきった瞳をあげている沙羅をみると、また両手をもみしぼり、つかみかかりそうな身がまえになったが、突然はらはらと両頬に涙がしたたりおちると、

「ううむ、出かしおった！」

と、うめくように叫んだ。

葦の中

夕刻になってたちはじめた雲は、夜に入ると雨になった。

ひくくたれこめた密雲は、包囲軍の凄じい篝火の余映をうけて、血みどろの蛇腹のように赤く、またその雲の照りかえしで、ぼんやりと浮かびあがった三木城は、まるで地獄の城のように気味悪い姿をしていた。

が、それだけに、城の搦手から三町あまり下ったひろい葦原には、巨大な一塊の墨汁のような闇が凝り、ただ蕭々と葦をうつ雨の音が高かった。

「将監。あの夜も――こんな夜であったな」

その原のなかを、ぴちゃぴちゃ水をふむ音とともに、こういう声がきこえた。

「左様。――」

それに答えた声は鉛のように重かった。

「甚之助は、どうしておるかの。――そうじゃ。このたびのことで、小寺が憤怒のあまり乱心

せねばよいが。……」

「なに、いくらなんでも官兵衛じゃ。乱れても、狂っても、七つの子供をどうもせぬ。甚之助の方は仔細ないが。――」

と、あとの声はまたしばらく沈黙していたが、突然激情をこめた沈痛な息をもらして、

「玄蕃、すまぬ。きさまにひきくらべて、この将監は恥ずかしい」といった。

雨の音でよくききとれないが、その声の調子は、うたがいもなく、三木城家老後藤将監基国のそれだった。星月夜ならば、その将監の頰が、雨をふせぐ笠の下で滂沱たる熱涙にぬれているのをみることができたであろう。

「なんのなんの」

と答えたのは、その言葉づかいからみて、副家老の粕谷玄蕃のほかにない。

「甚之助は男の子、後藤の家の嫡々じゃ。しかもあたり散らすに惜しい天性の麒麟児。――この娘とはまた話がちがう」

が、もし一瞬の稲妻でもあれば、なにげない口調でそういって、傍の黒影に顎をふる玄蕃の両眼が、熱病やみのような炎にかがやいているのがみえたに相違ない。

将監がいま恥ずかしいといったのは、いまからちょうど一ト月前の雨の夜、彼は一子の、当年とって七歳の後藤甚之助を粕谷玄蕃のかいぞえのもとに、おなじこの葦原のなかで、敵将小寺官兵衛孝高に託したからであった。いかにおのれと官兵衛と曾て肝胆相照らしたとはいえ、

いかに家門血統のためとはいえ、そのじぶんの所業——といまここに、恐怖すべきたくらみの血潮のなかへ、父みずから娘をなげいれ、娘みずからとびこもうとするふたつの魂をみるとき、さすが千軍万馬の後藤将監が、羞恥も理窟もこえて、われしらず一種異様の戦慄にわなながざるを得ないのだった。

「父上さま」

と、そのときまで黙々と一言もはかず従っていた簑笠の小さい影が、ひくく叫んだ。

葦をかきわけつつ、闇のかなたから、ぴちゃぴちゃともうひとつの水音がちかづいてきた。

「沙羅よ——。覚悟せいよ」と、玄蕃はただ一言いった。

「沙羅！」

たまりかねて将監は、簑笠のなかのたおやかなからだをぴったりと抱きよせた。

「やがて追いつくわ。父も将監も——また、左馬も喃、可哀や、おとこの心、この将監がよう汲んだ。三途の河水を盃に盛って、左馬との祝言の媒人にはこのおれがなろうぞ」

「——はいっ」

と、沙羅はうたうように答えた。

ひそやかな水音は、四五歩先で絶えて、また沈黙の闇が凝った。

「戸田左門であろう？——いざ、約束通り」

と、玄蕃は声をかけた。

「玄蕃か、御苦労」

跫音はさらにちかづいて、暗い中で老人らしい声がした。

「やれやれ、暗いうえに雨がふる。いこう苦労したわ」

まるでいちども戦いをまじえなかった親友にでも逢うような、安心しきった調子であった。

そしてこの小寺家の家老は、不敵にも燧石を鳴らした。ぱっとひらめいた一瞬の青火のなかに、やはり蓑笠をつけた、鶴のように痩せて清淡な戸田左門の顔がうかびあがった。

「これは、大儀。沙羅どの、いましばらくの辛抱じゃ」

と、左門はいった。無造作な燧石の火あかりに、彼は油断なく相手と人質の顔をたしかめたのだった。

「玄蕃、おぬしも年寄ったのう。——が、これもしばらくの辛抱じゃ。は、は、いや、悪うはせぬ。おぬし、明夜こちらを城に入れてくれると同時に、そっと搦手から外へ出い。早速筑前どのへ目通りさしょう。実に古今ふしぎな名将じゃぞ」

「ちっ。——」

と、玄蕃はひくく叫んだ。

将監がその腕をしっかりとつかまえた。

が、闇のなかでも慧敏な左門は、その気配を悟ったのであろう。ずかずかと歩みよって、むずと玄蕃の手をにぎった。

「玄蕃。――腹もたとう。辛くもあろう。そう存じて、おれもこんな口のききかたをしたのじゃが――」
その手は友情にもえて熱かった。
「とにかく、信長公は右府じゃ。朝臣じゃ。おれはきさまを叛臣逆賊として死なせるにはしのびなんだ！」
粕谷玄蕃はそっぽをむいて唸っていたが、突然異様な声で、
「左門！」と叫んだ。が、次にいった言葉は低くおさえつけたように慄えていた。
「危ない。人質をうけとったら、さっさとかえれ」
「左様さな」と、左門はうなずいた。
「話は明日――あさってのこととして、では」
「父上さま、御首尾よく！」
と沙羅はあかるく叫んだ。
「おお」
雨の音が高くなった。凝然とたっているふたりの耳に、去ってゆくふたりの跫音がいつまでもはなれなかった。
二十歩あまりむこうで、左門のつぶやくのんびりした声がかすかにきこえた。
「沙羅どの、足もとに気をつけよ。――陰気じゃが、しかし明夜は、この闇がつづいて欲しい喃」

門

戸田左門の註文どおりに、十七日の夜も雨に更けていった。それどころか、亥の上刻のころから、風が起き、ときどき雷鳴すらもはためいて、すさまじい豪雨となった。
三木城背面の葦原に伏せた千三百の織田軍は、野鼠のように雨しぶきにうたれながら、ひたすら子の刻のいたるのを待っていた。
――と、搦手門の上あたりに、ポチと赤い一点の火が浮かんだ。炬火であった。それは、三度、赤い円弧をえがいた。
「――素破」
と、全軍は声なくどよめいて、闇中に一匹の巨大な山椒魚のようにうごき出した。
先鋒の鉄砲隊が城壁の際まではいよったとき、搦手の鉄門は、音もなくひらいた。鎧ずれをしのび鞘鳴りをおさえて、奇襲軍は粛々と雪崩こんだ。
裏切者の出現など、文字どおり夢にも思わないのであろう。それに吹きすさむ嵐に心をゆるめたか、闇黒のなかに、城中は深沈とねむっている。鉄砲隊はすでに本丸下の馬出に入り、つづく五百の槍隊は二ノ丸下の馬出に入った。最後の抜刀隊も、やがて搦手に吸いこまれようとする、――

「──玄蕃、出い」

その搦手で指揮していた戸田左門は、ふりむいて、茫然と立っている粕谷玄蕃に遁走をうながした。

玄蕃はうごかない。何かかんがえこんでいるようである。左門は感謝と同情と友愛の意をうしなわぬするどい声で、

「玄蕃！」

と呼んで、むりに老友をおし出そうとした。

玄蕃はのどの奥でなにかうめいた。次の瞬間、搦手の外にはね出されたのは、玄蕃ならぬ戸田左門であった。

「あっ──」

と叫びつつ、どうと尻餅をついた左門の眼に、魔のごとく閉じられてゆく門がみえた。

「玄蕃っ。──裏切ったなっ」

絶叫してはねあがり、とびかかっていった左門の肉体は、がんと鉄の扉にはねかえされた。

──と、同時に、その門の奥では、異様なすさまじい音響があがりはじめた。

搦手がとじられたときは、ちょうど本丸下の馬出二ノ門が、どうじに、二ノ丸下の馬出二ノ門がとじられた刹那にあたる。──ぶきみな軋音をあげて背後にしまる鉄門に、愕然とたちどまった鉄砲隊は、次の瞬間、いっせいに夜がらすのような悲鳴をあげてのけぞった。いつのまにか闇中にはいよった数百の刀槍が、復讐のひかりを引いてその腹をつらぬいているのであった。どうじに、二ノ丸下の闇中にも、搦手内の雨中にも、すさまじい白煙と銃声がわきあがって、地獄のような阿鼻叫喚にかきけされた。

篠つく豪雨、吹きちぎれる風の下に、それはなんというみごとな殺戮であったろう。すべては一瞬のことであった。そうしてその一瞬ののちには、苦悶にのたうち、はねまわり、土くれをつかむうめきが、まぼろしの音のようにきこえるだけであった。

雷鳴がはためいた。蒼白い閃光のなかに、千三百の織田軍は全滅していた。

「玄蕃っ、裏切者っ、卑怯者っ、誓文破りっ」

戸田左門は狂乱して、搦手門にとびかかりすがりつき、うちたたき、はねかえされていた。彼の眼はつりあがり、髪は雨にたたかれ、こぶしは鉄門にくだけて、それは闇中のむごたらしい一匹の蛙であった。

「返事せぬか、玄蕃っ。ぶ、武士がひとたび約束しておきながら──」

「左門」

と扉のむこうで、沈痛な、が、はげしい叱咤がきこえた。

「左門、裏切者とはなにをさして申すか。おれは主君にそむきはせなんだわ。卑怯者といいたくばいえ、これを反間苦肉の計と申す。は、は、孫呉もはだしのお沙羅の智慧じゃ。左門！　かえって猿なりちんばなりに告げい。粕谷玄蕃の誓文破りに胆がとんだかわり、娘の沙羅は、

のこぎり挽きなり車裂きなり、腹のいえるようになされとな。は、は、は、は！」
　声は絶えた。左門は門にとりついて、ゆさぶった。
「玄蕃、玄蕃っ。それが、おれにむくいる友の道かっ」
　扉がかすかにひらいて、一条の槍の穂がはしり出た。
「おおさ、これが裏切りをすすめた者にむくいるさむらいの道じゃ。帰れっ」
「殺してくれ！　玄蕃、おれを刺せ、刺さぬか、玄蕃っ」
　左門は槍の穂先へ胸をぶっつけていった。一瞬に槍はきえ、門はとじられた。そして二度と内の声はきこえなかった。
　死んだようになって扉の外に崩折れた左門のうえに、雨は滝のようにふりつづけていた。

苦笑太閤

「なにっ、みなごろしに逢ったと？」
　平山に本陣をおいて、奇襲軍が成功の火の手をあげるのをまちかねていた羽柴秀吉は、さすがに愕然として立上った。
　赭い小さな顔が、いっそう鬼灯のようにそまって、手にした采配を地上にたたきつけると、
「ば、馬鹿っ」
　と、割れ鐘のような声で叫んだ。

　幕をあけて、四十四、五歳の、醜い、ちんばの小男が入ってきた。
「――殿」
　と、一声呼びかけたまま、さも面目なげに首をたれている。
　その悄然とした風采のあがらぬ姿をみて、知らぬ者は、どうしてこれが秀吉の片腕、小寺官兵衛孝高と思おう。棒立ちになったまま、じっとにらみつけていた秀吉は、このとき、はっしと膝をうちたたいた。
「さても、みごとにやられた喃！　半兵衛が生きておったらさぞ泣こうぞ。ははははは」
「なんといっておわび申しあげてよいか。――」
　と、官兵衛も泣き笑いの表情でうめくよりほかはなかった。
「官兵衛、今度ばかりは、みそくそでござる！」
「智慧まけじゃ！　智慧まけじゃ！　相手の家老は――粕谷玄蕃とか申したな？　敵ながら天っ晴じゃ、殺しとうはない喃！」
「左門が、このはかりごとの当初に、首をかたむけたのも、むりはございませなんだ。いささか、もののふの心を見くびりすぎた応報とも申そうか。――は、は、は、は」
「――於虎っ」
　俄然としてどよめきをはじめた味方の陣の気配に、爛とした眼をあげた秀吉は、急に顧みてこう呼んだ。

荒小姓の加藤虎之助が、篝火のかげに手をつかえた。
「やかましい。窮鼠かえって猫を嚙むのたぐいじゃ。図にのって敵が出ることはまずあるまい。うろたえず陣をかためて、ただ城兵の脱走が一人もないよう、三木川、志染川の手に気をつけさせい！」
虎之助はすぐ雨中をかけ去っていった。
「なになに、草の葉をくっている奴らじゃ。まず今年ぎりぎりいっぱいの運はのがれられんわい！」
と秀吉は笑った。これは十日の大村合戦に、三木城の城兵の遺棄屍体の胃をさいて、そのなかに雑草の葉みたいなものしかみられなかったことをいったのであろう。秀吉はふと笑いをけして、官兵衛をみた。
「左門はいかがいたした？　帰ってきたときいたが、――」
「あれだけは、玄蕃もよう殺さなんだげにござる。死人のようになってもどって参って報告のみ終えると、すぐ腹をきろうとするゆえ、見張りをつけておきましたが」
「それはよい。左門は殺すなよ」
と、秀吉は優しくいった。もともとこんどのたくらみは、孝高が発案し、秀吉が黙許し、それを強制的に左門に命じたものなのである。
「――が、今度の玄蕃といい、後藤将監といい、また昨日の家康どののことといい――戦国の

世の父の心はかなしい喃」
家康どののこと――というのは、家康の長子信康が、武田に内応の嫌疑を信長にうけたため、この十五日、家康みずから、信康に自決せしめた事件をさすのである。世に有名な、「築山殿事変」――その詳細は、昨日播州陣の秀吉に報じられたばかりだった。
「ただ、三河公の心事は、――あわれむべきよりも恐るべしじゃ！」
「まことに。――織田家の大敵は、毛利武田よりも、味方の三河公でござろう」
おたがいを見つめあうふたりの眼は、このとき深淵のごとくぶきみにひかって、暗黙のなかにうなずきあった。そこには信長の一部将羽柴筑前と、その臣下小寺官兵衛の姿はなかった。ただ、ときならぬ敗戦に潮のように動揺している味方のまっ唯中にあって、小さなひとかこいの陣幕を異様な凄気でふくらませているのは、家康にもまして恐るべき未来の豊太閤と黒田如水の巨大な姿であった。
秀吉は突如微笑して、しずかにいった。
「せめては、後藤のせがれ――甚之助など、憂き目をみんように目をかけてやれい。ふびんな奴じゃ！」
ふびんな奴じゃ！　秀吉が甚之助について吐いたのは、ただこの一語であった。が、この甚之助こそ、神のみぞ知る、のちに天下一の「ふびんな奴」豊臣秀頼をまもり、劫火もゆる大坂城にその俠勇をうたわれた後藤基次となることを、どうして秀吉が知っていたであろうか？

「――して、粕谷の娘は」

と、官兵衛はいった。

それは先刻から、官兵衛の胸に薄ぐらい憤怒の黒煙をあげつつ、ふしぎな微光をはなっているひとつの名前だった。

「うむ、粕谷の娘は――」

と秀吉は眼をあげて、官兵衛をながめた。

そのとき、あわただしい跫音がちかづいてきて、幕の外に手をつかえたようであった。

「殿、殿。そこに小寺どのはおわしますか。戸田左門どのが腹をきられたそうにござりますぞ」

「――死んだか！」

と、官兵衛は叫んでたちあがった。そうして、篝火を見つめ、宙をにらんでひくくうめいた。

「ううむ。是非ない。……」

「書置一通口にくわえておられたとか、小寺どの身内の方が持参なされたのを、ここに受取って参りましたが。――」

「よし、ここへ持てい！」

と、秀吉はいった。

幕をあげて、廿歳あまりの美しい若衆が入ってきた。秀吉小姓のひとり大谷兵馬吉隆である。

官兵衛は兵馬の手から一通の文をうけとった。

「――それがし無分別にして敵が詭計をしらず、あたら御味方のつわものをあまた失い候こと、まことにその罪万死に当るべく候。腹きり申すべく候。おんみのがし下されたく候。尚粕谷玄蕃がたくらみは真ににくむべしといえども、またその人に主君あり、悲忠嘆ずべく、またみずからすすみて人質にたちたる玄蕃が一女沙羅、その忠孝嘉すべしと存じ奉り候。沙羅人質となりてよりそれがしが陣にあり、神色自若として毫も秘計をあらわさざりしこと、武士も及ばざる天っ晴の乙女にして、おん憤りもさることながら、武遍の情、何とぞ御憐愍を以て助けおかるるに於ては生々世々有難き儀に存じ奉り候。恐惶謹言。

天正七年九月十八日　　戸田左門宣国

御主君様　」

紙面に、血潮にまじって滴々とにじんでいるのは、このあわれむべき老武者の涙であった。

秀吉は黙然としてこれを見つめていたが、急にきっと顔をあげると、

「人質は、夜の明け次第殺せ」

といった。

官兵衛はまじろぎもせず、秀吉の表情を凝視していたが、このとき、暗然と、また決然とう

なずいて、傍にひざまずいたままの小姓にいった。

「兵馬どの。早々磔（はりつけ）ひとつ、用意するよう命じてくれられい」

花十字架

天正七年九月十八日の朝は、三木城内にふしぎな光と影の波をえがきつつ明けようとしていた。

一週まえの敗軍の暁（あかつき）とおなじように、場所は反対の搦手（からめて）の方角であったが、三カ所の馬出をうずめて惨憺（さんたん）たる伏屍（ふくし）の山を、徐々にながれてゆく薄明のひかりが、あくまで冷たく美しいのはひとつの矛盾だった。その累々たる屍骸（しがい）の顔、手、足、ことごとく雷にうたれたように生々しい激動的な苦悶をあらわしているにもかかわらず、血と泥はすべて夜来の豪雨にあらいながされて、へんに白じらと、まるでうちくだかれた人形の群のようにみえるのも奇怪だった。しかしまたそれだけに、鬼気と妖気はいっそう物凄いものがあった。そうして、その白ちゃけた屍山をふんで、首の点検や、刀槍の押領や、武具鉄砲（ぶぐてっぽう）の没収に右往左往する城兵たちの顔が、もえあがりそうな復讐の歓喜にみなぎっているのも異様な光景だった。これだけは、血潮のしみこんで真っ赤な屍骸の腰の兵糧（ひょうろう）を、手づかみにむしゃむしゃ喰いながら、声をあげて泣き、泣きながら笑っている髯武者もみられた。醜（しゅう）のうえに美が、激動のなかに空洞が、哄笑のしたに沈黙が、苦悶のそとに歓喜が、そして生と死が、めちゃくちゃに乱舞し、交錯し、どよめき

あっていた。

「うまうまと、かかりおった」

本丸下の馬出二ノ門から、西ノ丸横の馬出一ノ門へだらだらおりるみじかい坂の上で、愉快そうにこう叫んだのは、城主の叔父別所山城である。後藤基国（ごとうもとくに）がこれにしたがっていた。

いかにも、累々たる屍骸の海は、なまぐさく、まるで、鮪は鮪、鯖は鯖と、えりわけられたように或る区分をみせていた。奥ノ門のこちらには鉄砲隊、中ノ門のあいだには槍隊、搦手門の内には刀隊と、最初のものは刀槍を以て、あとのふた組に鉄砲を以て、一瞬のあいだに殺戮（さつりく）されたものだった。

大村合戦の名残りもなまなましく、まだ左腕を布でつった山城守は、右手で膝をうって哄笑した。

「ほとけに近い身で、罪つくりなことよの」

こうつぶやいたのは、二、三歩あとの城将別所長治（ながはる）である。したがう十人あまりの近習のなかには、葉山左馬之助らしい蒼い顔もみられた。

山城は、爛（らん）と眼をひからせると、ふりむいて、

「何を申す。戦いには、ひとりでも多く敵を殺すのが真諦（しんてい）じゃ」

しかし、しおらしいことをつぶやいたものの、長治のやせとがった顔も、酔うたような歓喜にかがやいて、いつにない若々しさがあふれていた。

が、ふと眼をあげて、右往左往する人影の彼方に何者かの姿をみとめると、彼の唇はぴくりとふるえ、あゆみは釘づけになり、やがて暗然と眼をしばたたいて、

「ただ、罪つくりなのは、——あの男じゃ！」

とうめいた。

人々は遠い石垣のまえに、粕谷玄蕃をみとめた。玄蕃の影は大きく石畳にうつっていた。その影は墨で染めたようにうごかなかった。——それにもかかわらず、本物の玄蕃は怒号しているのだ。

いつもの厳格な御家老さまは、額に汗の珠をうかべ、真っ赤になって、敵の戦死者をかたづけている城兵たちを叱咤し、命令し、指揮しているのだった。

後藤将監は、不安げに、宙をみつめてつぶやいた。

「噫、沙羅は？——」

そのときであった。遠い物見櫓のうえで、ふいに叫ぶ声がきこえた。

「おおっ——各々、みられい！　みられい！　お沙羅どのがっ——」

雪崩をうって、人々は走っていった。電流にうたれたように表情を硬直させていた別所山城は、はっとわれにかえると、

「何か、見い！　天守へ——」

と叫んで、はしるように引返しはじめた。従者たちも、ころがるように天守閣へかけのぼっ

ていった。

真っ先に出窓にとびついて、引戸をひきあけた葉山左馬之助は、

「ああっ」と絶叫した。

城外ほどちかく、黎明の野を死の行列はすすんでいた。まっさきに白木の十字架をかついでいる奴は、首をたれて、蒼醒めて、——粛々とあゆむ刑吏の一群は、まるで彼らが罪人であるかのようだった。

野の花をふみ、小鳥をちらしてすすむ白馬のうえに、沙羅はうしろ手に縄をかけられたままゆられていた。

彼女は磔柱を見つめていた。それはどんな剛腹な罪人でも、悪寒をおぼえさせずにはおかない、いまわしいものである。が、彼女は微笑んでいる。瞳は星のようにかがやいている……。

（私は、左馬之助さまの罪をつぐなった！）

沙羅の小さな胸を、水のようにしずかなひかりがくるんでゆくのは、この一語であった。

そのひかりは胸の皮膚を透き、白衣を透いて、ほのぼのと外にあふれていた。

「裏切者の娘！」

「人非人っ」

「外道、妖婦、奸婦っ、誓文破りの天罰じゃ。死ね！」

沿道一帯にながれどよめく羽柴軍の将兵の、憤怒と憎悪にもえあがる眼、草ぎれや草鞋や馬

の糞といっしょにとんでくる恐ろしい悪罵。——それらを、頬の肉ひとつうごかさず、冷然と沙羅は見おろしている……。

そのつぶらな眼が、ふと、刑場ほどちかく、道のほとりに床几をすえている秀吉の眼と合った。

不世出の英雄の神秘な巨大な眼のひかりをまともにうけて沙羅の表情がかすかに動いた。が、翳のように浮かび出たのは、満腔の敵愾と侮蔑と凱歌のこもったほこらかな片えくぼであった。森厳秋霜のごとき姿でこれを見おくった秀吉は、ふとふりむくと、にっことして、

「惜しい喃。——名花一輪！」

と、小さくささやいた。

傍に侍立した小寺官兵衛は、黙然としてうなずいたが、やがてこれも小さく嘆声をあげた。

「まことに。——このたたかいに勝ったは、われらでもござらぬ。またもとより三木方でもござらぬ。実にあの小女郎でござる！」

雲を見つめる沙羅の凄艶壮美な微笑をみるがいい。天正七年九月十八日のあけぼののひかりは彼女の面から射した。死の丘へ——死の丘へ——白馬のたてがみはひかり、乙女の瞳はひかった。まことにそれは、三木城攻囲戦の最大の勝利者の姿であった。

三木城の天守では、慟哭しつつ人々が眺めていた。なにか左馬之助が叫んだが、それは意味をなさぬ咆吼にすぎなかった。

長治も泣いている。山城も泣いている。後藤将監も泣いている。——いや、厳然と見おくる敵将の秀吉の頬にも、しずかな涙がつたわっている。

泣かないのは、平静きわまる眼でじっと見つめているのは、天守の窓辺、嗚咽にゆれるひとびとのなかに、銅像のように立ちつくしている粕谷玄蕃ただ一人であった。

黒百合抄

一

——北政所（まんどころ）さまには、ぶじ三本木の御屋敷にお入り遊ばしました。

去年からお側に上がりました美也には、はじめての御屋敷でございます。まえに賀茂のきよい流れがせせらぎ、ほんとうに美しい眺めでございます。ここへきましたとき、北政所さまはすぐにその水のほとりにお立ちになり、

「京はよい。——大坂よりも」

と、しみじみと呟かれ、

「美也。城にいるより、心も涼しくなるようではないか」

と、笑顔でおふりかえりになりました。「ほんとうに」とわたしはおこたえ申しあげましたけれど、眼に涙がたまってきました。

「美也、何を泣く？」

「御台さまがおいとしうて」

「そなた、幾歳になる？」

「十七でございます」

北政所さまはいよいよお笑いになりました。北政所さまは、おんとし五十一におなりあそばします。それを十七の美也が、おいとしいと申したので可笑しがられたものに相違ございません。けれど、わたしの思いはほんとうでございます。

主水正さま、あなたさまは真野豊後（ぶんご）さまに御奉公なされていらっしゃるお方でございます。真野さまは淀君さま方、わたしは北政所さまの婢（はしため）でございます。こういうことは申しあげたくありませんでした。またいままで申しあげたこともございません。おなじ豊臣家の家来ではないかと思っていたからです。それから、北政所さまが、そういうわけへだてをいたくおきらいになることを知っていたからです。それから——主水正さま、あなたさまと、やれ北政所さま党の淀君さま党のと、そんなへだてのつくのが哀しかったからでございます。

けれど——もういわずにはおれません。お別れしてはじめてのたよりに、こんなことをかかねばならないとは、ほんとうにくやしいことでございます。

主水正さま。北政所さまがお城をお去りあそばす前夜、大野修理さまの御屋敷では、夜をとおしてお酒盛をなされたそうでございますね。わが世の春が来たとでもおよろこびなのでございましょうか。まさか主水正さまがそのお席においでなされたとは思いませんが、あなたさまは如何おかんがえでございますか。

太閤さまはお亡くなりあそばしたとはいえ、かりにもその御台さまがお城をお去りになるのでございます。太閤さま亡きあとは、城のおんあるじだったお方が、みずから淀君さまにお城をひきわたされて、ひとりさびしく京へ御隠棲になるのでございます。それを酒盛などしてよろこぶとは——女の心でかんがえても、くやしいというより、あんまりはしたないではございませんか。

そればかりではありません。いよいよ北政所さまの御乗物が御本丸をお出ましになろうとするときのことでございました。浅野弾正少弼さま、加藤肥後守さま、福島侍従さま、片桐市正(いちのかみ)さまなど、太閤さま御一代の御武功のかげにそわれて、骨身をけずられた方々が涙をながしてお見送りあそばすところへ、秀頼さまの手をおひきなされて淀君さまが出御あそばしました。そして——

「まんかか、まんかか」

こう呼びながら、秀頼さまは、お手になされていた黒百合の花で北政所さまをおうちなされたのでございます。

「まんかか、いってはいやだ」

北政所さまはかがまれて、秀頼さまに頬ずりをなされました。御腹をいためなされなかったとは申せ、まことの御子でもかほどではあるまいと思われるほど北政所さまがおいとおしみになった秀頼さまでございます。また、秀頼さまもまことのおかかさまのようにおなつきになっ

ていたことも御存じのとおりでございます。それは、みる人すべてが涙をながしたほど美しいお姿でございました。けれど——秀頼さまのおもちあそばすものが、黒百合の花とは！

十日ばかりまえ、お別れの茶の湯に北政所さまが淀君さまをお招きあそばしたとき、北政所さまがめずらしく御自慢になったのが、加賀の白山から御献上を受けられた黒百合の花一輪でございました。その美しさには、御同席の松の丸さま、三条さま、加賀の局さま、三の丸さま、かい姫さま、ことごとく御嘆賞になったものでございます。それほど世にも珍しい黒百合の花が、三もと四もと、秀頼さまの御手に無造作ににぎられて、いま北政所さまをおぶちになるたびに、むざんに散ってゆくではございませんか。

むろん、おん年七つの秀頼さまに、どなたさまかがおわたしなされたのに相違ございません。最後まで、北政所さまにそうまでしてはりあい、勝とうとなされ、ないがしろになさりたいか——わたしはくやしいよりも、その十日のあいだに黒百合の花をもとめて人をかけまわらせられた御才覚がおきのどくでなりません。それと申しますのも、その黒百合の花などまったくおん眼にないかのような北政所さまのおんふるまいが胸をしめつけたからでございます。

「おお、まんかかはまた来ようぞ。いくども来ようぞ。まんかかは、そなたが関白になる日まで死なれはせぬ」

地に散った黒百合の花などかえりみもせず、北政所さまは秀頼さまを抱きしめ涙をながされました。

「そなたも、ときどき京に遊びにきてたもれ」

淀君さまは、笑っておられました。まるで大坂城に照る日をお顔ひとつにあつめられたようなお美しいお姿でございました。けれど、わたしは、お泣きあそばす北政所さまの方が、もっともっとお美しいとながめたのでございます。

主水正さま、わたしとしたことが、このときのことを思い出せば出すほど心がみだれて、われしらずこのようなことをかいてしまいました。北政所さまにおはずかしいことです。お城とともに、何もかも、黄金と妄執の鬼たちにさらりとゆだね、いまこのきよらかな賀茂のせせらぎに耳をおすましあそばすのみの北政所さまにおはずかしいことです。ああ、またこのようなことを申してしまいました。

けれど美也はとても北政所さまのようなおきもちにはなれません。それはお城にあなたさまがいらっしゃるからでございます。あなたさまが、淀君さま党の真野豊後さまの御近習として御奉公なされていらっしゃるからでございます。そしてあなたさまだけは、わかっていただけると信じて、こんなことをかいたのでございます。

どうぞ、御同輩の方々を、たしなめてあげて下さいまし。北政所さまに申しわけないというお心を、すこしはおもち下さるように。もし北政所さまが、お城の大手門をお出ましになったとき、いちど乗物からおりたたれて、夏の日にもえるような八重の大天守閣の甍をあおぎ遊ばして、そっとお吐きになったつぶやきをきかれたら、どなたさまも居ずまいをおただしにならずにはいられないに相違ございません。

「あさはかなひとびとが、この城のもえおちるような始末をしてくれねばよいが。……」

北政所さまは、こう仰せなされたのでございます。

何やら越後やら加賀の方から、おだやかならぬ風聞がきこえて参ります。ほんとうに、もはやいくさはこりごりでございます。世がおだやかならば、あなたさまともいくどもお逢いできようと申すものです。こんどは、いつおめもじがなりましょうか?

二

——このたびの騒動は何とも申しあげる言葉もございません。この数日、京のあちこちでも、関ケ原の落武者狩りがつづいております。いいえ、この十月一日には、もう御存じのように、石田治部少輔さま、小西摂津守さま、安国寺さまなど、六条の磧で御成敗になりました。恐ろしいことでございました。

この春ごろからのあなたさまの御病気をあのとおり案じ申しあげておりましたけれど、いまになってみればそれが倖せ、信心の甲斐があったと申すものでございます。でも、お城の方へもわざわざ内府さまから「このたびのことは、治部少輔、恵瓊どもが口を秀頼さまにかりて、謀叛をおこしたとは申すものの、わずかおん年八つの秀頼さまや、おん女性の淀君どののおあずかり知られることではない」との御使者が参られたとのこと、胸のおくそこから安堵の吐息

をついた次第でございます。北政所さまのおん眉も、明るう見まいらせます。

ほんとうに、身のほど知らずの人々は、石田どの、小西どのたちでございます。こういう方々が淀君さまをおとりまきしていたのですから、恐ろしさに冷汗のながれるほどでございます。美也の心配していたとおりでございましょう。主水正さまの御同輩の方にもきっと薄氷をわたったような心地のした方が多うございましょう。それにくらべて、北政所さまの信じ遊ばす方々こそ、心から豊臣家のおんために心をくだかれる方々でございます。

こんどの騒ぎのまえにも、浅野弾正少弼さま、肥後守さま、福島侍従さまなどしばしばこの三本木に参られて、いろいろと御評定でございました。あの方々が東軍にお加わりあそばしたというのも、まことは豊臣家のおんためをお思いになればこそに相違ございません。太閤さまの御遺言に、かえすがえすも秀頼さまのおんことをおたのみあそばし、それに対して起請文までかかれた内府さまでございます。このたびのことも、秀頼さま淀君さまを神輿となされて、私意をほしいままになされようとする方々を御成敗あそばしたというほかに、なんの仔細がありましょうか。肥後守さまたちも、そこをお信じなされてのことに相違ございません。

それでも、お城では、まだ迷いのさめぬ方々が、かげでさまざまな不足を申し、あらぬ風評をたてているよし、きき及んでおります。その第一は、おそらく小早川中納言さまのことでございましょう。中納言さまのおん裏切りさえなくば、西軍の敗れることはなかったろうに――と歯がみするお方もあると承っております。

石田治部少輔どのをまことに豊臣家の忠臣と存ずるやからには、或いはそうかんがえられましょう。さりながら、石田どのを豊臣家の獅子身中の虫と思うものにとっては、決してそうではございません。たたかいの末がかく相なっては、どなたもこう考えるのに御同意でございましょう。

主水正さま、はじめて申しあげます。小早川中納言さまの返り忠は、ひょっとすると北政所さまの御こころにそわれたものかもしれませぬ。

御存じのように、中納言さまは北政所さまの甥御さまでございます。そして中納言さまが、いかほど北政所さまを敬っておいであそばすかも御承知のとおりでございます。中納言さまは、この夏、この三本木のお屋敷に参られ、北政所さまと御用談あそばしました。もとよりそのお席に美也が侍っていたわけではございませんが、御密談のあと、茶をもって参じましたおり、あの韓（から）のいくさで総大将のおん身でありながら手兵をひきいて敵中にはせ入り、おんみずから明兵を十三人お斬りあそばしたという豪勇無双のお方が、満面蒼白になってうつむいて、御思案のていにみえました。中納言さまは、武勇にかけてはくらべものなき大将にはおわしますけれど、韓でのおんたたかいぶりでもわかるように、恐れながら、いかい御短慮のお方と承っております。それが――まず西軍にお入りなされて伏見城を攻めおとし、関ケ原の土壇場で急に東軍にお寝返りあそばすとは、とうてい中納言さまの御所業とは思われません。おそらく、ひとたび西軍にお入りなされたは、石田治部少輔をゆだんさせるための御軍略かと心得ます。そ

してその御軍略は、北政所さまから出たものではございますまいか。

このことをいままで申しあげませなんだのは、毛頭秘しかくすつもりではございません。事がこうなり、過ぐる日の中納言さまのお顔色と思いあわせて、いまはじめて或いはそうではなかったかと思いあたるのでございます。

けれど、それもこれも、すべて豊臣家のゆくすえをお案じあそばす必死のおんはかりごとでございましょう。――主水正さま、このことはあくまでわたしの推量でございますゆえ、余人にはどうぞ御内聞になすって下さいまし。それはお城にはまだまだ御思慮のあさい方々が多いようでございますので、思いちがいをなされては北政所さまに御迷惑と存じて申すのです。けれど主水正さまだけは信じて下さいまし。北政所さまは、ほんとうにおえらい方でございます。おそばに仕える日が重なれば重なるほど、美也はいよいよ頭がさがってゆくばかりでございます。

北政所さまは、豊臣家のためには、石田治部少よりも内府さまをたのむに足ると信じておいであそばすのです。あたりまえでございます。どうしてこれほどあきらかなことのわからないお方があるでしょうか。

「内府は世にもりちぎなおひとじゃ」

こう申されたこともございます。

「世間に内府をりちぎな皮をかぶっているばかりと申す奴もあるそうなが、内府ももはやかかれ

これ六十。六十まで面のつけどおしという人があるものではない。わたしはお若いころからの家康どのを存じておるが、織田右府さまとの義盟により、いくたびいのちをかけたいくさをなされたか、たとえば元亀元年、朝倉、浅井のために北陸道の木の芽峠で織田軍が死地におちた際、当時藤吉郎と申しあげた太閤さまと徳川どのが、万死をおかして敵をささえなされたおかげで、右府さまは御無事におひきあそばしたことがある。世にこれを金ケ崎の退き口と申して、退き口のいくさの手本となっておるが、このはたらきなど、とても欲得でできることではない。内府は義理を何より重いとなされるお方じゃ」

北政所さまは、遠い日をかえりみるように、なつかしげにこう申されました。

北政所さまが内府さまを重んぜられると御同様に、内府さまも北政所さまにはなかなかお気をおつかいあそばす御様子でございます。これはしもじもの風聞として、みな笑ったのでございますが、内府さまはあるお方にこう申されたことがあるそうでございます。

「わしは太閤に何ひとつ羨ましいと思うこともないが、ただあの女房どのばかりは羨ましい。わしは女をみな養いがたい愚か者と思うておるが、ただあの北政所ばかりには頭をさげる。さてさて太閤は、日本一の女房どのを持たれたものじゃ」

――そのむかし太閤さまは頼朝公の木像をたたいて、天下の英雄はわしとそなたのみじゃと申されたそうでございますが、この話もまた以心伝心、風月相知と申せるのではございますまいか。

何とぞ何とぞ北政所さまをお信じ下さいまし。そして、北政所さまのお信じあそばす内府さまをお信じ下さいまし。それで豊臣家は、きっときっと御安泰でございます。そして、あなたさまも御無事でございます。美也は、御無事なあなたさまを見るしあわせ以上のものを望みはいたしませぬ。それにつけても、このたびの合戦に、あなたさまにお変りもなかったことは、かえすがえすもうれしいことでございます。

三

――もはやおききおよびのことと存じますが、北政所さまにはこのたび洛東の高台寺に入らせられ、その名もすずしく湖月尼公と申しあげることになりました。申すまでもなく、京におひきこもり以来御念頭の、太閤さまのおん菩提をお弔いあそばしたいためでございます。

さりながら、この太閤さま御供養のため、尼公さまがお入りになるお寺が、大坂の手によらず、かえって内府さまのお志で、酒井どの土井どのの手で伏見のお城の木石を移して建てられたとは妙なことではございませんか。

御庭は小堀遠江守さまお作りなされ、樹石のあいだにせんかんと水がながれ、いま萩の花のさかりで、えもいえぬ美しいながめでございます。けれど、尼公さまの御身まわりは、いっそうさびしく相なりました。――実は、このたび高台院に入らせられるのをしおに、美也はおいとまをいただき、あなたさまのおんもとに参ろうと存じておりましたが、こうおさびしくおな

りあそばしたのをみるにつけ、とてもそのようなことを申しあげられませぬ。まして尼公さまには、「美也、美也」とお可愛がり下され、かたときもおはなしにならないくらいでございます。なおしばらく、尼公さまのみもとにおらせて下さいまし。

尼公さまは、年があければ、おんとし五十六におなりあそばします。もはやまったく浮世をおすてになったお心が、神々しいばかりにきよらかなお姿に拝察されます。それでも、やはりおさびしいのでございましょう。いいえ、お若いころの日がおなつかしいのでございましょう。わたしを相手に、いろいろな夜語りなどなさいます。

承われば承わるほど、有為転変と申しましょうか、万丈の波瀾と申しましょうか、世のつねの女どもにはとうていたえられぬ御辛苦の御一生でございました。そして、それだけに、まぶしいばかりの御一生で、いわば、いまの尼公さまは、おごそかな入日のお姿と申せましょう。

「美也。わたしたちの祝言はの、清洲の足軽長屋、茅葺屋根の下での、土間に簀掻藁を敷いたうえで、三々九度の盃をかわしたものであった」

と、笑いながら仰せられたこともございます。太閤さまの御一代はよくよく存じてはおりますものの、そう承わっても信じられないようなことでございます。そのとき、尼公さまには、わずかおんとし十四でいらせられました由――それが十年をややすぎたばかりで、はやくも長浜十二万石の大守羽柴筑前守さまの奥方さまなのでございます。

もったいなくも、ときどき織田右府さまや太閤さまのおふみをとり出させられて、美也にお

みせになることもございます。

そのころ――右府さまが尼公さまに下されましたおんふみのなかに、

「なかんずく、それの眉目ぶり、かたちまで、いつぞや見まいらせ候折ふしよりは、十のもの廿ほども見あげ候。藤吉郎れんれん不足のむね申すのよし、言語道断、曲事に候か。いずかたをたずね候とも、それさまほどのものは、またふたたびかの剝げ鼠相もとめがたきあいだ、これより以後は、身持を陽快になし、いかにもかみさまになり、おもおもしく、悋気などに立ち入り候ては、然るべからず候」

と、ありますのをみては、美也は笑いをおさえるのに苦労いたしました。「美也、笑うてよいぞ。太閤さまは、まことにお若いうちから、女ぐせのおわるいお方であった」こう仰せられて、尼公さまもおかしげにお笑いになりました。

それからまた十二三年――太閤さま九州陣のおり、尼公さまへお寄越しあそばしたおんふみには、

「今度の陣に、白毛多くでき申し候て、ぬき申すこともなり申さず候。御目にかかり候わんこと、そもじに、そもじへばかりは苦しからずと存じ候えども、迷惑に候」

などとございますのを読んでは、わたしも涙ぐみたいほどでございました。きっときっと、そのころの尼公さまのお髪にも白いものがみえそめたことでございましょう。

ながいながいたたかいの御生涯――苦楽をともにあそばしながら、どれほど太閤さまが尼公さまとお心とお心をひたとお合わせなされたか、そのおんむつまじさが、しみじみと胸にしみとおるようなおんふみではございませんか。

その一方で、太閤さまが、またどれほど尼公さまを大事になされ、むしろはばかっておいでなされたかがまざまざとみえるおんふみも数々ございました。恐れながら、太閤さまの御晩年は、みなみなさま、太閤さまより北政所さまの方をおたのみなされたという噂でございますが、それは御晩年にはかぎらないようでございます。お若いころから、奥向はもとより、御政道のことまで、太閤さまはいちいち北政所さまに御談合なされていたようでございます。肥後守さま、福島侍従さまたちが、いまでもしばしば尼公さまのおんもとへお寄りあそばすのは、決して御小姓のころからおとり立てになられた御恩報じとか、太閤さまへの御義理ばかりであるまいと存ぜられます。みなみなさま、尼公さまをこころから重んぜられておいであそばすに相違ございません。

大坂在城のみぎり、いちどならず耳にしたたわごとがございます。おそれ多いことながら、北政所さまは足軽の家のお生まれ、それにくらべて淀君さまはその御主君の右府さまの姪御さま、されば城のおんなあるじには、淀君さまこそ御相応と申すもの――こういうたわごとでございます。おそらく大野さま御家中などのお口から出たものでございましょう。主水正さま、どうぞその方々に申して下さいまし。それにむかっての御返事はこうでございます。

太閤さまが小田原陣から北政所さまへお寄越しなされたおんふみに、はっきりと、

「そもじにつづき候ては、淀のものわれらの気に合い候」と、ございます。つまり太閤さまは、淀君さまより北政所さまとお心もあい、御大切にお思いなされていたという証拠がこれでございます。申すまでもなく、このころまでに淀君さまには鶴松さまという若君がいらせられたことも御承知下さいまし。

まあ、わたしとしたことが、鬼の首でもとったように、あなたさまに切口上で申したてて、なんということでございましょう。それもこれも、みんな尼公さまびいきのものの申すこととしてお笑い下さいまし。

さりながら、大坂の方々の疑心暗鬼は、だんだんときえてきたことでございましょう。家康さまは、ちゃんと秀頼さまをお立て申しあげておいであそばすではございませんか。世は泰平ではございませんか。それはこの三月、家康さまは将軍とおなりなされましたものの、それは秀頼さま御成長をお待ちなされるかりの位でございましょう。その日まで、天下の泰平はつづくことでございましょう。ちと、四条河原に評判のたかい阿国の念仏踊りなど見物においであそばしませ。

四

——おわかれいたしましてから、もう何年になりましょうか。

ひさしぶり——ほんとうにひさしぶりにお手紙をさしあげます。筆もふるえるようでございます。

あなたさまとの祝言をあきらめ、一生尼公さまにお仕えする覚悟をきめてから、もはやあなたさまのことは思い出しもすまいとつとめて参りましたが、このごろ思い立ったことがあり、是非是非あなたさまにおねがい申しあげたいことがあるのでございます。

主水正さま、美也は二十九に相なりました。この春、御存じのように、わたしは尼公さまのおんともをして、大坂のお城に参りました。とびたつような思いをおさえて、あなたさまにおめもじいたしませなんだのは、主人に従っておりますものとして、そのいとまがなかったことと、もはや縁なき主水正さまに逢うことをみずから禁じたことのほかに、やはりあなたさまに二十九の美也の姿をおみせしたくないおろかなおんな心からでございます。

尼公さまが大坂のお城にこられたのは、何年ぶりでございましょうか。指おりかぞえれば、足かけ十三年ぶりでございます。尼公さまはおんとし六十三におなりあそばします。ちょうど太閤さまがこの世をお去りあそばしたときとおなじ年でございます。

わたしは、あなたさまのこと、そのほかさまざまな思いにくれながら、お城の門をくぐり、ふと、十三年まえ、この門のところで、尼公さまが、もえる夏の日にそびえ立つ天守閣をお見かえりになったときのことを思い出しました。

尼公さまも、きっと無量の感慨をもよおされたことでございましょう。なかんずく、御自分が、いま大御所さまのおたのみにより、秀頼さまが二条城で大御所さまとお会いなされるよう

におすすめにおいであそばそうとは。

そのおすすめの果ては、もう御承知のとおりでございます。秀頼さまより、淀君さまの方が、にべもなくおことわりなされたのでございます。

「秀頼は主で、家康どのが臣ではございませぬか。もし、たって秀頼に会いたくば、徳川どのがこの城においでなさるがよい」

淀君さまはこう仰せられて、どうしてもおきき入れではなかったのでございます。

「それとも家康どのは、大坂の城に入れられるのが恐ろしうおぼしめしているのではございませぬか。ほほほほ、わたしたちは、何もせぬに――おそらく、このお城で、殿下の御臨終に、秀頼さまに対したてまつり御奉公の儀、太閤さま御同然に疎略に存ずべからざる事、もし私曲これあらば、かたじけなくも霊社起請文御罰をも相こうむるべきもの也、と徳川どのがおされた血判がこわいのでございましょう」

けれど、淀君さまも、ほんとうは秀頼さまを二条城におつかわしになるのをこわがっておいでなされたのでございましょう。

尼公さまは、いたけだかな淀君さまに、身をかがめられてなおおすすめになりました。

「淀どの、それはそうじゃが、いちじの御堪忍じゃ。家康どのももはや七十、いかに御丈夫であろうと、さきはしれたもの。それゆえ気みじかになっておる老人の腹をたたせて大事となっては、豊臣家のためにとりかえしがつかぬ。――」

「御老人が、腹をおたてになる？」

それをどうおとりあそばしたか、淀君さまはじっと尼公さまをお見まもりになり、さげすむようにお笑いなされました。

「腹をたてるのはそちらの勝手」

と、吐き出すように申されたのでございます。

「大事となるとは、如何ようになることでございますか。太閤さまの御子をつかわして徳川に臣礼をとらせるくらいならば、秀頼を刺し殺して城に火をかけた方がましでございます」

そう申されたときの淀君さまは――わたしは尼公さまのお心をお汲みとりにならないくやしさのなかにも、思わず息をのみました。いろいろと下民どもの無礼な噂もある淀君さまではございますが、それはまるで炎のなかの花のように、そのりんとしたお美しさは、たとえるに言葉もないほどだったのでございます。

「淀どの、徳川どのに臣礼をおとりなされとは申さぬ。秀頼どのの舅のおやじさまに会いにゆくという気にはなれませぬか」

と、声もたかめず尼公さまは申されました。

「参らせましょう」

「きいてたもるか」

「ただし、家康どのの孫娘――千姫の首を手土産に」

まったく、狂気の御沙汰でございます。さすがにおだやかな尼公さまも、これにはお呆れになった態で、だまって淀君さまを見まもっておいであそばしました。わたしは火の花のような淀君さまのお姿に、十三年まえの尼公さまの、あの「あさはかなひとびとが、この城のもえおちるような始末をしてくれねばよいが……」というおんつぶやきを思い出していたのでございます。

その尼公さまをおにらみになって、

「高台院さまも高台院さまでございます。あなたさまが太閤さまの御子に恥をかかせるような御使者に立たれるとは——地下で殿下は、いかがおぼしめされているでございましょうか」

わたしは、淀君さまが尼公さまにこのような雑言をなさるのをはじめて耳にいたしました。それこそ、地下で太閤さまがおききあそばしたら、いかがおぼしめすでございましょうか。

そしてわたしは、淀君さまがこれほど癇をたかぶらせておいであそばすのは、御相手が尼公さまだからだということをようやく御推量申しあげたのでございます。わたしは、ふたりの女性のお姿を、まるで炎を吐きあう二匹の蛇のように……いえいえ、そうではございません。尼公さまの方はどこまでもものしずかに、

「ゆるしてたもれ、淀どの、そうまでこのことがお気に召さぬとは、婆の迂闊でありました。ひたすら秀頼どのの御無事をねがうあまりにひきうけたことじゃ。悪しう思われな」

と、あたまをおさげになりました。そして、しおしおとお城を去られたのでございます。

——けれど、この尼公さまの御思案が決してまちがったものでなく、その後、加藤肥後守さま、浅野幸長さま方の必死の御奔走の甲斐あって、秀頼さまと大御所さまが二条城でぶじ御対面あそばしたのは御存じのとおりでございます。さりながら、このたびのことについては、尼公さまもよほど御心をなやませられ、おくたびれになったものとみえ、このあと肥後守さまが御帰国の御挨拶に高台寺に参られました際、尼公さまらしうもない皮肉なお言葉をおもらしになりました。

肥後守さまは、この二条城での御対面のおり、秀頼さまのおそばにひたとつかれて、万一のことあらば大御所さまの御命頂戴せんとふところに短刀をのんでおられたそうでございます。その短刀をお見せなされて、

「秀頼さまには、まずつつがなく大坂へ御帰城あそばし、重畳しごくに存じまする。殿下の御厚恩にいささか報い得て、清正本望でござる」

と、申されたとき、

「肥後、苦労をかけましたのう」

と、尼公はうなずかれて、短刀をツラツラ御覧あそばしたのち、ふと、

「そなたは、まことに世の無事をねがうかや？」

と、おききあそばしました。肥後守さまはけげんな顔をなされました。なぜと申すに、世の無事をねがうことにかけて、尼公さまももとより御同意のはずだからでございます。

「いや、そうであろう」

尼公さまは、疲れたようなお顔に皮肉な笑みをうかべられ、

「世の無事は、そなたの無事でもあろう。秀頼どのと家康どののあいだにいくさでも起ったら、そなたの立つ瀬はあるまいからの」

と、仰せられました。肥後守さまは、このときみるみる紙のような面体に変られました。

肥後守さまが、その足で肥後に御帰国になり、そのまま御他界なされましたのは御存じのとおりでございます。あまりに唐突なことで、ふしぎなことに存じられましたが、きけば御帰国の船上から気分悪しう、御容態がわるうなられたとのこと、よほどこのたびの御奔走に心身をなやまされたことが、これでもわかるようでございます。尼公さまがどのようなおつもりで、左様なことを仰せられたか、美也にはわかりません。

まず、二条城のことはこれで御無事に相すみました。いくさなどの起ることはございますまい。いえいえ、大御所さまが豊臣家にむかっていくさをしかけられるわけがございません。秀頼さまの御台さま千姫さまは、家康さまのおん孫ではありませんか。淀君さまは、秀忠さまの御台江与のお方さまのおん姉君ではありませんか。そもそも大御所さまがこれほど湖月尼公さまを御大切にあそばすのは、太閤さまを御大切におぼしめすからではありませんか。

その徳川家と仲ようすることこそ、豊臣家万代のため——という尼公さまのおかんがえと、美也はまったく同心でございますけれども、それにもかかわらず——主水正さま、わたしはこ

の日ごろなぜか胸さわぎがしてならないのでございます。あの大天守閣がもえている恐ろしい夢に汗をかく夜がままあるのでございます。それはなぜでございましょうか。あのもえる火の花のような淀君さまのおん顔が眼にうかびます。ああまで徳川家をおふくみあそばすお方が、秀頼さまの母君では、両家のお仲がいつまでも安穏にゆくわけはないとも思います。けれど、なぜか——それよりもっともっと恐ろしい、大きな運命の跫音が、耳の底で鳴るのでございます。それはなおこの日ごろ、この高台院に往来し、御用談あそばす太閤さま恩顧の諸大名、また大御所さまの御使者の跫音がまじりあってかもし出す幻の音かもしれませんが、とにかく美也はいてもたってもいられないきもちにかられるのでございます。

主水正さま、やはりあなたさまはわたしの心に縁なきお方ではございません。どうぞ、一日も早う大坂のお城を御退去下さいまし。主水正さま、美也が心よりのおねがいと申しますのは、ただそのことでございます。

五

主水正さま！　主水正さま！

もはやお手紙をさしあげることはかないませぬ。こう呼びかけるあなたさまは、もう天にいらっしゃいますか。あの炎のこがす夜空の果てに。——

美也の悪夢そっくりの炎のいろでございます。さっき徳川方の伝騎が参り、今夕大坂落城い

たしましたが、この高台院に他意ござらねば御安堵下さるようにとの挨拶でございました。あなたさまは、とうとうわたしの申したことをおきき捨てになりました。もはやきっと討死なされてしまったことでございましょう。

けれど——所詮、あなたさまはこう討死なさるほかはなかったでございましょう。いまにして思えば、大坂の城そのものが、大きな不吉な手でしっかりとにぎられていたのです。いえ、去年の冬の陣以前から——もう二十年ちかくもまえから、——ああ、あなたさまをお助けしようとあがいたわたし自身が、その黒い手でつかまれていたことを知らなんだとは、なんということでございましょう。

夕ぐれ——尼公さまは、お庭に立たれて、南の方、山の夕空を染める赤いきみわるいひかりを、だまって御覧あそばしておりました。

「とうとう、お城はおちたと見ゆる」

ひくいしゃがれたお声で、そうおつぶやきになりました。わたしは歯の根もあわずふるえて、言葉もなくうなずくばかりでございました。

刻々に庭はくらくなり、刻々に夜空の炎はすさまじいひかりをして参ります。そしてわたしは、尼公さまのじっと見つめられるおん眼も、すさまじいひかりをおびているのをふり仰いで、遠い炎よりもっと恐ろしい思いにうたれたのでございます。尼公さまは片手に黒百合の花をにぎっておいであそばしました。そして、もう一方の手をしずかにあげて、指を折られたのでご

ざいます。

「慶長四年……五年……六年……十八年……十九年……慶長二十年五月七日」

この世のものとは思われぬ沈んだお声でございました。そして、そのつぎに吐かれたお言葉は、わたしをぎょっとさせたのでございます。

「足かけ十七年のわたしの夢がやっと叶うた」

「尼公さま——尼公さまのおん夢とは？」

「あの城のもえることよ」

尼公さまは、急に声をたててお笑いになりました。わたしはあんな恐ろしい笑い声をきいたことはございません。わたしはあんな恐ろしい尼公さまを見たこともございません。眼はおちくぼみ、むき出した歯がかたかたと鳴り、それは髑髏そっくりでございました。そして、ものに憑かれたように仰せ出されたのでございます。

「美也、わたしはの、関ケ原合戦のみぎり、いわゆる北政所党のものどもをことごとく東軍につけ、小早川中納言を裏切らせて、石田、小西の徒をほろぼし、豊臣家の手足を断った。好んで徳川と親しうして淀どのをいらいらとさせ、四年前、秀頼どのを恥かしめるような使者に立ったは、わたしが参れば淀どのがのぼせて断るは必定と存じたればこそじゃ。わたしは大坂と江戸の手切れを待ちくたびれておったのじゃ。さるにても、肥後守らは厄介者よ、わたしの心をかんちがいいたしたか、おのれらの保身のためか、それともまことに豊家のためと存じたか

……あくまで秀頼どのと家康どのとのあいだをとりもとうと汗をながしおった。気のながいこの尼も、ほとほとしびれがきれたぞや」

　徳川の使者が参ったのは、そのときでございます。庭にとおして手みじかな注進を受けると、使者はすぐに立ちかえりました。その蹄の音にお耳をおすましなされて、尼公さまは、吐き出すように仰せられたのでございます。

「古狸めが――おそらくわたしを上手に使ったつもりであろう。それを承知でわたしが乗ってやったことを知らぬのか。わたしの望みが、家康とおなじく大坂の城のもえおちることであったのを。――」

「尼公さま、豊臣家はあなたさまのものではございませぬか」

　わたしは思わずさけびました。

「そうであった。……この於寧のものであった。……淀の方がくるまではのう」

　お声はかなしみに凍りつくようでございました。ふりあおいでわたしは、このおんとし六十七にならせられるおん尼僧のうしろに、あの遠い火光よりもっとものすさまじい蒼白い炎がめらめらともえたつように思い、恐ろしさに気を失いそうでございました。

「わたしが、この京へひきこみ、淀のお方が大坂の城に入られてからではない。それよりまえ――あのおちゃちゃどのが太閤どのの側妾になられて以来のことじゃ。太閤どのは、あのお方を可愛がられた。このわたしはこわがられた。――いちいち、そなたの次に淀のものが気に合

うなど仰せられたは、片腹いたや、まず淀のものが気に合うと仰せられるも同然ではないか。糟糠の妻といわれ、貞婦といわれ、賢夫人とやら呼ばれ……幾年、幾十年、そのにがい思いにたえてきたことか？　いまの豊臣家は、わたしの豊臣家ではない。あれは淀どのの豊臣家じゃ。あれは淀どのの大坂城じゃ。もえよ、大坂城、滅びよ、豊臣家！　ほ、ほ、ほ、ほ」

　笑いは頭上の暗い天に鳴りどよもすばかりでございました。そして尼公さまはおん手の黒百合の花をはっしと地になげられて、おみ足でふみにじられるのでございます。

　そのもえる大坂城の炎のなかに、主水正さま、あなたさまのおいのちももえていたのではございませんか。わたしはあなたさまのことを思い、わたしのいままでの一生を思って、からだじゅうの血の気がひくようでございました。ものをかんがえる力も失せ、眼をひらいたまま、わたしはしばし死びとのようになっていたのでございます。

　その死びとのようなわたしの眼に、それでも尼公さまのおん眼にふと涙がひかるのがうつったのをおぼえております。尼公さまが急にほそぼそとしたお声でこうつぶやかれたのも耳にのこっております。

「あの城は、わたしと太閤さまと、ふたりで作ったものであった。……もはや、何もない」

　ああ、主水正さま！　主水正さま！

明智太閤

のちのちまで、そのことを思い出すと、太閤自身、天意というものに一脈の肌寒さをおぼえる。

若しもあのとき、本能寺の変の第一報が敵方に入っていたら？

一

天正十年六月二日未明、本能寺にあがった炎と叫喚に、界隈の人々はおどろいて起きあがったが、三条の茶屋四郎次郎の寮でもその例外ではなかった。はじめ、ただの近火かと思い、それが本能寺であることに気がつき、さらに凄まじい矢うなりと刀槍のひびきに、次第に四郎次郎の顔色がかわっていった。様子をみにかけ出していった使用人たちも、すぐにげもどってきた。殺気にみちた武者たちに追いかえされてきたのである。最初の知らせをもたらしたのは、信長の茶道衆長谷川宗仁であった。

「たいへんです」

「お、宗仁さん、いったい何事が起ったんです」

「明智の謀叛です。たいへんだ、たいへんなことになってしまった！」

「えっ、では右府さまには――」

宗仁はそれにはこたえず、四郎次郎にしがみつくようにして、

「御主人、飛脚を貸して下さい。この場合、織田家の飛脚をさがしているひまがありません。それで、そうだ、このおうちならばと気がついてとんできたのです。寸刻もあらそう使いです。はやく飛脚を貸してください」

「飛脚――ど、どこへ？」

「備中陣の羽柴筑前どのへ」

茶屋四郎次郎は庭にむらがってさわいでいる人々のうち、ひとりの男の名をよんだ。主人によばれてかけてきたその男の足は筋肉が黒びかりして、異常に長かった。四郎次郎が彼に用をいいつけているあいだにも、宗仁は縁側に腰をかけて、もらった紙にふるえる矢立をはしらせている。

「宗仁さん、ここから高松まで、およそ七十余里、それをこの男なら一日半で走りとおしてみせるといっています」

と、四郎次郎はいった。

すぐに兇変を知らせる書状は状筥におさめられ、その男の背にかつがれて、疾風のごとくか

け去った。茶屋四郎次郎は堺の納屋衆で海外貿易を家業としている。それで、堺とか、博多とか、京とか、一日を争って連絡する必要があるので、そんな飛脚をやとっているのだが、それにしても七十余里を一日半でゆくとは超人的な脚力であった。

「四郎次郎」

うしろで呼ばれて、茶屋四郎次郎はふりむいて、はっとした。そこに十六七の異様なばかりに美しい娘が、真っ黒な瞳をひろげて立っていた。

「お茶々さま」

と、四郎次郎はあわててその娘をおしもどして、

「おちついて下さいまし、えらいことになりましたが、どうにもなりませぬ、いまのところは、どうかこのまま、じっとなさって――いや、明智衆の眼にかかって、万一のことでもありましたらいけません。お茶々さま、どうぞ奥へ――」

おしもどされながら、西空の、いまにもここへ燃えうつってきそうな炎を、恐れる風もなくその娘は見あげていた。

信長の姪お茶々さまである。ふだんは未亡人の母といっしょに尾張の清洲城内にくらしているが、こんど伯父の信長が三日ばかりまえから安土から京都にやってきて、すぐに中国へ出陣してゆくというので、それを見おくりがてら京見物をするように母からゆるされて在京していたのであった。信長でさえ京に特定の宿舎がなく、本能寺に泊っているくらいだから、彼女が

有名な富豪の茶屋四郎次郎の寮に託せられたのは、決して不自然なことではない。

お茶々は素直に人だかりからはなれたが、庭の泉水のそばにくると、ひとり不安そうにあとについてきた小柄な老人をふりかえった。

「源八爺や」

「はい」

「いまの飛脚に追いつくことができるかえ?」

「一日半で七十里はしると申しましたな」

老人は、指をおり、かるく足ぶみした。

「おそらく。――」

お茶々の陶器のように白い顔に朱がさしたが、それは燃え狂う炎の火照か、血潮のいろかわからなかった。

「追って、あの飛脚を殺し、書状は毛利におとどけ」

空は暗いのに、大地はひかっている。墨のように渦まいてながれる雲の下は、渺々たる泥湖のひろがりであった。ところどころ点々と黒く浮いてみえるのは、森のいただきだが、そのまんなかに、いまにも沈みそうに小さな城があった。毛利方の最前線、高松城の惨澹たる姿だ。これをめぐる百八十八町歩の泥湖は、城の抵抗に業をにやした羽柴秀吉が足守川、長良川、長

野川などをせきとめ、流れを変えて、五月十九日の一夜につくり出したものであった。

毛利勢四万の大軍が来援したのは二十一日のことである。わずか二日の差で救援軍はこの人造湖の汀にくいとめられた。わるいことに、中国路に豪雨がふりつづき、湖の濁流は渦まきかえって、さすが毛利の精鋭も、むなしく水中の城を遠望するばかりであった。が、拱手してすごせば、刻々ふえてゆく水に城は没するのみである。いや、それより、信長自身大兵をひきいて出撃してくるという情報があり、五月末、ついに割地をみとめる代り、城兵の生命を保全する条件の和議を提出した。秀吉はこれを拒絶した。城将清水宗治の誅戮はゆずれないというのである。毛利方は憤然として話は物別れになった。

そしてきょう、六月三日、雨はあがりはじめた。三万の羽柴軍は、湖の西岸に四万の毛利軍が、船やら筏やらくみたてて、しきりにうごきはじめたのをみた。やむなく毛利が戦闘準備にとりかかりはじめたのはあきらかであった。夜に入って、「いよいよ警戒を厳にせよ」という命令が秀吉から発せられた。

うすい月さえ出たその夜半。——羽柴軍の歩哨線に、まろぶようにかけていった影がある。ただし、後方の東からだ。そのため、それをみた哨兵もとっさの判断をうしなって、はっと眼を凝らしているうす闇に、

「もしっ羽柴さまの御陣はこのあたりですか。筑前守さまの御本営はどこに——」

絶叫が、そこでぷつんと弦でもきったように消えると同時に、影はもんどりうった。

「何だ」

「何ごとが起ったのだ」

数名の哨兵がその方へかけるよりはやく、もうひとつの影がやはり東方から疾走してきて、たおれた影の上にとびかかると、何やらうばいとった気配であった。とみるまに、たちまちとび立って、殺到する兵士のまえから、横へにげ出した。

「怪しい奴だ」

「待てっ」

抜刀して追いすがる哨兵より、にげる影はふいごみたいな息をはきながら、もっと疾かった。ひとり、たおれていた影をひきずり起して、その背に異様な武器がくいこんでいるのを発見した。ぬきとってみると、半月のような錐である。忍者独特の大坪錐という道具だと知れたのはあとになってからだ。これに刺された男は、もう死んでいた。

「曲者だっ」

「のがすな、待てっ」

「そっちは泥の海だぞっ」

ののしりながら追撃する前方からも、いたるところ哨兵がとび出す。二三度とらえかけたが、影は敏捷にそれをくぐりぬけ北へはしった。そしてにぶくひかる泥湖のふちまでかけつけると、いちどふりむいた。ほそい月にその男の髪が銀のようにひかるのをみて、すぐうしろまで追っ

ていた兵が息をのんでわらじを土にくいこませたとき、その老人は水けむりをあげて湖へとびこんだ。

十四五人も水際にかけつけてきた哨兵から数条の赤い火線が湖面にたばしった。が、うすい月に渦まく泥湖は、人影やら浮流物やらしかとみえず、そのうえ、その月影さえもまた密雲に閉じられてしまった。

二

この怪事に色めきたった羽柴の哨戒線に、もうひとりの怪しい男がかかったのは五日ひるすぎのことである。それは鴉天狗みたいな顔をした修験者であったが、弁解の言葉もきかずに屯営にひかれていって、無数の槍の柄でたたきのめされた。その痛みより、屯営のただならぬ様子から、すぐに彼は絶望的になったらしい。明智日向守から毛利へゆく使者であることを白状した。

鞘よりも二三寸みじかい戒刀の鞘のおくから、小さく折りたたまれた書状を読んで、調べにあたった部将の総身から血の気がひいた。六月二日、悪逆無道の信長を討ちとった。しかれば日向守近日に羽柴筑前追討のため発向するつもりであるが、そちらと中にはさんで、筑前にぬき足させず討ちとり申すべし、その上はいかようにもお望みに応じ候わんとかいた明智の毛利への秘状であった。

これをみて、秀吉は驚倒した。一時間あまり、呆然自失のていであった。やがて、黒田官兵衛、浅野弥兵衛、蜂須賀彦右衛門ら帷幕の臣たちがぞくぞく呼ばれてからも、湖を俯瞰する立田山の本営は、数時間、そこに入った人間はみな死にたえたかと思われるくらい寂としていた。

敵にのしかかっていたところを、ふいに大地を崩されたようなものである。常人ならば失神状態におちいるところだ。しかし、この十死に一生もない窮地に、実に途方もない大ばくちをうち出したのは、さすがは秀吉であった。このまま毛利方の申し出た条件のうち、領土はいらぬ、ただし、織田の面目にかけて、清水宗治のみに切腹させろ、それならば和議はうけてもよいという高飛車な申込みなのである。

「では、さっそくにも、安国寺を」

と、たちかける弥兵衛を、

「待て、夜に入ってにわかに呼び出せば、安国寺も敵も不審の気を起そう、肚をしずめて、明六日まで待て」

「そうです、筑前どの、敵が不審の気を起す——しかし、敵の手にすでにこの兇報、敵にとっては快報が入っておりますまいか。昨夜、哨戒線をのがれて湖へとびこんだ曲者が気にかかるのですが」

と、黒田官兵衛が不審げにいった。

「うむ、それはわしにもちと気にかかる。しかしな、この明智の書状によると、この兇変の起

ったは二日の朝であるぞ。それが一日半で京からここまで七十余里とんでくるとはかんがえられぬ、明智の密使がせいいッぱいのところであろう。ましてや、湖へとびこんだ曲者は白髪の爺いであったという。いよいよ以て無縁のものとみる。おそらくあれは、盗賊同士の争いではあるまいか」

と、秀吉は断じた。

こちらからさし出した手をむこうがにぎるかどうか——和議なるや、疾風のごとく兵をかえすという奔放不敵な奇策が成功するかどうか——そのための最低条件は、信長死すという悲報を断じて敵に知られてはならないのだ。すでに哨戒の網の目は蟻一匹ものがさぬほど張られていたが、一方で、味方の兵にすら、撤退の瞬間まで秘密をたもたなければならぬ。なかんずく、毛利方から先日来の和議の談判にきて、その不調になおみれんをのこしてこちらの陣中にとどまっている外交僧安国寺恵瓊に知られてはならぬ。明智の密使は即刻ひそかに斬るように命じて、秀吉は席を立った。

すでに深夜であった。幕のむこうでは、すぐに放胆ないびきがきこえた。いつのころからか、じぶんに天運がついていることを確信しはじめている秀吉であった。信長の死をきいて、一時は自失したものの、いまや密議の席ではすでに眼に笑いのひらめくのを一同はみた。この大兇報すら、もはやおのれの天運のひとつにかんがえていることはあきらかであった。

翌六日朝、安国寺恵瓊は毛利方へもどっていた。敵陣営に属する人物ながら、はやくより秀

吉に眼をつけて、秀吉に天運ありという信仰をうえるのにもっとも影響をおよぼした怪僧である。

しかし、小舟にのって、湖をわたり、毛利の陣営にちかづいてゆくにつれて、彼の背に理由のわからぬ妙な不安感がしのびよった。いつのまに作ったのか、いや、そのいくつかは、おとといい、きのう、織田方の陣営で遠望したが、それからは想像もつかないおびただしい筏が、濁水にひたる森蔭に隠顕しているのである。それよりも、毛利の陣営そのものに、曾て見たことのない、天もつくような壮気と戦意が波うっているのが感じられるではないか。何が起ったのか、見当もつかない。

「小早川の殿はおられるか」

舟とともに心の動揺をおぼえつつ、安国寺は岸にちかづいてよびかけた。

「織田方より、安国寺帰陣つかまつった。先般来の和議の件につき、あらためて話合いいたしたいことがあるとのことです」

岸につくと同時に、向うから扈従をしたがえて、小早川隆景がゆっくりとあるいてきた。

「安国寺か。ちといそぐことがある。この場できこう」

と、彼はいった。いったい最初の和議はこの隆景と安国寺の方寸から出たもので、父の元就に似て温厚篤実そのもののような面貌に、いままで恵瓊のみたことのない凄じい気魄があった。安国寺恵瓊は、すでに気をのまれて、秀吉の新しい条件をのべた。

「筑前は狂人か」

穴のあくほど恵瓊の眼をのぞきこみながら、ききおえて、最初に隆景の口からもれたのがこの言葉であった。

「右府を討たれて逆上したか。それとも、あの猿冠者め、苦しまぎれの鬼面でわが方の胆をひしごうという子供だましの悪知恵をしぼったか？　もはや、すべては承知だ、その手はくわぬ！」

気死したような安国寺は、殺到してきた雑兵に両腕をとられ、隆景のまえにひきずられていった。

「それにしても安国寺よ、そちは毛利のために敵営に使いしながら、いつのまに筑前の犬となったか。それほどの大事を秘して、何くわぬ顔で左様な白痴の話をうけてもどるとは、あきれはてて二の句がつげぬ。それが毛利に過ぎたるものと評判たてられた安国寺のすることか」

「右府——右府が討たれましたと？」

恵瓊はあえいだ。けれど脳裡には、昨夜から秀吉の本営にながれていたただならぬ空気を思い出して、さては、と驚愕していた。不覚といえば大不覚、迂闊といえば大迂闊だ。しかし、だれがそのような大変事を空想できたであろうか。

「うそです。筑前が、それほど手ひどく拙僧をあざむくものとは存ぜられぬ！」

「うそか、まことか、あの世へ参って信長にきけ。いいや、やがて筑前も追いおとしてくれる

ゆえ、地獄で筑前に恨みをのべよ。裏切者！」

隆景の陣刀が一閃して、安国寺の首はまえにおちた。その血のしずくを刀とともにたかく宙にあげて、隆景は吼えた。

「よし、討って出でよ、右府信長はこの世にないぞ、敵はすでに喪神しておる。恐れるな、ひるむな、一押しすれば崩れるは必至、崩れたらばまっしぐらに、ひとりのこらず追い殺せ！」

その声がりんりんと湖の果てまでひびきわたると、穂すすきのような刀槍と雄たけびを盛った無数の筏が、対岸めがけて漕ぎ出された。

突如として秀吉が、鼠みたいににげ出したのがわるかった。

顔も鼠に似ているが、それに似げなく豪気で陽性なこの人物にはめずらしい醜態である。——もっとも、まっさきに馬で駆けながら、「かまうな、毛利に手出しするな、京にこそ大事がある。おれのあとからこい、おくれるな、いそげ、いそげ！」と叱咤の声を風にのこしてはいったのだが、何もしらされていない羽柴の将兵の大半は、ただあっけにとられるばかりであった。

もっとも、秀吉が狼狽したのは当然だ。本能寺の難を知った直後、彼の何より戦慄したのは、ここに膠着して、明智軍との挟みうちとなることであった。だれよりも、光秀自身が毛利にその決意をつげているのである。その運命をのがれる唯一の方途は、一刻もはやく上方へもどっ

て、織田の諸将をみずからの手に糾合し、優勢の裡に明智と相対することにあった。といって、なんの策もほどこさずに退却を開始すれば、毛利の追い討ちをうけるは必定である。そこで、まず当面の敵の胆をぬいておくべく、のるかそるかの大ばくちをうったのだが、事態は最悪の相を以て酬いてきた。策士策にたおれるの趣きがあって、こういう結果になるならば、最初に事変を知った四日の未明になんのためらいもなく撤退作戦にうつるべきであった。

彼がまっさきかけてとび出したのは、むろん毛利をおそれてではなく、この最初の考えに敏速にもどったからである。恥も外聞もあとになればすすげることだ。何か一事に失敗してもそれに拘泥せず、涼しいばかりの回転速度を以て新しい方策にのりかえるのは、秀吉の一大長所に相違なかった。

秀吉の遁走もしらず、ござんなれと毛利軍を迎撃しようとしていた将兵は、このときようやく、「右府さまが亡くなられたのだ。信長公が明智に討たれなされたのだ」という地震のような声にゆりうごかされた。——しかし、あとにのこされた将兵こそ災難であった。

ひとたび潰乱におちいった部隊の退却ほど惨澹たるものはない。雪崩をうって敗走する羽柴軍を、またふり出した六月の雨しぶきが無情にうちたたいた。河はあふれていたるところで道を絶ち、追いすがる毛利勢の鉄蹄の下に血泥になった。これがいかに悲惨な退却であったかは、三万の羽柴軍が、秀吉の本城姫路にたどりついたとき、実に一万を相当下廻っていたことでもしれる。すくなくとも、九日の朝、秀吉が疲労困憊した痩軀を姫路城になげこんだ前後にはそ

うであった。気だけはあせりながら、高松から姫路まで二十里の路に三日を要したのは、この河の氾濫と敵の追い討ちに足をからまれたせいである。

それも秀吉には覚悟のまえであった。しかし、彼の心にはじめて暗澹とした風が吹いたのは、自負にみちた彼が、或る意味では自分以上に買っていた謀将黒田官兵衛を失ったことをきいたときであった。ちんばの官兵衛は、毛利軍がようやく追撃をあきらめた備前の辛川までやってきてから、落馬して、うしろにつづく馬の蹄に脾腹を蹴られて落命したという。そして——

「ちぇ、猿めの猿智慧にうかとのって、あたら天下取りが野たれ死するわ」という自嘲が、雑巾のような唇からもれた最後の声だというのであった。

惜しい人間を殺した、と思う。信長の死には泣かなかった秀吉も、じぶんと背中合わせの双生児みたいに相似した頭脳、死生観をもっていた官兵衛の死には落涙した。——が、これもまた、この戦国の世にはあり得ることだ。さむらいはだれでも、おれだけは死なぬと思っているが、死ぬときにあえば、だれでも死ぬ。とはいえ、官兵衛にはきのどくだが、秀吉だけはべつだ。おれには死ぬときはこぬ。それはおれの確信のみならず、天のこころだ。げんにおれはちゃんとこうして生きぬいておる。

それにしても、あの官兵衛が、最後に愚痴をこぼしたというのは可笑しかった。おれだけは、どんなことがあっても泣きごとは吐かぬ。それだけでも官兵衛とはちがう。

——官兵衛、やはり、天下取りのほんものはおれだ。

秀吉は、彼特有の天空海闊の笑顔のまま、眠りたらぬ眠りに、ぐうぐうとまた入ってしまった。

三

秀吉が迅雷の行動をふたたび開始したのは、十日の夜明け前からであった。彼のみは前日の夕刻には眠りからさめて、蘇ったような活力を回復していたのだが、あとの将兵が泥のように疲れはてて、棒でぶってもたたいてもうごかなかったのだ。

姫路から明石へ、兵庫へ、尼ガ崎へ——十二日、河内の富田に進出するまでは神速であったが、ここではじめて秀吉は真の蹉跌に気がついた。期待していた織田方の諸将がほとんど参陣しないのである。

光秀の娘を嫁としている丹後の細川藤孝、忠興父子がこないのは当然として、大坂にある織田信孝、丹羽長秀、有田の池田勝入斎、摂津の中川瀬兵衛、高山右近ら、すべて或いはすくみ、或いはすでに明智の側に寝返っているのだ。秀吉の急使に彼らはすべていった。

「筑前どの、一日おそかった！」

それは一人がひかれ、二人がくずれ、はてはことごとくが浮足だったことの弁解もあったが、たしかにそれも事実であることが看取されたのである。たとえ光秀が逆賊であるにせよ、過去の実績、現在の声望からみて、正面きって光秀に対抗できるものはひとりもない。「一日おくれた」——わずか一日、しかし、あの大変事以来、これにかかわる諸将すべて一日の狂いによって全運命を狂わせる危急存亡の事態におちいったのだ。そのもっとも典型的な例が山城の筒井順慶であった。彼は最後までにえきらず、むしろ一時は光秀と絶つ決意までしていたが、きのう十一日まで、山城と河内の境にある洞ガ峠まで出張して彼にせまった光秀に、ついにひきずりこまれてしまったというのであった。

一日ちがい！

秀吉はふと虚ろになった眼を、やがてたたかうべき敵のいる東の空にではなく、あとにたたかってきた西の空になげた。毛利に小細工をした酬いが、恐るべき明瞭さを以ていまあらわれてきたのである。時日と、兵力と——すべては、あの策略がこっぱみじんにくだかれたことからくるつまずきだ。彼の天才が成功することを直感したあの奇策が、みごとにうらをかかれたのは毛利がじぶんよりさきに本能寺の変を知っていたことによる。それを毛利に知らせた者はだれか。

事態がことごとく期待からはずれてゆくので、焦燥ににえくりかえるような富田の屯営に、信長の茶道衆長谷川宗仁がかけこんできたのもその十二日であった。事変はじぶんのたてた飛脚によって知ったのか、というのである。「左様なものは知らぬ」と、秀吉はめずらしくふきげんに一喝して追いかえしたが、いまふと彼の虚ろになったあたまをかすめたのは、三日の夜、高松の哨戒線で殺された男と、にげた男のことだ。殺された男が宗仁の飛脚にまちがいないと

思われた。しかし彼を殺して湖ににげた老爺は何者か。それはさすがの秀吉にもまったく見当がつかない謎であった。おそらく毛利に告げたのは、その老爺だ。じぶんをこの大苦境におとし入れたのは、その魔のごとき怪老人に相違ない。

しかし、彼のあたまは、過ぎたつまずきをすぐ捨てた。それを呪っておれる場合でもなかった。局面は文字どおり一刻ごとに悪化しつつあった。もはや、二度と退却はできぬ。織田家の四天王、柴田、滝川とならぶ明智が、やはりその一人と目されたじぶんを他の小大名なみに大目にみるものとは思われぬ。それどころか、野と巷からともに身を起した木下藤吉郎、明智十兵衛の時代から、いまの羽柴筑前、惟任日向守の栄光に照らし出されるまで、その立身のはやさから、いずれの天運強きやと、ひともおのれ同士も生涯の好敵手と目されてきたふたりである。しかも近来急速にじぶんの側に陽があたり、むこうの側の日あたりがわるくなってきた相手であった。光秀がどんなに深刻な嫉妬の眼でじぶんをみているか――いや、急遽、中国から陣をかえしたじぶんの意図をいかにさかんな闘志の眼でむかえているか、それは山崎のむこう円明寺川一帯にかけて、雲霞のごとき大軍を集結しつつあるという情報でもあきらかであった。

明智本来の兵力、一万六千、これに高山二千、中川二千、池田五千、など確実にその陣営に加わったもののみを加えても総計二万五千。これに対して孤軍の味方は、なお中国陣の傷癒えぬ一万足らず。絶体絶命であった。

しかし、それで意気屈する秀吉ではなかった。彼のあたまを田楽挟間に於ける信長の乾坤一

擲の快勝がかすめすぎた。挟間――はざま、京と大坂をむすぶ山崎街道こそ、天王山と淀川にはさまれた典型的な隘路だ。寡を以て衆をうつ絶妙の戦場が光秀とじぶんのあいだにある。

「惟任――なんじの天運と、わしの天運と、どちらが最後に笑むかまだわからぬぞ。主君を害して、かたむきかかったなんじの天運を一挙に中天におしあげようとしたことがそもそもむりだ、不自然だ」

秀吉の眼が電光のようなひかりをおびてきた。彼は命じた。

「天王山を乗っ取れ」

明智の桶狭間は本能寺だ、と光秀はかんがえていた。

先天的に肌があわなかったせいもある。そのことにひとたび鋭敏に気がつくと、徹底的に相手をいためつけずにはすまない強烈な意志の犠牲となってかぞえきれぬほどあびせかけられた恥辱や怨恨の想い出もある。しかし、とうてい抵抗はできないと思っていたあの恐ろしい独裁者を、一夜にして夢まぼろしのごとくかき消した可能性の根源は本能寺にあった。いやそのみごとな結果よりも、そもそも、信長が扈従わずか四五十人の軽装で本能寺に泊るということを知ったとき、光秀の全身をはためきすぎた最初の霊感にあるといってよかった。

悪夢につかれたようにその一夜に脳漿をしぼり、それがあまりにもあっけなく成功したあと、一日ばかり光秀はむしろ虚脱状態におちていた。突如としてその虚ろな体内に現実的な野心が

ふくれあがってきたのは、そのあとである。彼はたちまち織田家随一の智将といわれた本来の面目を発揮しはじめた。いや、それどころか、彼はすでに、まさしく天下様であった。変後の掃除に少々手がかかるが、いまじぶんのやってのけた大仕事にくらべれば何であろう。

三日には安土に入って城を収めると、ただちに京へひきかえして、八方の大小名に懐柔と威嚇の矢をなげはじめた。最初計算していたとおり、もっとも警戒すべき柴田は越中に、滝川は上州に、そして羽柴は備中に、それぞれ当面の大敵に釘づけにされて、とっさに反転できるはずはなかったし、あとにのこった大小名は、案のごとくであった。そのなかでいちばん光秀を笑わせたのは、信長に招かれて上洛し、そのあと堺にあそんでいた家康が、あの変事に胆をつぶして三河に逃げもどろうとして、途中伊賀伊勢の国ざかい加太越えの難所で土賊のために殺されたという情報であった。一方で光秀は朝廷に供物を献じ、五山の寺院にそれぞれ贈遺し、洛中の地子銭を免じて上下の甘心を買うことを忘れなかった。一日彼の陣営に地子銭免除の礼に町人たちがやってきて、ちまきを献上したとき、ふと心ゆるんで笹ごと口に入れたことまでも、なんとなく大気で愛嬌があると市民の好感を得たくらいである。

その順風満帆の光秀の船のゆくてに、波があがったのをみたのは、九日、秀吉が兵をかえしてすでに姫路に入ったという情報をうけたときである。羽柴がどうして毛利から足をぬいたのか、やや意外で光秀は動揺した。しかしそれが強引な撤退作戦で、敵の追撃と道中の剣難のために、かえったのは半死半生の三分の一足らずの兵だときいて、さもあろうと手をうって笑った。ゆだんのならぬ男ではあるが、しょせんは倶に天をいただかない相手である。時をかして、秀吉特有の奇策をめぐらされるよりも、いま意気天をつくじぶんに、のぼせあがってとびかかってくる猿冠者は飛んで火にいる夏の虫といえた。光秀は大々的にこれを迎撃する戦闘準備にとりかかった。

十三日、御坊塚の本陣にあって、羽柴軍の動静をみていた光秀は、一万の敵が猛然として山崎の隘路に入ってきたという伝騎の報告を受けて、

「筑前は狂気したのか。――なんじの天運はきわまったり」

と、これまた眼を電光のごとくかがやかせて立ちあがった。彼は命じた。

「天王山を乗っ取れ」

火ぶたの切っておとされたのは午後四時ごろであった。梅雨どきではなかったが、無数の黒雲が疾風のごとくながれ去り、日と翳の交錯する天王山に死闘がくりひろげられた。しかしそのはげしさに反して、たたかいはみじかかった。明智の二万五千と羽柴の一万、明智の方が一万の兵をあげて羽柴がこれに対抗しようとすれば、かんじんの本陣は無人となるわけである。勝敗はたたかわざるにすでにあきらかであった。

――その日の深夜、宇治から山城の方へむかって、這うように山中をさまよってゆくふたつの影があった。ふたりとも鎧は血泥によごれ、ひとり杖についた刀はきっさきが折れている。

雲間から出た月がその凄まじい姿を蒼く染め出した。これはたたかい敗れた羽柴筑前とただひとりついてきた小姓であった。

月は樹間の草むらの中に、地におちている小さな桃をも照らし出した。秀吉はふいにかがみこむと、それをひろいあげて口にもっていった。

「殿、お待ち下さいまし」

と、あわててとめた。

「なんじゃ、佐吉」

「それはまだよく熟しておりませぬゆえ毒でござります」

「たわけ、いくさにまけた大将が毒忌みをして何とする」

小姓の石田佐吉は流血と饉餓にゆがむ表情のうちにも、利発げな眼をかがやかせていった。

「そうではございませぬ。大将たるものは、たとえ首をはねられるときまでも命を大切にして、あくまで本意をとげようと努めるべきではございますまいか」

秀吉は、返事もせずに坐りこんで口をうごかしていた。かたい山桃を夢中でかじっている主人の顔を何かに似ていると思い、佐吉は落涙した。

「本意か。――」

と秀吉はようやく桃をたべおえてつぶやいた。

「もし大将の本意というならば、わしは山崎で討死すべきであったろうな」

「そうではございませぬ。生きかわり、死にかわり、どこまでも再挙をはかるのがまことの武将でございましょう。殿、しっかりなされませ、いつもの殿のようではありませぬ」

「まことの武将――では、おれはないようだ。すくなくとも、武運の星はついておらなんだようだ。おれは大ばくちをしくじったよ。しかし、だから、おれは生きのびたことを恥とは思わぬ。おれはもともと野から出た男だ。いまこの山の気を吸い、山桃をかじって、三四十年のむかしを想い出した。野にかえるのも、わるくはないな。……」

秀吉は腰がぬけたように坐ったきり、いつまでもうごこうとしなかった。

四

太閤光秀が、本能寺の変の第一報が敵の秀吉の手に入らず、毛利の手に入ったわけをはじめて愛妾の淀君の口からきいて、一脈の肌寒さをおぼえたのは、それから五年後のことであった。

わずか五年のあいだに、世は、これが信長の君臨していた世とおなじものかとじぶんでもふしぎなぐらい変った。世間には、どこか武士らしい折目ただしさをもちながら、知性と優雅を失わない文化が咲き匂っていった。こうまで天下が泰平になったのは、本能寺変後、秀吉、家康、黒田官兵衛など、一波瀾起さなければおさまらない野心家たちが死んだせいもあるがやはり人心が信長の鉄血政治に戦慄して、心から平和をのぞんでいることをみぬいた、じぶんの低い姿勢の施政にあったと思う。毛利はもとより、南の果ての島津やら、北の果ての伊達までが

存外やすやすと慴伏したのも、しょせんはこの世の潮に抵抗することができなかったせいであったろう。柴田勝家にしてもそのとおりなのである。それに聡明な光秀はすべて先手先手と粗放な柴田の意気をくじいていった。柴田が以前から恋着していた信長の妹お市御寮人を彼に再婚させる世話をやいてやったのも光秀であった。お市の方に対しては、柴田のみならず、じぶんも、はては可笑しいことに、あの猿までも憧憬していたので、すこし残念であったが、しかしそれまで髯をくいそらせて不平満々の表情をしていた柴田が急に泰平をたのしむ顔に変ったのは、たしかにその結果にちがいなかった。お市の方を再嫁させるのと同時に、彼女が最初にとついだ夫で信長に攻めほろぼされた浅井長政とのあいだに生まれたお茶々とふたりの妹をひきとって、淀の城に住まわせたのは、光秀の信長に対する罪ほろぼしのこころからである。

　まるで天寵の化身のごとく、じぶんのゆくところ栄光と幸運の夕映がついてまわるようになると、いっときは信長の世にのこしたものすべて打ちくだきたいとさえ思われていたものも、寛大にみとめるようになったのも、次第にわいてきた仏ごころからである。

　切支丹の教会や伴天連(バテレン)もそのひとつで、それには光秀がその一点だけ信長と共鳴する近代性のゆえもあったが、もうひとつ細川忠興のところに嫁にいった娘のお玉が、いつのころからか洗礼をうけて、教名も伽羅奢(ガラシャ)と名のる熱烈な切支丹となっているのにひかれたせいもあった。そのせいでいまでは、京洛に黄金の十字架をそびやかす壮大な教会も二三にとどまらない。

　光秀がお茶々を愛妾としたのは、一年ばかりまえのことである。淀の城へ何かの用でいった

伽羅奢が、また別の用で父にあったとき、ふと、

「お茶々どのはこわい方ですね」

と、つぶやき、その意味をきくと、

「どういってよいかわかりませんが、あのお方にはすこし悪魔的なところがあります」

と、いよいよわけのわからない返事をしたのに、ふいと好奇心を起して、一日淀の城へ出かけてみたのがはじまりであった。

　お茶々はそのとき二十一になっていた。光秀は若い日のお市の方があらわれたのかとびっくりした。いやそれより、この世のものならぬ美しさに息をのんだ。この絶世の美姫が淀の孤城にだれ手折るものもなく咲いているのをみて、光秀の心はいたんだ。といって、だれか余人のものとする気持はいよいよなかった。伽羅奢のいうことはあたっているのかもしれない、と光秀がこころにさけんだとき、光秀はすでに欲望の悪魔にとらえられていた。

　本能寺の変という凄まじい狂乱の炎を生涯にただいちどもえあがらせたきり、それ以前にはいくたびか信長から「日向の分別面」とからかわれ、それ以後はますます分別の皺をふかくしている六十歳の光秀に、二度めの炎をあげたこの欲望は、まさに悪魔的な力をもっていた。彼は彼女を愛妾とした。

　伽羅奢はお茶々をこわいひとといったが、光秀はしかし幸福の絶頂にあった。六十になって、はじめて女というものを知ったような気さえした。いまの光秀の小さな心配は、もし淀のお

茶々に男の子でも生まれたら、二年前関白をゆずった養子の忠興をどうしようということくらいであった。彼のふたりの男子はひとりは病死、ひとりは山崎のたたかいで死んで、すでに世になかったからである。

さて、太閤光秀が、淀君の口からはからずも本能寺の飛報にからまる秘密をきいたのは、梅雨にけぶる夜ふけの閨の中であった。

光秀は、淀君への愛がたかまればたかまるほど、彼の心にしみこんでゆく或る不安をふと口にした。

「そなたは、伯父御を殺したわしにこう抱かれてねて、くやしいとは思わぬか」

「くやしくはございません。信長はわたしの父を殺した敵でございますから。あの男は、父の生首を薄濃（はくだみ）にしてそれを肴に酒をのんだというではありませんか」

しかし淀君はけろりとしたあどけない顔であった。

「それでは、わしはそなたの父の敵をうったわけか」

「ですから、あの本能寺の焼けた夜、わたしは三条の茶屋四郎次郎の寮からみていて、心のなかでおどりくるっていました。そして、もうひとりの敵もほろびるように、あなたのいくさを手つだってあげたのです」

「もうひとりの敵とは？」

「浅井家をほろぼし、わたしの弟万福丸を串刺しにして殺した人で無し、羽柴筑前」

「それに……そなたは、何をしたのじゃ？」

「あの夜、茶屋の飛脚をかりにきて、備中の羽柴にいそいで知らせようとしたものがありました。それでわたしは中間の源八に追いかけて、その飛脚を殺し、毛利家の方へさきに知らせるようにいいつけたのです。源八爺やは、浅井家に忍びの者としてつかえた男でした。山崎で筑前がどうしてあのようにもろくまけたか、これでおわかりでしょう。せっかくわたしが手つだってあげたのに、あなたはみすみすあの男をにがしておしまいになりましたけれど……」

はじめて淀君はからかうような笑い声をあげて、白い指で光秀のひげをひっぱった。光秀は唖然として、ひげをひっぱられるのにまかせていたが、やがて背すじにぞうとするような寒けをおぼえたのである。

やがて、なんとなくつぶやいた。

「猿め、どこへにげたか？……きゃつ、いま生きておれば五十はとっくにこしているはず。しかし生きておって、何もしでかさぬ男ではない。いくどか草の根わけてさがしたがついにあらわれなんだところをみると、どこかの山中で野たれ死したか、どこかの野で土民に犬のように殺されでもしたか？……案ずるな、天はもはやあいつを殺しておるに相違ないわ」

五

六月十三日のことである。無数の黒雲が疾風のごとくながれ去り、日と翳の交錯するその夕、

下京姥柳にある南蛮寺のまえにたくさんの人間が環をつくっていた。

まんなかに立って、ひとりの伴天連が妙な日本語で小鳥みたいにしゃべりつづけていた。まだ恐ろしがって教会のなかに入ることをためらう人々のために、ここの伴天連オルガンチノが、街頭に出て呼びかけているのであった。それをとりかこんでげらげら笑ったり、黙禱したり、口まねをしたり、十字をきったりしている人々は種々雑多である。茶筅髪をむらさきの元結でむすんだ公卿、まないた烏帽子の京侍、放下師、山伏、蒔絵師など――そこへ、すこしはなれた輿からおろされたふたりの女が加わった。むしの垂衣をたれているので顔はわからない。しかし、輿のそばに数人の供のものが侍って、心配そうにこちらをながめているところをみると相当身分のたかい女にちがいなかった。

説教がひとまず終ったところで、

「伴天連（バテレン）さま」

と、女のひとりがむしの垂衣のかげから呼びかけた。オルガンチノは髯につつまれた顔をむけて、

「おお、ガラシャ」

と、笑顔になってあるいてきた。

急にざわめき出した。その名を知っていたものがあったらしい。

「あれが関白さまの御台さま」

「え、太閤さまの姫君」

そんなささやきがながれて、人々はあわててちりはじめた。

伽羅奢は伴天連に話をしていた。

「伴天連さま、きょうはひとり罪ふかい小羊をつれてまいりました」

「ほ、だれ？」

とオルガンチノはもうひとりの女の方をふりむいた。彼が虚飾をきらうので、関白御台の伽羅奢は、ほとんど供らしい供もつけないでやってくる。

しかしきょうはすこし様子がちがうので、オルガンチノはすこしけげんそうな顔をしていた。そのとき、地をおどってきた小さな影が、いきなり伽羅奢にとびついて、むしの垂衣をひきさいた。

伽羅奢は思わず悲鳴をあげた。

それは一匹の猿だったのである。もういちど歯をむいてとびかかろうとするところを、とっさに伽羅奢は胸の銀鎖をひきちぎって聖十字架で猿のひたいをはたと打った。

そう力をこめて打ったともみえないのに、猿はひっくりかえって、悶絶した。

「あっ、赤兵衛！　とんでもねえことを――」

と、あわてて猿をつかまえにはしってきた若い猿曳きは、茫然として伽羅奢の顔をみて立ちすくむ。

伽羅奢はふりむいていった。

「だれか、この男をひきたてていって下さい。いつ紐がきれたのか、いきなりこいつがとび出しやがったんで――」

「ちがいます。おまえがわたしに猿をけしかけたにきまっています。おまえはたおれた猿をみないで、わたしの顔ばかりみています」

供侍たちがはしってきた。

若者がさっと顔色をかえて、口をもがもがさせた。

そのうしろから、眼ばかりのぞかせた赤い放下師頭巾をかぶった猿曳きがはしってきた。

「佐吉、あやまれ、あやまるんだ、おまえは猿曳きのくせに、いつも猿より女の顔をみとれるくせがあるからこんなことになる。伴天連さま、いたい目をくらった猿に免じて、ゆるしてやって下さいまし」

と、老人らしい声でいって、土下座した。そのとき、もうひとりのむしの垂衣の女がしずかにすすみ出た。

「おまえたち――女の顔というより、関白さまの御台さまのお顔がみたかったのでしょう？」

「えっ、関白さまの――そんな、とんでもない」

「というより、明智光秀の娘の顔を」

老猿曳きは両腕を砂ぼこりのなかについたまま、頭巾のあいだの眼をあげたが、とっさに声もない。

「筑前、あいかわらずいたずらがすぎましょう」

老猿曳きはおどりあがった。女はみずから、むしの垂衣をとり去った。

なかから月輪のように冷たく美しい笑顔があらわれた。

「頭巾で頭をかくしても、その眼を忘れてなろうか。望みどおり、明智の娘の顔をみたら、その眼でついでにとくとわたしもみるがよい。太閤光秀の側妾淀のお茶々です」

いまにも前足を折りそうな駄馬にのって、老猿曳きが、大亀谷を伏見の方へ、とことこ駈けていった。

本人もいまにも落馬しそうな姿だ。

「佐吉め、どうしてしまったか？　ひょっとすると、六条磧あたりでもう斬られてしまったかもしれない。あれが伽羅奢ときいて、明智の娘のしゃっ面をのぞきたいというあいつのいたずらはちと過ぎた。しかし、それより、お茶々にはおどろいたな。美しくなった！　お市御寮人そっくりじゃ。あれをおのれの妾にするとは……」

羽柴筑前は夢みごこちにつぶやいた。

しかしからだは、ぼうきれみたいに痛めつけられていた。

雲間と梢からこぼれる月光が、どこやら死相を呈したその猿面を照らし出し、翳らせる。
あれから京都じゅう、おびただしい追手に追われて、ようやく百姓の馬をうばってにげてきたが、にげられたのがふしぎなくらいであった。——馬のくびにしがみつき、はあはあとあえいでゆく息もほそい。
じめじめとぬかるんだ路は小栗栖に入っている。
このあたり、土賊の多い土地だが、それを思いわずらう余裕もないらしく、みじめな姿が、まっくらな木下闇に入ってゆく。闇のなかで、夢遊病のうわごとのような声がきこえた。
「明智太閤！　明智太閤！　天運はあいつに——」
声が、ふいに断ちきられた。竹藪からつき出された一本の竹槍が、その脇腹をさしとおしていた。

六

——声にもならぬ苦鳴とともに、馬は竹槍と、身をおりまげた影をのせたまま、木下闇をかけぬけた。
水のようにひかる路上におちる血潮は、この夕刻よりの敗戦と逃避行に、身気ともに極限の絶望にのたうち、半死の脳膜に走馬燈のごとく明滅した夢想、幻想、妖想をも流していって、ついに音もなく地上にころがりおちた明智日向守光秀の死相を、月が蒼々と照らし出した。

叛心十六歳

一

五代五兵衛という名を、ほかの人はそれほど妙だとも思わないらしいが、民部之介はまだ十六歳だけれど、たしかに偽名だと見ぬいている。しかし、本名はむろん知らない。
江戸牛込の榎町に、表間口四十五間、奥行三十五間の軍学大道場をかまえる楠不伝の屋敷へ、一年に一回くらいのわりあいで、ふらりとやってくる浪人風の侍であった。
年は不伝とおなじく四十四、五であろうか。髪を総髪にして、胡瓜みたいに恐ろしく細長い顔だ。皮膚は透きとおるほど蒼白く、うすい赤い唇が、いつも皮肉に笑っている。というと、いかにも気味わるい感じがするが、奇妙に明るい眼が、そのぶきみさを救っている。
民部之介はこの五代五兵衛が気味わるく、そして好きであった。
なぜ気味がわるいかというと、顔ではなくて彼のしゃべる事柄だが。――
「由比民部之介とは、小わっぱのくせにばかにえらそうな名だが、なに、不伝につけてもらった？　うふん、不伝らしい、もったいぶった名前だな」

とか、
「民部、おまえはここに下僕として奉公していて、将来何になるつもりだ。ほう、天下に知られた大軍学者になると？　可哀そうだが、それはいまのうちに方針を変えた方がいいぞ。戦国乱世の時代とちがって、これからはもう軍学も剣術も無用のわざとなる。それどころか、人間いかに才能があっても、どんなに修行しても、持って生れた運命は鋳型にはめられたように、どうにもこうにもならん世の中になるのじゃよ」
とか、
「とはいうものの、げんに師匠の楠不伝がかくも盛大に軍学の道場をかまえ、門弟三千と呼号するほど繁昌しておるではないか、とおまえはいうかもしれん。ところがな、その教えておる兵学というのが、みなでたらめだ。うそっぱちのいんちきだ。なぜかというと、不伝の兵学はみなこのわしが案出したものだからな。発明者のわしがいうのだから、これ以上たしかなことはない」
とか、
「もっとも、そのいんちき軍学を、門弟三千、諸葛孔明のお告げでもきくようなばか面をして、うやうやしくきいているのだから、まあ或る程度にはゆくかもしれんがね」
とか。――
こんな言葉をきくたびに、十六歳の民部之介は怒りに頬を赤くしたり、恐ろしさに蒼ざめた

りしたが、しかしどうしてもしんからこの五代五兵衛という浪人を不愉快に思うことができなかった。

ひとつには、こんなことをいう五兵衛がいつもニコニコ笑っていて、つかみどころがないからであり、ひとつには、五兵衛がひどくじぶんを気に入っているらしいことがよくわかっているからであった。

もっとも、このへんな浪人が大いに目をかけてくれることは、いささかありがた迷惑でないこともない。——

いまもいったように、この五代五兵衛という男は、年にいちどくらい、どこからともなくぶらりとやって来て、ながくて一ト月、みじかくて数日、この道場の離れに泊ってゆくのだが、その滞在中の世話は民部之介の係りなのである。しかもそれを、五兵衛が師匠の不伝に指名したらしいのだ。どこを見込んでくれたのか、民部之介には見当がつかない。

見ていると、滞在中、五兵衛は何もしない。ただ柱にもたれかかり、江戸の空をゆく雲をながめ、ひげをぬいているだけである。

そういう五兵衛を、どんな関係があるのか、いかめしく荘重にかまえている師匠の楠不伝が、いやな顔をするどころか、いとも鄭重に待遇する。もっともいささか敬遠の気味があることはたしかで、とくに五兵衛が邸内を徘徊すると不安のようすをあらわす。あるときなど、大講堂で兵学の講義中、ふいに不伝の声がふるえ出したので、民部之介が怪しんでまわりを見ますと、

いつのまにかうしろに五兵衛が坐っていて、ニヤニヤしてひげをぬいていたことがある。ひょっとしたら——師の軍学は、みなわしの案出したもの、といった五兵衛の言葉はほんとであるまいか、と民部之介がかんがえたほどであった。

実際、うすきみのわるい、人をくったおひとだ。五代五兵衛、という名も、楠不伝をからかっている名前ではあるまいか。楠木よりも後醍醐の方がえらい。——しかし、民部之介はだれにもこのことをいったことはない。彼は怜悧な少年であった。

怜悧な民部之介だから、心中猛烈な反発をおぼえつつ、この食客先生の放言が、あれはほんとうのことではなかろうか、五代先生の言葉は案外真理ではあるまいか、とだんだん不安にとらえられて来た。

このメフィストフェレスに抵抗する盾となるのは、十六歳の民部之介にとって、いまは「同志」の砧だけであった。

二

同志——といっても、むこうがどう思っているのかわからない。民部之介の方で、志を同じうするひと、とかんがえているだけだ。

砧は、姓ではない。名だ。娘の名だ。民部之介より二つ年上の十八になる娘であった。

この十八の娘が、楠道場に、軍学をまなびにやってくる。

べつに大家の姫君ではない。それどころか、貧しい浪人の娘だ。いったいどういうつもりかというと、兄の代りである。道場の熱心な学生であった兄が労咳（結核）にかかって、いま自宅療養中なので、その代理として彼女が聴講にやってくるのであった。道場で学んだことを、家に帰ってその日のうちに兄に教えるのだという。——

それが、民部之介から見ると、兄よりも成績がよろしい。不伝先生の質問に対する答えも、いかにもツボにはまっているらしく、わが意を得たりという風に先生がピシャリと扇子でひざをたたくことがあるし、逆に砧の質疑に、先生の方が狼狽乃至困惑の反応をあらわすこともまれではない。——

この優秀な頭脳に加えて、たいへんな美人である。清純で、華麗で、優雅で、凛然としていて——ありとあらゆる形容詞をもって来てもみな適合する。それは大々名の姫君にふさわしい美貌であった。

貧しい浪人の娘だから、むろん粗末なきものを着ている。それでも年ごろの娘は、どんなに貧しくてもそれはそれなりに、切ない、いじらしい粧いをするものだが、砧は意地を張って、そんな粧いを拒否しているように見えた。それがいっそう彼女自身の持って生まれた美しさを浮きあがらせる結果となっているから、美人というものはとくなものである。砧はじぶんの貧しさをちっとも恥じず、毅然昂然として、同門の男たち——その中には大名の高禄の子弟や大身の旗本もまれではないのに、むしろ彼らを見下しているように見えた。そして、五代五兵衛

の評語によれば「ばか面をした」三千の門弟は、彼女とゆき逢うと、まるで襤褸をまとった楊貴妃でも仰ぐように、ことごとくウロウロし、ヘドモドし、キョトキョトしているように見えた。……

——と、十六歳の民部之介には見えたのである。

彼は砧を敬愛するというより、憧憬した。そして砧の方も、二歳年下の民部之介を、ほかのだれより買っているらしく見えた。

それは、ふたりの毎日の会話からも充分感得されることであった。厳格な道場内でそんな話をかわすことはゆるされない。講義が終って、門弟たちがぞろぞろと家路につく時刻、いつも民部之介は箒を持って門のあたりをさまよい、そして彼女を見つけると、用ありげにならんで、しばらく送ってやるのである。彼女の方でもそれを待受けて、ほかのむれとはやや時をずらせ、民部之介との路上のおしゃべりを何より愉しいものに思っているらしく思われた。——

年下の少年でもあり、貧しい浪人の娘に対して、これは道場の下僕である。砧もほかの人間に対するような意地を張る必要がなく、彼にむかってはほんとうにやさしかった。

榎坂から矢来下へ、或いは春の雨にぬれつつ、或いは夏の日ぐれ、或いはチラチラ雪のふる下を、しめやかに語り合ってゆくふたりの姿を、民部之介の方はともかく、砧の方は注目のまとであったから、それでも嫉いてそっとあとをつけてみた奴もあったが、この十八の娘と十六の少年の会話をきいて、みんな降参した顔をした。両人の話は、いつも、飽きることなく、軍

学に関する討論であったからだ。

　——しかし、その日、民部之介が砧に持出したのは、いつもとちがって人生についての疑義であった。つまり彼は、先日から道場に滞在している五代五兵衛という人物の例の放言が気にかかって、彼女の意見をきいたのである。

「砧さん、あるひとがね、もうこれからは軍法や武芸は無用のわざというんですが、ほんとうでしょうか」

「そんなことはありません」

　と、砧はきっぱりといった。

「武芸軍法を知らなくてなんの武士ですか。この世に武士というものがあるかぎり、軍学も武芸も絶対に存在価値があります」

「私もそう思うんです。でも、そのひとは、人間いかに才能があっても、どんなに修行しても、持って生れた運命は鋳型にはめられたように、どうにもこうにもならん世の中になる、戦国乱世の時代とはちがうというんです」

　砧の顔にちらと——苦悶にちかい不安の色がかすめた。が、すぐに彼女の眼は、巫女みたいに澄んでひかった。

「それなら、どうしてあんなにたくさんの方々が、楠道場におしかけていらっしゃるのですか。みなさま、それが役に立つ、立身の道につながると思えばこそおいでになるのではありません

か」

　論旨は明快である。民部之介は彼女に相談してよかったと思った。彼女はじぶんの人生観の盾として期待したことはまちがいなかったと思った。

　しかし、民部之介は、甘い、りりしい昂奮をおぼえながら、なおいってみた。

「でも、その道場にくる連中は……」

ことごとく馬鹿面をしている、とはさすがにいいかねて、

「いえ、その……不伝先生の軍学は、みなでたらめで、うそっぱちのいんちきだ……という説もあるんですが」

　すると、砧の顔にまたかすかな動揺がわたって、

「わたしも、ほんとうのところは、先生が……道場の床の間に、後醍醐天皇の御綸旨や、大塔宮の令旨や、伯耆安綱の菊水の太刀、などいうものをならべていらっしゃらない方がいいんじゃないかしら……とは思っているのですけれど」

　と、おずおずといった。が、すぐにまたきっとして、

「民部さん、そんなことをいうひとはいったいだれですか」

「それは——」

　と、民部之介は口ごもった。五代五兵衛という人間をとっさに説明しにくかったし、だいいち彼自身よくわからなかった。

「どなたか知りませんが、そんなことをいうひとは悪魔です。民部さん、そんな人をまどわすような言葉を決して本気にしてはいけませんよ」

美しい眼でにらまれて、民部之介は姉に叱られたようにがくがくとうなずいた。五代五兵衛などくそくらえ、と思った。

「由比の紺屋さんの息子さんだったあなたを江戸につれて来て、この道場で修行するようにして下さったのは、不伝先生ではありませんか」

その通りだ。もっともそのあいだにはもう一つの段階がある。

民部之介はたしかに由比の小さな紺屋の伜であったが、その抜群の利発さを買われて、興津の清見寺の小僧とされた。そこにたまたま廻国中の楠不伝がやって来て、一目で彼に惚れこんで、江戸へつれて来たのだ。いまは下僕だが、同輩とはちがう眼で師匠がじぶんを見ていることは、民部之介にもわかっている。

「それもあなたがひとなみすぐれた器量を持っているからですよ。わたしにはわかります。あなたは将来、うんとえらくなるひとです。ひょっとすると……お大名にさえも」

砧はいたずらっぽく微笑した。

「わたし、あなたより二つ年下だとよかった……」

民部之介がもう少し年がいっていたら、彼女の笑いを、なまめかしい、とさえ受けとったかもしれない。しかし彼はウットリとなり、突然胸にふくれあがってきた夢に昂奮して口もきけず、笑いながらただ眼に涙をにじませた。

「ですから、あなたはじぶんを大切にしなければいけません。へんな大人の言葉にまどわされないで、一生懸命修行して下さい。そのうち、きっと、必ず酬いられることを、わたしは信じています……」

「あなたは？」

民部之介はさけんだ。

「砧さん、あなたは？」

「わたしは」

砧はさびしげに微笑んだ。

「わたしも男に生れたかった。……でも、いいんです。兄の病気がなおって、世の中へ出てくれさえしたら。……いいえ、わたしはいまでも充分満足しているわ。毎日毎日が、ほんとに愉しい。講義も面白いし、こうして民部さんとおしゃべりするのもうれしいし。……」

一瞬のさびしさは消え、砧の顔には純粋な献身と自足のよろこびが春の光みたいにかがやいた。

少年民部之介はふと砧の兄に嫉妬をおぼえ、たちまち恥じて頬をあかくした。それから彼女の帰ってゆく山崎町の貧しい浪宅を思った。そこでは労咳の息子の薬代と軍学道場通いの娘の束脩のために、年老いた父と母が死物狂いに傘を張っているのであった。

民部之介はたまらなくなり、涙を頬にひきながら砧を見つめていった。
「砧さん。……私はきっとえらくなって、大きくなったら砧さんを迎えにくるよ」
数日たって五代五兵衛がいった。
「民部よ、そろそろおまえの青雲の夢をかなえてやろう」
「青雲の夢？」
「左様さ、おまえこのごろ道場にくる松平長四郎という旗本を知っておろうが」
「ああ、御小姓組の。――」
「その松平長四郎が、親戚の若者だといっていっしょにつれてくる松平長十郎という少年がいるだろう。そうだな、おまえより一つくらい年上になるか。あれの正体はな」
「――は？」
「ほんとうは御三代さまだ」
「――えっ」
「御三代になるべき人だ。すなわち、あれでも正三位権大納言徳川家光卿――」
民部之介は口もきけず、ただ眼をはりさけるほど見ひらいて、まじまじと五兵衛を見まもった。
「あの長四郎という旗本、若いがなかなかの奴だ。将軍家の若君を巷の軍学道場へつれ出して

来たのは、軍学もさせることながら、いまのうちに江戸の市中のありさまを見物させて勉強させたいという――長四郎の思慮によるものだと思われる。民部之介、あれにちかづけ」
「――家光さまに！」
「これ、大きな声でいうな。不伝こそ知ってはおるが、むこうは身分をかくしておるのだ。そしらぬ顔をしてちかづくのだぞ。いや、それはわしがうまくとりはからってやるが、うまくゆけば、おまえが夢みる立身のいとぐちとなる」
あまり思いがけないことに、ただ胸をワクワクさせている民部之介に、へんな浪人の五代五兵衛は、胡瓜みたいな顔に例のニヤニヤとした笑いをたたえていった。
「ついでに、将来将軍となる少年がどんな人物か、よく観察するがいい」

三

民部之介が慶長十年、あちらが慶長九年の生れだから、たしかに一つ年上ということになる。つまりこの元和六年に、徳川家光は十七歳。
むろん、民部之介は、はじめて将軍の相続者を見た。いや、この一ト月あまり、ちらちらと見て、少々変った御門弟だなとは感じていたのだが、まさかそうとは思わなかった。
変っていると感じたのは、そういえば彼がこの道場で、何といっても別格の待遇を受けていたからだ。彼とその親戚と称する松平長四郎だけは、たいてい別室に招かれて、楠不伝の特別

講義を受けることが多い。が、多いというだけで、ときには大講堂のうしろの方で、一般の門人にまじってひっそりと坐っていることもある。しかし、いま思い出すと、その一般の門人たちはお目見以下の御家人とか浪人ばかりのクラスであったようだ。

それにまじっていても、その少年はべつに光彩を放つというわけではない。犯しがたい気品があたりをはらうということはない。むしろだれより目立たず、影うすい存在として、だれの注意もひかない人間であった。

体格もどちらかといえば小柄だ。民部之介も小柄な方だが、これは智慧と野心がピチピチと音たててあふれているといった感じなのに、家光の方は、どこか発育不良といった感じがあった。顔色も冴えない。眼にもひかりがない。だから、それまで民部之介もそれほど関心をもたなかったのだ。せいぜい大身の旗本か、小大名の子弟であろう――と思っていた。それくらいの地位の者なら、この楠道場の門弟のうちには珍しくない。

――しかし、外観はともかく、あれが次代の将軍家であろうとは！

民部之介は、家光とならんで、師匠の特別講義を受けることになった。不伝の方で、民部之介と家光と松平長四郎に、

「この者、年少ではござりまするが、三千の門弟中でもずぬけての優秀児と、かねて眼をかけておる者でござりますれば、何かとお役に立つことと存じまする」

と、紹介したのである。

民部之介は師匠から相手の正体をうちあけられず、ただ御身分の方だといわれただけだ。彼はこんどのことの背後には、五代五兵衛の意志が働いていると感じた。そして、「そしらぬ顔をしてちかづくのだぞ。うまくゆけば、おまえが夢みる立身のいとぐちとなる。――」という声を思い出した。

「ど、ど、ど――」

と家光はいった。不透明な声の上に、彼はどもりらしかった。

「よろしくたのむ」

と、松平長四郎はうなずいた。これは二十四、五歳の、眉目清秀、いかにも颯爽とした青年であった。そういって、じいっと民部之介を見入った眼で、じぶんが彼らの素姓を知っているということを彼もまた看破しているということを民部之介は直感した。

さて、楠不伝の軍学特別講義を受ける。

民部之介は、将軍相続者の頭のわるいのにおどろいた。

不伝は楠木正成十三代目の後裔だということである。ちゃんと系図もある。また正成伝と称する数巻の兵書をテキストとした講義は、五代五兵衛にいわせればまったくのでたらめのうそっぱちのいんちきだということだが、しかし民部之介からみれば、実に条里整然、巧緻巧妙、哲理深遠と思われるものであった。げんに民部之介だけではなく、おつきの松平長四郎もいちいちうなずいて聴講しているようであった。

それが、将軍家おん曹司にはさっぱりわからない——らしいのだ。
「長十郎どの」
と、不伝はわざと変名で呼んで、
「もし御納得なされぬことがあって、この不伝にも長四郎どのにもおききになりがたいことがあれば、あとでそこな民部に、御得心あるまでおきき下されよ」
というのだが、いったい何をきいていいのか、それすらもわからないようすであった。
——これが御三代さまにおなりなされるのか？
十六歳の民部之介は、正直なところこの一つ年上の少年の頭脳に軽蔑を禁じ得なかった。
——これで将軍さまになれるのか。将軍とはこんなものでいいのか？
が、よくよくみれば、なるほどおん曹司らしいところがないでもない。本人も知能的には劣等感があるらしく、いらいらしているようだ。
「……おわかりにならぬところはありませんか？」
などと民部之介が小声できくと、むっとふきげんな顔をしてそっぽをむく。唇をへの字にむすんで、いかにもえらそうな顔をするのが特徴的であった。
これでも、ひとにばかにされるのは不愉快らしい。——もっともこれはだれだってあたりまえのことだが、ひとなみ以上のかんしゃくもちで、激怒しているらしい。ただ、よほど長四郎にいいふくめられているとみえて、その怒りを必死にへの字の唇で封じこんでいるようだ。

「……何ごとも御勉強でござりまするぞ」
長四郎がそうささやいているのをきいたこともある。
「人間いかに才能があっても、どんなに修行しても、持って生れた運命は鋳型にはめられたように、どうにもこうにもならん世の中」という五兵衛の言葉が、しばしば民部之介のあたまに明滅した。それはつまり「人間いかに才能がなくても、どんなに修行しなくても、持って生まれた運命は、どうにでもその人間をおしあげて、栄光の鋳型にはめてしまう」ということと同意義だ。また、「うまくゆけば、おまえの夢みる立身のいとぐちとなる」という五兵衛の言葉も浮動した。
ふたつの言葉が民部之介の脳裡を交錯し、怜悧なこの少年はしかしそんな思いを白い面にも見せず、さりげなくじぶんに命じられた役割を演じ切っていた。
しかし——十六歳である。やはりこの演技は、ときに投出したくなるくらいばかばかしく、そしてときには苦しくてへどをつきたくなることがあった。
民部之介は砂漠に渇する者がオアシスを夢みるように砧を恋うた。
——ああ、砧さんと話したい。
しかし、夏に入ってからここ二タ月ばかり、彼は砧と逢ってはいなかった。「兄の病気がわるくなった」といって、彼女はここのところ道場通いを休んでいたからだ。そしてこんどのこと以来、民部之介は師匠から外出を禁じられていた。

——ああ、砧さんに逢いたい。

すると、夏の或る日、講義が終ってから、松平長四郎が民部之介を呼んでいった。

「民部、これからわしたちといっしょに市中に出てくれぬか」

「……市中のどこへ？」

「さて、そのことについて、不伝先生と相談したのだが——浪人の町があるであろう。いま巷の浪人どもがいかな暮しをたてておるか、それを後学のため見ておかれてはいかが、ということであった。もっともであると思う。おまえ、浪人の町を知っておるそうな。そこへ案内してくれ」

躊躇なく、民部之介は山崎町をえらんだ。

四

下谷山崎町。——いまの台東区万年町界隈。

慶長から、のちに由比正雪が叛乱を企んだ慶安四年までのあいだの約五十年間に、幕府のとりつぶした大名は百九十三家、領地をけずられたものが二十家、このため約四十万人の浪人が巷にほうり出されたといわれる。これはその正雪が十六歳のときの物語だが、しかし幕府の「合理化」方針は着々継続中で、このころも二、三十万の失業武士が巷にうごめいていたという事実にまちがいはなかろう。

江戸に於けるその集落のひとつが山崎町にあった。

ペンペン草の生いしげった板屋根、かたむいた柱、崩れた壁、それから形成される小屋同然の家々が無数によりかかって、そのあいだに細い迷路をうねらせている。何かものをたたく音、夫婦喧嘩の声、子供のみならず大供の泣きわめく声、犬の声、下司な魚を焼く匂い、大小便の匂い。——それに、夏のことで、みんな戸障子をはずして、裸同然で内職したり寝そべったりしている光景が見える。

傘張り、提灯張り、凧張り、竹細工、藁細工、鳥飼い、虫飼い。——それらを、いまお忍びの将軍家おん曹司が見廻ってゆく。

——あまりロマンチックではない「江戸の休日」

民部之介は山崎町に彼をつれて来たことを後悔した。いや、きょうじぶんがここへ来たことを後悔した。案内したくらいだから知らない町ではないが、こういう貴公子の参観用に訪れてみると、夏の夕ぐれのことでもあり、そのむさ苦しさがむっと胸をついて、いっそうやりきれない思いになる。

あらためて、ここからあの砧が兵書をかかえて出てくるのが、けなげといおうか、悲壮といおうか、この世の奇蹟のように思われた。……あのひとはどうしているだろう？

むろん民部之介は砧の家に家光などをつれてゆこうとは思っていない。そんな恥辱を彼女にあたえるなど、とんでもないことである。ただ彼は砧に逢いたくて、きょうの機会を利用しよ

うと思い立っただけだ。砧に逢う——民部之介は、よそながら一目、彼女のようすをかいま見て、そっと立去ればそれで満足だというきもちでいた。

　そのためには、数分間でも家光から離れなければならない。彼はそこらで主従をまくつもりでいた。すぐもどってくれば、いいわけは何とでもたつだろう。

　この浪人街の風物を見て、しかし家光にはなんの反応もなかった。

はじめて目撃する底辺の庶民の生活だから、好奇に眼をかがやかすだろうと思っていたが、眼はドンヨリとした夏の夕空同然である。同情とか憐愍の気配など、全然ない。ただ彼は、じぶんとはまったく異質の動物を——犬か猫かの小屋を見て廻るような顔をしていた。

「む、む、むさいものよの」

　ときどき、この単語だけをくりかえして、顔をしかめただけである。

　それには民部之介も異論はないが、しかしこの貴公子の情味のなさには、だんだんと不愉快になってくるのをどうすることもできなかった。しまいには怒りのあまり、息をするのも苦しいほどになった。

　だいたい牛込の榎坂を出たときから、家光もふきげんであった。その日の講義がとくに難解でいよいよ劣等感を刺戟されたせいかもしれない。おつきの松平長四郎がすすめるきょうの見学があまり心のはずむ行事でなかったせいかもしれない。或いは窒息しそうなむし暑い夏の夕の不快指数のせいであったかもしれない。

ところどころ、へんな女がたっていて、若い女もいたが、中年女、老婆もいた。それがほとんどまるはだかにちかい姿で、

「あ、こいつはお珍しい、一人前のお武家が通る」

と、彼らを見て眼をひからせ、怪奇な笑いをうかべて、

「おいでよ、お侍、ねっ」

と、からだをくねらせながら、狐みたいな手つきをする。

「あ、あれは何じゃ」

と、家光はこれだけには好奇心を発揮したようだ。松平長四郎は答えた。

「きちがい女でござりまする」

「ほう、きちがいか。……こ、こ、この町には、狂女がたんとおるの」

　そういいながらも、なんどもうしろをふりかえる眼がふつうではない。

　——この馬鹿、妙な方面だけに発達している。

と、民部之介はいよいよ苦々しくなった。

　そのうちに、思いがけぬ異変が勃発した。

　この浪人街の中に、茶店ともつかない家が一軒あった。はだかの男や女が、そこで何やら飲んだり食ったりしているのが見えた。

「長四郎、の、のどがかわいた」

と、家光がいった。

松平長四郎はややためらったあと、その店に入った、「婆、茶をくれ」と、命じた。この界隈では異彩を放つ一行だから、老婆はちょっと眼をまるくしたが、やがて盆に茶碗をのせて来た。

家光は、がぶっと一口のんで、

「熱っ」

と、さけんで、反射的にその茶碗を老婆に投げつけた。

悲鳴をあげて、老婆は顔を覆い、周りの者が総立ちになった。はだかの男たちは、だまってこの風采のひときわすぐれた二人の武士をながめている。何やら危険なものを感じて、松平長四郎が、

「長十郎どの、表へ」

と、手で押しやったとき、家光の方もただならぬ雰囲気につつまれて動揺していたものか、逆上したような眼つきになっていて、

「うぬは、わ、笑いおったな」

と、そばのひとりの男を指さした。

「歯を見せて、よ、よ、余を、チョ、嘲弄しおったな」

「じょ、じょうだんじゃねえ。おれあ出ッ歯で――」

と、男も狼狽してどもって、口をおさえたとき、家光はいきなり狂ったように抜討ちに、その男に斬りつけた。血しぶきが立った。

さすがに次代将軍だ。恐怖感に襲われるとともに、こんなかたちで反応があらわれたのである。

わあっと巻起った混乱の中に、松平長四郎は凄まじい顔色で家光をかばって立ち、

「ひかえろ、われらは直参お小姓組の者だ。責任はわしがとる。しずかにいたせ！」

と、叱咤し、眼をまるくしていた民部之介をふりかえった。

「自身番はどこにある？　民部、町役人を呼んで来い！」

民部は鉄砲玉のようにとび出した。

しかし、二、三十歩駈け出してから、あのばか息子くそでもくらえ、と思いなおした。砧のところへゆくのはいまだ。

砧の家はどっちだったっけ？

立ちどまり、民部があたりを見まわしたとき、いままでぬるい湯の底のように淀んでいた浪人街に、ふいに風が起ったような物音がした。

背後にきこえる叫喚とはちがう。といって、肌に風は感じないのに、むこうの路地から一張の傘が、カラカラと地をころがってくるのが見えた。

「――や？」

なんとなく怪異の気にうたれて立ちすくんだ民部之介に、どうっとまた風音がきこえ、うす暗い煙みたいな一陣の風とともにその傘が吹きつけてくると、民部之介はふっと意識を失った。

五

――どうして家光がこんなところにいるのか。

自身番との話はついたのか。それにしても、どうして彼らがここに――砧の家にいるのか。

松平長四郎は、病みさらばえた労咳の青年の枕頭に坐って、何やら訴える年老いたその父と母の声に、ときどきしずかにうなずいていた。そして破れた襖一枚をへだてて、こちらの座敷には家光と砧がいた。ふたつの座敷には、張りかけた傘や、紙や竹や糊などの内職道具が散乱していた。

それを民部之介は上から見下ろしているのだ。俯瞰しているとはいえ、破れ襖とはいえ、どうしてその双方がこんなにはっきり見えるのか。

――そも、じぶんはどこにいるのか、それがわからない。

ここでじぶんが見ているのに、なぜ下の人間たちは気がつかないのか。それもよくわからない。

声をたてようとしたが、舌が動かなかった。

おれは夢を見ているのではないか、そう思ったが、たしかに夢ではなかった。

だれかが、じぶんの背中に覆いかぶさっている、ということも意識していたが、それがだれかもわからなかった。ふりむこうにも、全身の骨が棒みたいになり、全身の肉が板みたいになった感じなのだ。

「砧。……」

と、家光がいっていた。

「かかる陋屋(ろうおく)の奥――かかるいぶせき住いに、おまえのような美しい娘が住んでいようとは――余は夢のような気がするぞ」

彼はどもっていなかった。

「城から迎えの者がくるまでここで待つようにと町役人が申したが、あの役人にはあとで褒美をとらそう」

「お城。――」

と、うなだれていた砧が顔をあげた。

「その顔じゃ。城に三千の女はおるが、おまえほど美しい女はひとりもいない」

「あ、あなたさまは」

と、砧の方がどもった。

「どなたさまでいらっしゃいますか」

「余は徳川家光である」

と、家光はそりかえった。砧の眼がひろがり、家光の顔にとまったまま、うごかなくなった。

家光はちらと襖の方を見て、声をひそめた。

「砧。……城へ来ぬか。いや、ここに参れ。――」

彼は手をのばして、砧の手をひいた。民部之介は息をのんだ。砧はじっと瞳孔を散大させたまま、無抵抗にひき寄せられてゆく。

「おう、愛い奴。……砧、忘れるな、きょうこそはおまえの栄耀栄華の夢のかなえられるいとぐちとなる日であるぞ」

けけけけけ、と将軍家おん曹司は笑った。

その愚かしい笑顔を、依然として穴のあくほど凝視したままの砧の眼がしだいにひかりはじめ、たちまち夢みるようにうるんで来た。白いあごをあげたまま、なかばひらいた唇が、かすかににっと微笑んだ。彼女の貧しい衣服をまとったからだからは、ぼうっと月の暈に似たひかりさえ発し出した。

それは民部之介がいままでに見たこともない、美しい、なまめかしい、妖艶きわまる砧の姿であった。

「――砧！」

民部之介ののどをはじめて絶叫が破った。

そのとき、下の松平長四郎がはっとしたようにふり仰いだ。傍の刀をひっつかむと、片腕が

振られ、何やら銀の光が投げあげられた。

「――ばかめ！」

と、民部之介の耳もとで声がきこえた。

「黙っておれば、まだ面白いものが見物できたに」

五代五兵衛の声であった。同時に、ふたりのからだが水に浮いたように横にすうとながれ出した。

このとき、座敷にいた松平長四郎は、天井にひらいたまま下げてあったいくつかの傘のうちの一つが、まるでそれ自身いのちあるもののように離れ、漂って、座敷から破れ障子のあけはなたれた庭へ、キリキリと廻りつつながれ出したのを見て、息をのんだ。これも仰天して立ちあがった家光のひたいに、その傘からおちた一滴の血が散った。

民部之介は傘の上に腹ばったまま、なかば喪神していた。傘はもうひとり五代五兵衛を乗せて、雲とも霧ともつかぬうす暗い風の中を飛んでいた。

「……と、まあ、いうわけだ」

と、五兵衛は笑いながら、ふとももにつき刺さった小柄をぬきとった。民部之介はわななきながらききいた。

「あ、あなたはいったい――」

「わしは関ケ原で敗れた小西摂津守の遺臣でな、森宗意軒という男だ。ちょいと忍法を心得ておる」

「忍法。——」

「なに、大したわざではない。それより、民部、よく見たか。……女には、あの手がある。まあ、あんなものだな」

森宗意軒のニヤニヤした唇が、赤い鎌みたいにきゅっとひろがると、民部之介の耳に、うす暗い風とともに声がからまりついた。

「男には、あの手はない。しかし、おまえは別だ。おまえには、おれが見込んでおる或る素質がある。おまえの夢みる立身をまことのものとする或る力がな。……ただ、おぼえておけ、家光よりもあの松平長四郎信綱という男の方が、おまえにとって真の敵であるぞ」

雲はながれ、雲は飛び、雲は渦まいた。

「十六歳の由比民部之介、しばしば心を悩ませてすまなんだな。江戸へ帰れば、楠不伝の養子としてやるが、そのまえにしばらくおれが面白い魔天へつれていって、遊ばせてやろう」

江戸にいる私

一

事は、歳末の或る夜、藪井(やぶい)庄一氏が新宿の裏通りの或る古道具屋で、一個のチョンマゲのかつらを見出したことに発するらしい。

五十ちかくになるとともに、めっきりお酒に弱くなって、少し過ぎると悪酔いし、はては逆行性健忘症になる癖の出て来た藪井氏だが、そのときはまだそこまでゆかず、充分意識はあり、しかも、ついそこのバーのなじみのホステス加代とキスして別れたところで甚だ上機嫌であったから、ただ浮かれてそれを買う気になったのである。もっとも、だいぶほんものの毛も薄くなってはいた。

侍のチョンマゲだが、チンドン屋のかぶるような偽物ではない、どこかの映画の撮影所から出て来たものではあるまいか、と思われるような、薄汚ないが、本格的なかつらだった。

まったくの冗談の買い物だが、あとになって考えると、変な徴候があった。

家近くになって、彼がそれをためしにかぶって帰って来ると、門燈の下に外套を着た一人の

男が立っていて、彼の跫音(あしおと)にふり返り、じっと眺めた。

藪井氏はあわててそれをとった。もっとも、そこらあたりで脱ぐつもりでもあった。男はさすがにぎょっとしたようだった。鼻のわきに大きなほくろのある見知らぬ馬面であったので挨拶のしようもなく、彼はそのまま門を入っていったが、玄関の前でふり返ると、男の姿は幻のように消えていた。

どうもただの通行人ではなかったように思い、彼は改めて門のところへ戻って往来を見たが人影はない。藪井氏は念入りに門にかけた鍵をたしかめてから、かつらをオーバーにかくして家に入っていった。

「暮だから、用心しなくちゃいけない」

迎えに出た細君の伸子に彼はいったが、かつらはまだ秘密にしておくつもりであったので、ついでに今の男のことも口にしなかった――。

藪井氏はかつらを正月までひそかにしまっておいた。

さて、正月が来た。

細君の伸子は日本髪を結(ゆ)った。――いや、むろんこれもかつらである。実はこの細君のかつらが、藪井氏がほろ酔い機嫌でかつらを買う遠因であったのだ。

伸子は、日本髪のかつらをかぶるのはそれがはじめてだった。

暮近くになって、彼女からその希望を打ち明けられたとき、藪井氏は細君の気がどうかしたのではないかと、数十秒まじまじとその顔を見つめたくらいだ。

「ね、お正月だからいいでしょ」

と、伸子は娘みたいにからだをくねらせた。

「だって、おまえは……四十三じゃないか」

伸子の顔つきが変った。

「四十三ってことは、あなたにいわれなくてもわかってるわよ。四十三になったら日本髪のかつらをかぶっちゃいけないってわけがあるの？」

「いや、そんなわけではないが……あまり突飛だからさ」

「あたし、一生、いっぺん日本髪に結ってみたいと思ってたのよ。でも、娘のころは戦争が終ったあとでとてもそれどころじゃなかったでしょ？　それからあなたのところへ来てまたそれどころじゃなかったでしょ？」

声が恨みの尾をひいた。藪井氏はいよいよあわてた。

「それはあたしの娘のころからの夢だったのよ。……だから、ことしあたりはもういいだろうと思って、やっとのことでいい出したのに。……」

彼女は涙声になった。

「お向いの堀田さんの奥さんなんか、あたしより三カ月年上なのに、もうずっと前からお正月、

日本髪にしていらっしゃるわよ！」

「な、何もそんなことで泣くことはないだろう、四十……」

藪井氏はあわてて口を押えた。

つまり彼がかつらなど買って来たのは、それで笑わせて、この問題についての彼女のしこりを解いてやろうという殊勝な心理からであったのだ。

ところで藪井氏は、細君の日本髪のかつらについてこんなやりとりはしたものの、本人は正月には紋付袴を着ることにしていた。ことしだけではなく、以前からのことだ。世の中に出て冠婚葬祭用の衣服を用意しなければならなくなったとき、モーニングなど作らないで、ためらいなく紋付袴を誂えたのだ。

べつに特に彼が日本趣味のせいではない。藪井氏は、特にこのごろの日本人の植民地的風俗については生理的な嫌悪をおぼえているけれど、古来の日本趣味にしたってべつに尊敬しているわけではない。それなのに紋付袴を作ったのは、残念ながら日本人は、どうしたってモーニングなどより紋付袴のほうが似合うと信じているからにほかならない。ただ日常生活では和服は活動にさしつかえるから――かくて現代において自国独特の衣裳で世界を歩けないのは日本人だけという怪現象を作り出したほどの、こんな着物なるものを着て何千年も済ませて来た日本人の神経には驚かざるを得ないのだが――とにかくふだんは、セーター、ジャンパーのたぐいを着ているだけのことで、そんなに活動する必要のない儀礼のときには紋付袴でもよかろう、

そのほうがよかろうと思って誂え、さればとて右の次第でふだんめったに着ることもないので、せめて正月にはこれを着て、いささかでも正月らしい気分になろうと思っての紋付であった。

で、彼はこれだけ曰くいんねんのあるこの姿で、元日の朝、まず奥へいって長い間中気で床についている老父に新年の挨拶をのべ、やがて祝膳についた。そのとき彼は、かくしておいた例のチョンマゲのかつらをかぶった――。

――まあ、どうしたの。おっほっほっほっほっ！

――こりゃ可笑しい、あっはっはっはっ！

彼は、むろん仲子と息子の庄助のこういう笑い声を期待していたのである。

ところがそういうわけにはゆかなかった。

細君のほうはニコリともせず、「どこでそんなものを手にいれたの？」と聞きただし、さてそれまでは日本髪のかつらの下の顔は、そこばくの滑稽感はあるものの、正直なところ、四十を越えた女とは見えないほど晴れ晴れとしていたのに、その顔がひきつって、

「それ、あたしへのイヤガラセなの？」

と、いい、さらに、

「どうせ、あたしのかつらも可笑しいわよ。どうせあたしは四十三……」

と、また涙声になった。

息子の私立大学生の庄助にいたっては、

「フザケルんじゃあねえや！」

と、いって、長髪をゆさぶって、そっぽを向いた。――

藪井氏は、にがり切って、黙って酒を飲んだ。お屠蘇ではない。藪井家ではいくら正月でもあんな薬くさい変な味のものを飲むのは迷信の一種だという藪井氏の意見で、ほんものの酒を飲むことにしている。もっとも、それにしても朝からガブガブ飲むわけではなく、お祝いのしるしにこのときはほんの口をしめすだけだが――しかし、今、藪井氏は激怒にふくれあがった顔で、黙って、たてつづけに徳利を傾けた。はては、雑煮のための椀についで、ぐいぐいとあおった。

紋付を着て、ふくれあがった頭にチョンマゲののっている可笑しさを、このユーモアを解しない細君と息子だけでなく、彼自身意識しないようになっていた。

藪井氏は、それ以前から実は立腹していたのだ。

まず息子の庄助だが、元旦の、それも朝というよりひる近い時刻だというのに、大みそかからけさにかけて紅白歌合戦やら深夜映画やらテレビを見呆けていた結果、いつまでたっても起きて来ない。そこで藪井氏がたたき起したわけだが、それでやっと、「正月早々ウルセエおやじだな！」とぶつくさいいながら出て来て、まだ仏頂面をしている。

細君の仲子は、さっき老父の部屋から出て来て、「……病人があると、とてもお正月みたいじゃないわねエ！」と、つぶやいた。――

——これがおれの女房と倅か！

藪井氏は、お椀酒をひと息に飲んだ。二人は、あっけにとられて眺めている。

やっと二人は、藪井氏のようすがただならぬものであることに気づいたのである。元旦どころか、こんな飲みかたをするのを見たのははじめてだ。

藪井氏は急速に酔っぱらっていた。あまり酔いが激烈過ぎて、かんじんの怒りさえ消し飛んでしまい、脳髄は渦状星雲みたいな状態になった。

「ああ、人間、な、長生きはしたくないもんだ。……しょ、正月なんか、めでたくなんぞあるものか！　奥で、正月も寝てるおやじを見ろ。……こ、この家は、あのおやじが戦後苦労して建てたもんだ。おかげで、な、何百万人か何千万人か、家が欲しいとあがきぬいている今の世に、お、おれたちゃ家の点じゃまず安楽に暮して来れたんだ。……しかし、人間は、そ、存在するものはあたりまえだと思って、ありがたがらん。に、人間の空想力は、ないものを欲しいと思うほうだけに働いて、あるものが若しなかったらと考える空想力は、き、奇妙なほど弱い、……それが働くのは、家に年寄がいる場合だけだ。……しかも、お、愚かにして得手勝手な人間は、自分にもいつかその日が来るという空想力はこれまた働かんのだ。が、そ、それは、昨日があって今日があって、必ず明日が来るように、ぜ、絶対に来るんだ。……」

彼はこんなことをしゃべっていた。

むろん説教のつもりでしゃべり出したのだが、混沌として熱い頭の中には、相手よりもただ

悲哀の思いだけが渦巻いて、それが流れ出している気味があった。

「おれも、そのうちにああなる。お、おればかりじゃなく、おまえたちだって、いつかあんなときが来る。……一生、いろ、いろいろ勇戦力闘したあげく、せ、生物学的に老いさらばえると、自分が作り出した家族から、不必要な、不愉快な、き、汚ならしい邪魔者として扱われる。……ああ、人間は、どうして赤ん坊から、と、年寄へ変ってゆくのだろう……。どうして、はじめ木が生えるように老人として地上に現われて、だ、だんだん若く、そして最後は赤ん坊になって母の胎内へ消えるというコースをとらないんだろう？　……そ、それだったら、じ、人生はどれほど希望に満ちたものになるだろう！」

決して泣上戸ではなかったのに、藪井氏はハラハラと落涙した。

時間の逆流という突飛な観念から、その脳髄には、あえぐほどの懐しさで、若かったときの自分や細君、そして父親たる自分の動作の真似ばかりしていた幼い庄助の姿が明滅した。

あの日は、どこに消えちまったのだ？　それから、別に何の異変もないのに、どうして今のわが家のごとき家庭に変ってしまったのだ？

時間はあらゆるものを乗せて、無限の過去へ運び去ってゆく。それなら、ああ、その時間の船に乗って、もういちど昔へ帰りたい。……——

「お、おれも、昔のほうがよかった。……いや、世の中も、明治のほうが……な、何かといえば、明治はよかった、なんていう連中は大きらいだったが、いっそ江戸時代のほうがみんな倖

せだったかも知れん。え、江戸趣味も好きじゃないが……とにかく、あのころは、ち、秩序はあったろうからな。なぜ、む、昔はおやじに権威があったか。……」

　藪井氏の脳作用では一応の脈絡があるつもりなのだが、聞いているほうでは支離滅裂だろう。とにかく呂律はまわらないが、元旦早々の大演説とはなった。

「な、なぜ、今のおやじは、け、権威を失ったか。……そ、そこに至るにはいろいろとわけがあるが、お、おれの考えるところでは、だ。その理由のいちばん大きなものは、こ、子はおやじの道とちがう道を歩くということを、子も親も知っているからだ。……だから、子から見ればおやじは参考にならんし、お、おやじもそれを知っているから、自分を見ならえという自信がない。……そ、そういう社会が幸福か不幸か。……愚かなる人間の一生という見地に立てばだ。……え、江戸時代みたいに一家ではおやじが典型であり、社会的には整然とした、ち、秩序がある。こ、このほうが……それぞれの心々によりどころがあって、安定性があって、よっぽど、み、みんな倖せだったかも知れん。……」

　あっけにとられて聞いていた庄助は、ここらでたいくつして来たらしい。説教じゃないようだ、と安心したのかも知れない。とにかく右の演説を、おやじが上半身波のようにぐらぐらさせながら、涙と涎だらけになってわめいているのだから、軽蔑と嫌悪に襲われたとしてもむりはない。

　庄助は、雑煮も食わず、ぷいと立ちあがって、出かけてゆこうとした。

「ど、どこへゆくんだ」

「用があるんだよ」

「が、元日の朝から、出かけてゆくやつがあるもんか。す、坐って、もう少し、お、おれの意見を聞け」

「そんなわけのわからねえテープの逆廻しみたいなものを聞いてたってしようがねえよ」

　そのまま、出ていった息子のうしろ姿を、藪井氏はキョトンと見送っていたが、たちまちどたばたとあとを追っかけた。

「あんた、よしなさいよ。ほうっときなさいよ」

　細君の金切声をあとに。——

「待てえ」

と、藪井氏は外へ飛び出した。

　往来には、いま出ていった庄助の影もかたちもない。ただ両側の家の門松がずらっと並んでいるだけだ。

　それにしても、この門松は壮観だ。どこのうちも気張ったものだ、いくらＧＮＰが世界第三位だって。——と見わたして、その家々がどうもふだんの光景とちがっているのに気がついた。

　ここは昔いちめんの畑で、だから藪井氏の老父がその一画を何とか手に入れ、藪井氏の若いころは——いや、ほんの数年前までまだ畑だらけであったのだが、今はおきまり通りマッチ箱

みたいな安手のプレハブ住宅がぎっしりならんでいる――はずだ。

それが、どうも、ようすがちがうのだ。なんだか、芝居か絵で見た江戸時代の町並みみたいな。――

「……こりゃなんだ?」

彼は眼をこすった。なんどこすっても、風景は同じである。

気がつくと、ともかく舗装してあった道路は土だし、それに――いま、向うの町角の天水桶のかげから現われた二人の男は、能の中の或る衣裳に似たものを着て、烏帽子(えぼし)をつけた――あれは三河万歳(まんざい)というやつじゃないか知らん?

ほがらかな声が聞える。――

「鶴は千年の名鳥、まことにめでたく候いける。……これから、そろそろ万歳、エヘ万歳オヤ万歳。万歳楽でおんよろこびだ。――」

みなまで聞かず、藪井氏は、ころがるように家の中に逃げ込んだ。実際にも、文字通りもとの部屋に転がり込むと。――

「騒々しい、正月から、醜態をさらして何じゃ、まだ酔うておるのか、ふつつか者め」

という声が、頭上から降った。

顔をあげると、そこに父が坐っている。あの、ここ数年来、垂れ流しのありさまで、おむつ

まであてがってもらっている中気の老父が、これはしたり、裃(かみしも)までつけて、厳然と膳の前に坐って、白髪白髯(はくぜん)の中からはたとこちらをにらみつけている。

「あっ、お父さん、癒ったんですか、病気は――」

いいかけて、彼は部屋の中も一変していることに気がついた。

電気ゴタツもない。ガスストーブもない。テーブルもない。テレビもない。ステレオもない。――とにかく部屋をぎっしり埋めていた文明の利器が、一切きれいさっぱり消失して、見えるのは、障子、襖(ふすま)、刀架の刀と、黒塗りの膳が四つだけ、みな古びて、ただ青だたみだけがすがすがしい一室であった。

その襖がスルスルとひらいて、二人の男女が両手をついて、さげていた頭をあげた。

「旦那さま、あけまして、おめでとうございまする」

黒紋付に丸髷の姿も楚々とした妻の伸子であった。つづいて、前髪をふさふさゆすりながら、息子の庄助がいった。

「昨夜は、いたく御酩酊なされまして案じておりましたが、つつがなく、麗わしき御機嫌を拝し、祝着至極に存じまする」

二

膝をつねった。顔を洗った。頭をゆさぶりはては逆立ちして見た。

夢ならば醒めよ——と。
最後には、うなるようにいって見た。
「これで、最後にはやっぱり夢だった——なんて手は、古いぜ、おい」
しかし、なんとしても醒めない。——これは、正真正銘の現実なのだ！
それを認めるよりほかはなくなって、藪井氏はついに一カ月あまりノイローゼ状態におちいってしまった。
「……お気の毒じゃが、こりゃまったくのきちがいでござる」
と、呼ばれた医者はみな宣告し、父の庄斎は、
「ああ、由緒ある藪井家からかような乱心者を出すとは、藪井家に天魔がとりついたか」
と、歎き、
「これはめったな狼藉（ろうぜき）などいたさぬうち、わしの手で一服盛って始末して、あとは庄助を頼んだほうがよいかも知れぬぞ」
と、恐ろしいことを口にして、狂乱状態にあった藪井氏をもぎょっとさせたくらいであった。
すぐ次に述べるが、藪井家は代々の漢方医だったのである。だから、よその医者を呼んだのは庄斎老が何度も診（み）たあげくのことであることはいうまでもない。——
なお、それでもと念のために、医者ではないが近くの蘭方の知識があるという男を呼んでみ

ると、彼は家族から事情を聞いて、
「ああ、これは急性アルコール中毒ですよ」
と、軽くいった。
「短時間にそれほど多量のアルコールが血中に入れば、記憶障害とか幻覚とか妄想とかの症状があとしばらく発現しても不思議じゃない。いったい奴さん、なんでまたそんなに烈しく飲んだものですかね。この世を憂い人にイカって酩酊することが多かったが、それにしても正月早々とはね」
そのとき藪井氏は隣室で蒲団をかぶったまま寝ていたが、家族と話しているこの声に、久しぶりに日本語を聞いたような気がして——ふしぎにそれまで彼は周囲の家族の言葉がたしかに日本語なのにそうではない感じがしていたのだ——頭をもちあげて、少しひらいた襖の間から眺めると、年はほぼ自分と同年輩、色白で顔が長く、高い鼻、細い眼の何となく知的な、しかも恰幅のいい男が、三十センチ以上もある長い煙管（きせる）で煙草を吹かしながらしゃべっているのが見えた。
「まあ、もう十日か二十日ほど、ようすを見られてはどうですか。きょうはこれから急いで田沼さまにうかがわなくちゃならん用がありますので失礼しますが、二、三日中にもういちどのぞきに来ることにしましょう」
その男が帰ってから、老父がにがにがしげにつぶやくのが聞えた。

「相変らず、人には通じぬ言葉を弄して煙（けむ）に巻こうといたしおる」
「アルコール……何とか、とは何でございましょう、舅上（ちちうえ）さま」
と、細君が聞く。
「そこがあれの山師たるゆえんじゃ。何かといえば権門田沼家の名を持ち出すと同様に」
そのまたあとで、藪井氏は細君を呼んで、
「さっき来た男は何という人かね」
と聞いて見た。細君は、また例の恍惚ぶりがはじまった、といった顔で、
「あれはふだんお仲のよい平賀源内さまではござりませぬか」
と、いった。
そういう細君は、眉（まゆ）を剃り、歯を黒く染めている。——
この当座の彼の天地晦冥（かいめい）ぶりを述べていたらきりがない。グアム島から突然二十七年後の「未来」の世界へ運ばれて来た横井軍曹は、その衝撃を防ぐために長いあいだ病院に入れて外部と遮断し、徐々に感覚と知識を馴らしてもらったが——その話も、むろん藪井氏は知っている——彼の場合は、友人の説明も保護もなく、突如として二百年ほど前の「田沼時代」につれ戻されたらしいことを藪井氏は知ったのである。
どうして、幕末でもなく戦国時代でもなく田沼時代にひき戻されたのかはまったく理解がつかない。いや、つれ戻されたとかひき戻されたなど感じているのは彼一人だけで、むろんまわりの人間は、現在のわれわれが現在ただいま生きていると感じて疑わないように、彼をもとり込めてすべての人間が田沼時代に生きているものと確信して生きている。

そして藪井家は、但馬（たじま）豊岡藩一万二千石、京極甲斐守のお抱え医師で、住居は深川藪の内というところにあり、父の庄斎はすでに隠居し、彼が現役で藪井庄庵という人間であることを知った。——
「えっ、ぼくが医者？」
藪井氏は眼をまろくした。彼は雑文など書いて何とか暮して来た人間で、医者の知識なんか何にもない。
だんだん聞くと、お抱え医師といっても、べつに京極家の藩医というわけではなく、どこの江戸屋敷にもある万一の際の予備の医者で、扶持はもらっているけれど、お呼びでなければ出勤する必要はなく、そのまま町医者をやっていて結構だということである。
「すると、やっぱり医者をやらなけりゃならんじゃないか」
「いえ、それが、ここ二、三年どうなされたものか、ただあの平賀さまなどと酒を飲まれたり、句会を開かれたり。……」
と、細君は情けなさそうに答えた。もう彼女も、彼が以前の記憶をすっかり失っていることを承知して、こういうものいいかたをする。
「それはよいとして、このごろは明けてもくれても、麻雀とやら申す博奕（ばくえき）にふけられ。——」

「えっ、麻雀？」

「源内どのが長崎土産とか申されて、実はどうやら御自分で作られたものらしいという噂でございますが、それでなくても家計不如意のところへ土産どころか高価に売りつけられたもの。しかし泣かされたのはそのあとのあなたの溺れぶりで、ほんとうに源内どのは悪いかたです。あなた……何もかもお忘れのようですが、麻雀も忘れて下されましたか？」

「いや、おぼえておる。麻雀なら、死すとも忘れはせぬぞ。そ、それはどこにある？」

「あなたのお部屋でございます。……」

そのときはじめて自分の部屋へいったのだ。それは陰湿な六畳で、これまた江戸時代にまぎれもない部屋で、それでも棚から壁際までぎっしりと和綴じの書籍が積まれてあり、あとでのぞいて見たら表紙の題簽（だいせん）とは似ても似つかず内容は春本のたぐいが大半であったが、それはともかく隅っこに麻雀の卓も牌もたしかにあった。

それより、壁に貼られた数枚の短冊にまず彼は気がついた。

「愁いつつ岡にのぼれば花いばら」

「ゆく春や同車の君のさざめごと」

「牡丹散って打ちかさなりぬ二三片」

「菜の花や昼ひとしきり海の音」

一句ずつ口ずさんで。――

「こりゃ、ぼくの作った句かね？」

と、藪井氏はふりかえった。さっき細君が、

「句会を開かれたり……」といったのが、自分が俳句の心得などまったくないので、かえって頭に残っていたのである。

「ホホ、何をおっしゃいます。それはいつぞや京から蕪村さまがおいでになられたとき、あなたがねだって書いていただいたものではござりませぬか？」

「これが蕪村」

つまり、それほど藪井氏は俳句に無智だったのである。

「へへえ、蕪村が、うちに来たこともあるのか。……」

俳句を知らないくせに大いに感動したが――俳句を知らなくても、これらの句が恐ろしく近代的なことはわかる。同車の君のさざめごと、などタクシーに乗ったアベックのいちゃつきを詠（よ）んだものかと思ったが、そういう錯覚もこの語感の清新さからだ。

田沼時代――こういうハイカラな詩人を生む雰囲気を作った時代――これは、馬鹿には出来ないぞ。

と、見直す気になったのは少しまたあとになってからのことで、このときはまだ何が何だかわからない混沌状態の渦中にあったことはいうまでもない。

さて、こうして田沼時代における藪井氏のまず日常生活がはじまったわけだが。——

いやもう、これはとうてい近代的なんてものじゃない。

改めて紹介するのも可笑しいが、藪井氏は驚いた。彼とて徳川時代に、何があって何がなかったくらいは知識としては知っているつもりであったが、直接自分と関係があるとなると改めて驚いた。

朝起きて顔を洗う。いちいち井戸端にいって、つるべで水を汲みあげなければならないが、歯を磨こうとすると練歯磨もなければ歯ブラシもない。それには総楊子(ふさようじ)と称するものがあるからまだいいとして、髯を剃るのに石鹸がないのには困った。彼は医者だそうで髪は総髪であったからまだ助かったが、ほかの人間はみんな頭のまんなかを剃りあげる、いわゆるサカヤキというやつだが、これを剃るにも石鹸がないのだから大変だ。

のちに痛感したことだが、だから町を歩くとよく頭を剃刀の傷だらけにした人間に出逢う。さすがにだれもが毎日剃るというわけにはゆかないと見えて、三ミリ、五ミリ、七ミリとその部分がのびている連中が多く、とうていテレビや映画のマゲモノのごとく青々つるつるぴかぴかというわけにはゆかない。そして坊主と総髪の人間を除いては、だれもが髷を結(ゆ)っている。女はいわずもがなだ。だから、みんな恐ろしく油っくさい。人妻となった女性は必ず眉を剃り、歯をおはぐろで黒くしている。——

ミセスになると外形的にそれを証明するという風習は、ひょっとすると文明的一進歩でそれ

が後代——彼にとっては前世である——また混乱してしまったのは退歩ではあるまいかと思われたが、それはともかく、このおはぐろといい髪といい、その手数たるや大変なものである。それを、みんながやる。どんな不精者でも面倒くさがらないでやる。町へ出て、駕籠かきとか人足とか、冬でも裸同然の男が多いことにも驚いたが、そんな手合(てあい)でも、チョンマゲだけは労をいとわないで必ず結(ゆ)う。

「一種の固着妄想だな」

と、はたからきちがいと診断されたはずの彼がこう考えたが——むろん、これもあとになっての話である——ついでに、風習とはすべて社会的固着妄想であり、後代のネクタイなどもそのたぐいではないか、いやそういえばほかにもいろいろあるぞ、と彼は思いはじめた。マニキュアだっておはぐろと同じようなものだし、女が美容院にいって長時間カマをかぶる苦労は丸髷を結うのと変わるまいし、若者の長髪だって、固着妄想という点ではチョンマゲと同質のものだ。

それはそれとして、火をつけようとすればいちいち火打石で付木(つけぎ)につけなければならぬ。

——マッチもないのかと改めて長嘆せざるを得ない。

マッチといえば、藪井氏の知っている以前の時代には、工場の煙や自動車の排気ガスの中の硫黄分が問題になって、こういう公害でいまにも人類が絶滅しそうな金切声をあげなければ人類じゃないと糾弾されんばかりで、よくマッチの硫黄分で騒がないとふしぎに思ったほどだが

――なるほど江戸時代にはマッチがないかわりに、朝に井戸端で仰ぐ空はきれいに晴れて、西に富士がクッキリ見える。

マッチより火打石のほうが非公害型であるにしても、食事には閉口した。

彼の知っている人々は、だれでも食い物は昔のほうがウマかったという。食い物に関するかぎり、戦前のほうがウマかったといい、大正時代の本を読むと、明治のほうがウマかったと書いてあった。それなら徳川時代の食い物ときたら最高のものであるはずだが、それが全然ウマくないのである。ほとんど蛋白質のない粗食は何より栄養学的無知から来ていることはあきらかだが、年齢のせいでだいぶ和食好みになりつつあった藪井氏は、肉がないなどはいいとして、豆腐にしろ野菜にしろ、それがウマくない。

その理由は、実に単純なことで、主として砂糖を使っていないせいだ、と彼は気がついた。細君に聞いて見ると、砂糖は輸入して長崎から来るものだけで、ふつうの家庭の料理にはとても使えないという。昭和時代には砂糖は肥満児をつくり糖尿病をつくる元凶だとされ、藪井氏も料理が何でも甘過ぎると舌打ちする旗頭であったが、砂糖ぬきの和食がいかにまずいものであるか、ということを切に痛感した。

そういえば、昭和時代の人間だって、口にするほど甘いのがきらいかどうかは疑問だ。酒は辛口にかぎるという評判は耳にタコの出来るほど聞かされるのに、現実に酒は滔々として甘口ばかりであった。あたかも、演歌なんか、と、しかめっ面する文化人ばかりなのに世の

中は演歌だらけというがごとし。あれもベンダサンのいわゆる日本人の「空体語」か。

さらに、そのまずい食事を終えても――新聞もない、テレビもない、週刊誌もない、手持無沙汰にただ悶々として、長い日を暮して夜が来ると――いやその暗いこと。家の中には一つか二つ、うすぼんやりと行燈がともっているだけで、外に出ればただ黒闇々だ。

藪井氏は正気のつもりで、しかもはたからきちがいになったといわれたが、ほんとにまた本格的なきちがいになりそうな気がして来た。その昔、日本人をノイローゼにするには刃物は要らない。テレビを三日とめるがいいと考えて笑ったが、笑いごとではなくてまさに彼自身がその通りになった。

これを防ぐにはどうしたらいいのか。

自分がそれを作ればいい、と、彼は考えた。それら、ないものを自分が生み出せばいいのだ。周囲の人間はそれらのものがあり得ることを知らないが、自分はそれらを知っている。練歯磨を、歯ブラシを、マッチを、砂糖を、新聞を、週刊誌を、テレビを、電気を――。

そして藪井氏はすぐに知って茫然としたのである。

新聞、テレビ、電気はともかく、自分に歯ブラシ一本、マッチ一本、砂糖一匙も作ることが出来ないことを！

三

昭和の世界においてこそたんなる雑文書きに過ぎないにしても、それにしても幼年時から強制的に、あるいは自発的に、どれだけ勉強して来たかわからない。見ようによっては雑文書きになるほどあって、その学は大ゲサにいえば森羅万象にわたっているといっていい。

代数も幾何もやった。物理も化学もやった。植物図鑑、動物図鑑も何度もひらいたし、石油、電気などの動力から天文地理、核爆発の原理から、例えテレビにしろ月世界までまざまざと知っているのに、いざとなると机の上の安物のプラスチックのペン皿はおろか、鉛筆一本、ケシゴム一個、紙一枚もどうして作っていいかわからないとは。——

それらのものが容易に作れないという理屈もすぐに立てられたが、それより作れないという現実のショックのほうが大きかった。よその国が月へロケットを打ち上げるたびに、ただテレビに出て解説するばかりの日本の科学者を憫笑していたが、とうてい人さまを笑えた筋合いではないのである。

——で、結局、作れるものはというと、傘張りに提灯張り、箸削りに楊子削りなど、それも相当の練習をしてのち、やっと同じ江戸時代の人々のやれることを笑われる程度にしかやれないということがわかって、では自分の受けて来た教育は何だということになる。

ここにおいて第一の真理が眼前に現われる。いわく、いわゆる近代の教養などいうものは、

現実には何の役にもたたない。

ノイローゼを解消するどころか、藪井氏は新しいノイローゼに陥るところであったが、それを救ってくれたのは、やはり、それから外を出歩きはじめて体験した江戸の町の風景や習俗だ。それもむろん、一方ではノイローゼを助長することにちがいなかったが、それと並行してかきたてられる好奇心が、あまりにも圧倒的だったからである。

「庄庵どのはその後いかがじゃな」

と、お向いの堀田さんがやって来た。堀田さんは、或る貿易商社の社員である。——いや、そうではない。堀田通算というその人物は、京極藩の江戸お留守居役なのだ。お留守居役はふつう江戸屋敷内におり、こんな町中にいるはずはないのだが、実は堀田さまはここにお妾を囲っており、その妾宅を世話したのは、なんと藪井氏その人であるという——。

そんなことを聞いても、まったく憶えがないどころか、信じられもしない。ただ顔だけは——A商社の接待係の社員としての記憶がある。そのお妾も、堀田夫人としての記憶はある。

「すこしは回復したかの」

まんまるい愛想のいい人相だが、口のききかたが横柄なので藪井氏はむっとせざるを得ない。

実はこの人物は、藪井氏の気が変になったという噂で、夫婦ともども二、三度顔を出して、そのときから藪井氏は気にくわなかったのだ。

そのとき、あとで、

「いくら今を時めく商社の社員だって、何て態度だ。おれはA商社から一文ももらってはおらんどころか、聞くところによるとA商社は日本国土の何パーセントかを買い占めるということだが、貿易商社が日本の土地を買い占めて何にするんだ。土地に泣く民衆の血をしぼりあげる、まさに国民の敵とは彼らのことだ――」

と、憤慨したら、

「あなた、何をまたわけのわからないことをおっしゃるのです。堀田さまは、お扶持を頂戴している京極さまの御重役ではございませんか」

と、細君から顔色を変えて叱られて、爾来――「そういうことになっておるか」――と、不承不承納得することにした。そんなはずはない、といったところで、周囲の現象ぜんぶが、そんなはずのないことに事実なっているのだから、どうにもいたしかたがない。

「おかげさまで、だいぶものの道理がわかって来たようでございます」

と、細君がいった。

「おお、そりゃよかった。それならば――先刻ふと思いついてこちらに廻って来たのじゃが――わしはこれから八百善へゆくが、気ばらしにひとつ庄庵も参らぬかな」

「えっ、八百善へ――そんなお歴々さまのお集まりに？　ほんとうのことを申しますと、まだ口のききようなど、おかしいところがござります。万一失礼なことがありましては」

「いや、よいよい。わしもこの前驚いたが、なかなか面白いところもある。実はそれが面白うて、御一同にも紹介しとうてつれてゆこうというのじゃ。その点はわしもよくふくんでおるゆえ、是非来てもらいたいのじゃが」

こういう問答を聞いているうちに、ふいに、

「八百善ならいってもいい」

と、藪井氏が口をさしはさんだ。

それは、家にいても変てこであることは同様である上に、どういうわけか八百善が江戸時代の有名な高級料亭であることを知っていたのと、それから家庭での毎日の食事があまりに粗悪なので、急にウマいもので一杯やりたくなったのである。

八百善は山谷堀にあった。

二人は大川から舟で山谷堀に入って八百善にあがった。

途中の早春の江戸の景観や八百善のたたずまいは、いちいち叙してはきりがないから割愛する。それより藪井氏にとって、この日、さらに強い印象を受けたことが二、三ある。

まず八百善で出された懐石料理だが。――

出たのは、甘鯛の赤味噌漬、鴨しんじょ――鴨と鱚をすり身にして蒸したものという――鱚の大根巻に伊勢海老、新わかめに三州味噌の味噌汁、うどの芽に針生姜の吸物などだが――江戸時代に生まれ変って以来はもとより、昭和時代にも藪井氏は何かのはずみで高級料亭なるも

のにいったこともないではないが、とにかくこれほどウマい料理を食ったことはない。ちゃんと砂糖が使うべきものには使ってあって、しかもそれが殺してある。

彼はこれを食いに、堀田氏にくっついて出て来たのだが、その甲斐はあったと思ったほど満足した。食い物はみんな昔のほうがウマかったという俗説は必ずしもうそではなかったことを認めた。

ところで、その日の客である。

主客は、老中田沼主殿頭意次の公用人の三浦庄二という人で、接待側は京極藩の堀田氏をはじめ——いや、堀田氏など末座に列する態度で、あと四、五人の人々は、もっと大藩の、いずれも江戸お留守居役であったらしい。料理は懐石であったが、べつに茶席というわけではなく、広い座敷で、芸者も五人ばかり来た。

藪井氏が驚嘆したのは、彼らの会話、その場の雰囲気が、まったく江戸時代的でなかったことだ。自分の家からやって来たくせに、彼は突然、また昭和時代にひき戻されたような感じがした。——

堀田氏は円満な風貌をしていたが、主客の三浦氏はそれに輪をかけて、まるで布袋さまのようだ。あとの人々もみな実に洗練された肌合いであった。——ただ、一人をのぞいては。

これはどこかのお留守居役の一人がつれて来た人物で、ほかの連中には意外な来会者であったようだし、大半は初対面でもあったらしい。

「松平上総介さまです」

と、そのお留守居役は紹介した。

「いちどかような場所に出て、みなさまがたの話を聞きたいとの仰せで」

みな「——ほ？」というような表情になりなかんずく田沼家公用人三浦の顔色が動いたようであった。すぐにみんなひくく頭を下げた。

「いや、いや、そう奉られては、かえって私のほうが相すまぬ。なるべく邪魔にならぬように控えておるゆえ、新米の若造がおるものと心得て、みなのふだんの通りに愉しんでくれ」

と、松平上総介は笑顔でいった。まだ若い——あとで、二十二、三とか聞いて驚いたが——ふっくらとした下ぶくれの温顔で、若さに似合わぬ老成した感じがある。しかし、ほかの人々にくらべてどこか野暮ったいことはいなめない。

松平上総介と聞いても、むろん藪井氏にはだれだかわからない。ただその場のようすから、これはほかの顔ぶれとはちがう——おそらく大名か、大名の若殿かであろうと推察した。

さて、キョトンとしていた藪井氏もむろん紹介される。

「これはわが藩で抱えておる町医者ですが。——」

と、堀田氏は、この男がこの正月に大酒を飲んで気を失い、醒めてから語るところ、まったくあの世の物語で、酒興の一つとしてどうか聞いていてやっていただきたい。ただしなお正気でないふしがあるから言語その他に礼を失するところがあるかも知れないが、その点はお許し願い

ます、といった。
「さあ話せったって——何をしゃべっていいかわかりませんよ」
「これでござる、おまえの見た前世の話だ」
「前世？　ぼくの知ってるのは、どうも未来の世界らしいんですが。……」
「とにかく、その世の、左様さ、朝起きてからのことをしゃべってくれ」
「そうですな、起きると瞬間湯沸器にすぐ火をつけて、お湯を出して顔を洗います。その前に電気カミソリで髯を剃る。それからテレビのニュースを見る。朝飯はトーストにベーコン、ハムエッグにコーヒーです。それからたいていの人は、電車かマイカーで会社にゆきますが、これがまたこの世のものとは思われないラッシュで、交通戦争で死ぬ者だけでも毎日平均五十人。……」
「どうです、何をいっておるか、まったくわからないところが妙でしょう」
と、堀田氏は得意そうに鼻をうごめかした。
「私は会社にゆかないから、たいていステレオのＦＭ放送かレコードでモーツァルトなどを聞きながら、新聞のまずスポーツ欄に眼を通す。……」
「おまえのしゃべっておることはオランダか？」
と、聞いたのは松平上総介だ。一息ついてオランダ語のことだろうと思いあたり、

「いや、英語まじり——イギリス語まじりでしょうな」
「エゲレス——おまえの見たのは、エゲレスの夢ではないか？」
「なに、日本ですよ、日本の昭和時代。——」
「昭和？　そんな年号は聞いたことがないぞ。それは何と仰せられる将軍の時代じゃ？」
「将軍は、さあ、そうそう田中将軍。——」
「なに、田沼将軍？」
「いえ、田中角栄将軍。これは昭和の太閤と呼ばれたおかたで。——」
「太閤？　それならやはり以前の代ではないか。それは豊臣家のゆかりあるかたか」
「いや、それは関係ないようです。ただ大変女好きで、オメカケが何人もあるというところが太閤さまに似てる点の一つだそうで」
「わからぬな。……では、天子さまは何代目か」
「ええと、百二十四代でしたかな」
「なに、百二十四代？　ただいまの天子は第百十八代後桃園天皇でおわす。して、その天子が将軍家は御英明か」
へえ、第百十八代とは驚いた。田沼なんかが出て来たから江戸もまんなかあたりまで来ているのだろうと思ったが、天皇はもう百十八代まで来ている。それまでの長さを考えると——はじめのほうは少々インチキがあるらしいが、それでもこりゃ共産党がいくらガンばってもなか

なか天皇制は潰れそうにないわい、と藪井氏は考えた。

「将軍は将軍になられるくらいだから御英明なんでしょうな。ただ少々そこつなところが命とりになりはせんか、という評判で。——天子さまのほうは、これは御英明なんだかそうでないのか、われわれ下々にはサッパリわかりません。相模湾のボラだかエラだかのほうがよく知ってるようです。ああ、たったいちど、昭和二十年八月十五日、一日だけ奇蹟的に御英明なところを、人間の民草も拝見する機会がありましたが、あとはまた濛々たる暗雲のうちに身をかくしたまい——」

「堀田さん」

と、向うから三浦が呼びかけた。

「もういい、聞いているだけで気がちがいそうになる。妙な化物をつれて来たな」

あの布袋さまみたいな顔にそんな表情が現われるのか、とふしぎなくらい、剃刀のように不機嫌な顔であった。ずっとあとになって考えると、三浦は松平上総介と藪井氏が、二人だけで何やら問答しているということに不愉快の感を抱いたらしい。

「ま、その者の夢物語はあとで聞こう」

「は」

堀田氏もまた別人のように狼狽し、恐縮した。彼が藪井庄庵をつれて来た目算ははずれたようだ。堀田氏は以前から藪井氏をよく知っているからこそ面白く思ったのだが、ほかの人間に

はその可笑しさが通ぜず、ここらあたりから計算違いが生じたらしい。

三浦庄二はすぐにもとの円満な相に戻って芸者にくくれたあごをしゃくった。

「口直しに、一つやってくれ」

芸者が三味線をひいて、常磐津をうたい出した。

実は藪井氏は常磐津も長唄もその区別がつかないほど日本古来の音曲については無智である。ときどき料亭などでドドイツや小唄を聞くこともあるが、三味線という貧弱な楽器といい、ヴォリュームのない発声といい、これは音楽の一種ではなく、哀れな亡国の音波だと耳をふさぎたい思いになることが多かった。

ところがなぜかこのとき、三浦に一喝されてボンヤリしていた藪井氏だが、この軽蔑していた音波を聞いているうちに、日本の調べも悪くはないな——と思ったとたん、名状しがたい感動に襲われて、ハラハラと落涙さえしたのである。

あとになって考えると、昭和時代の日本の音曲は、やるほうも聞くほうもどうしたって西洋風の音楽に感覚に濁りを生じさせないわけにはゆかないが、これはそういうものを一切知らない。これこそ人間唯一の音楽だと信じ切っている純粋さが、はからずも藪井氏の持っている何千年来の日本人の琴線にふれた共鳴の涙ではなかったかと思われる。

それを聞きながら、田沼家公用人とお留守居役たちの会話がはじまった。

四

これもあとになって思い出すと、この公用人とお留守居役たちはなかなか大変なことをしゃべっていた。もっとも、主としてしゃべったのは三浦で、お留守居役は拝聴といった態であったが。——

話は、近くまとまりかけている一橋豊千代君と薩摩の島津家の姫君との縁談であった。

いまの将軍のただ一人の世子が一ト月ほど前急死したので、将軍にとっては従弟の子にあたるまだ七つの一橋豊千代があとをついで十一代さまになることになって、驚いたことにその未来の御台所がもう決まりかけているらしいのだが、それが薩摩とは。——と、巷間いろいろ風評があるようだ。

一つは、これまでの将軍の御台所は初代と二代をのぞいてみんな宮家ないし堂上の姫君であったのに、はじめて大名の、しかも外様の薩摩とは、という意外さと、二つには、それは田沼どのの御斡旋によるらしい、ということについてのとかくの噂と。——

「ああ、左様さ、殿は一つの御信念があってその儀を推進なされておる」

と、田沼の公用人は平気でいった。

「恐れ多いが、将軍家のおん血がこのところお弱りあそばされておるからな。雲の上の血など、人間として最劣弱のものよ。大名などもそれに近い。殿としては、もし出来るなら田舎の大郷

士か町の大町人かの血でもお入れになりたいくらいに考えておられる。が、一足飛びにまあそういうわけにもゆくまいからせめてお大名の中でももっとも野性の血を——と、薩摩侯をお選びなされたのじゃ」

そして、自分の意見は、殿の御意見の受売りじゃが、と、ことわって、

「だいたい、体制に保護されてやっと禄にありついておる侍が、裸一貫で世を乗り切ってゆく町人よりえらいと思うておるのが今の世の根本のまちがいだ。本来の能力からいえば士農工商の順を完全にひっくり返すのがこの世のありかただと思う」

と、いい、また、

「いまの世が、金といえばみな眼の色を変えて飛びつき、庶民総色きちがいの観を呈し、士道は地を払ったと慨嘆する向きがあるが、そういう欲をほしいままにする人間のありかたがほんとうなのだ。それでこそ、日本は長いいじけた貧乏から脱却出来るのだ。だからそんな世の中を作るのが殿の御念願で、事実はその通りにいっておる」

と、笑い、さらに、

「何かと田沼を非難する声もちゃんと承知しておるが、こちらはあえてそれを取締る気はない。いいたいことをいわせ、やりたいことをやらせる、自由放任こそ天下の為政者の最高のやりようだと考えておる」

と、いった。

はじめ藪井氏は、これを別にそれほど大胆な意見だとは思わなかった。一つにはこれが実に当り前の考えであると思って驚かなかったのだが、二つにはこの田沼家公用人は右の見解を右の通りに述べたのではなく、実に円転滑脱、軽妙無比の会話を以て、その間にウイットで笑わせ、芸者に冗談をいいながら語ったからだ。

ただ、のちになって、藪井氏がこれはまったく大変な進歩的意見だとうなって、それで思い出してまとめると右のごとき内容の語録だったのである。

そしてまた思い出すと、この田沼家公用人の座談に対し、集まった各お留守役たちもヘラヘラ笑って、

「いや、御尤も」

「いかにも左様でござろう」

と、愛嬌よく笑っていたが――ただ一人、例の松平上総介だけは変な雰囲気を持っていた。

彼もまたふっくらした顔におだやかな微笑を浮かべてうなずいていたが、それにもかかわらず、重い石が一つ転がっているような印象なのである。そして、三浦庄二は、ときどき細い眼をちらっちらっとそのほうへ投げて何だか彼をいちばん気にしていたように思われる。――

その松平上総介は、途中からみなににこやかに挨拶して席を立っていった。

さて藪井氏は、彼を酒興のために供そうとした堀田氏の思いつきはまったくあてがはずれ、彼一人放り出されてしまった案配となったが、藪井氏自身は決して不満には思わなかった。料

理もウマかったし、芸者の美しさ、芸、それに客のあしらいも、つつましやかでそのくせ色っぽくて、新宿のバーやキャバレーのガサガサしたホステスとは天地懸絶していたし、それに何よりもここに集まった人々の社交ぶりに堪能(たんのう)した。

ああ、これこそほんとうの社交である！

と、感服してから、またあとで想い到ったことがある。

お留守居役とは――江戸にある各藩の特命全権大使だ。対象は、幕府と諸大名である。幕府が自分の藩に金のかかる大工事を命じはしないか、ほかの大名はどういう対策を持っているかなどについて、絶えず情報を蒐集している役だ。その昔の赤穂浪士の事件など、まったくこの機関の失策から起った悲劇だ。そのために大使たるお留守居役は、茶屋や料亭で、幕府の役人やほかの大名のお留守居役たちとつねに接触して、酒盃の間に交渉したり駈引したりしている。いわば大社用族である。

そこで藪井氏が手を打ったというのは――藪井氏は外交史に決してそれほど詳しくはないけれど――幕末や明治前期、日本の外交当事者がどうしてあれまでにやれたかということだ。ぜいたくをいえば満点には距離があるだろうが、それは国力の大差から来たやむを得ない不利であって、それにしては実に困難な外交交渉を、幕府や明治政府の役人たちは結構うまくやったものだと認定しないわけにはゆかない。昭和前期のむちゃくちゃ外交にくらべればなおさらの感がある。それが、それまで――開闢(かいびゃく)以来はじめてといっていい外国相手の駈引においてだ。

日本と同じ運命におかれたインドとか中国とかはもっとへたくそだったのに、日本人がどうして、あのころ、あれだけの才覚を持っていたのだろう？　と不思議に思っていたのだが、いまその疑団が氷解した。あれはまったく、この江戸お留守居役の酒盃の間に養われた才能の伝統であったのだ！

とすれば、江戸の大社用族の慣習は、幕末明治における最大の困難期を何とかうまくしのいだ原動力の一つといっていい。社用族の功、空しからずである。

昭和時代でも、赤坂新橋の料亭が殷賑をきわめる。その主役は政財界のおえらがただが、この風習はまったく江戸お留守居役の流れを汲んだ伝統ではないか。九分九厘、それにまちがいはない。

ただこのほうが日本の国益につながるかどうかは甚だあやしいとして、ただ一つわかったことがある。それは、いまでも日本に伝わる小唄とか端唄、お座敷料理、さらに粋とか通とかいう一種の文化ないし文化精神は、たしかにここか、それでなければ吉原という売春地帯から発生している、ということだ。

それに較べて——と、慨嘆せざるを得ない。昭和の社用族はいかなる文化ないし文化精神を生み出したか——と。これはただ税金の浪費ないし脱税のはけ口という不毛のからくりに過ぎんではないか。昭和の料亭族バー族キャバレー族は、いったい何をボヤボヤしておるか！

ところで、この日、藪井氏に最大のショックを与えたのは、何といってもほんとうのチャンバラを見たことであった。

宴が果てて八百善から一同が出て、山谷堀の舟へ向う往来の上であった。

「そこに田沼の用人がおるか。——」

「田沼の醜類待てっ」

向こうから、刀をひっこ抜いて、駈けて来た者が二人ある。

客たちにはむろん供の者がいる。それが「あっ」「うひゃ！」「出たっ」わけのわからないさけびをあげ、混乱し、中には、二、三人、まだ水の冷たい堀に、しぶきをあげて飛び込んだやつもある。

「士道頽廃の元凶に天誅を下すっ」

襲って来たのは、浪人風の男二人で、顔じゅう口だらけにしてこんなことをさけんだようであった。

これに対する反撃のいちばん早かったのは侍ではなく、町人であった。八百善出入りの魚屋か何か、ねじり鉢巻にてんびん棒をふりかざした若い衆が、

「この野郎、何さらすっ」

と、わめきながら浪人の一人に殴りかかった。

むろん、こんな雑魚（ざこ）は、水もたまらず斬って捨てる——と思ったら、ふりかえった浪人の刀は、たちまちこのてんびん棒ではじき飛ばされ、よろめくところを頭部に一撃をくらった。ごつん！　という音とともに、

「あ痛（い）た！」

頭をかかえてうずくまるのに、「この野郎、この野郎」と、てんびん棒にめった打ちにされて、浪人は血まみれになってのびてしまった。

それに力を得たのだろう、供の中からやっと一人の侍が踏みとどまって、もう一人の襲撃者を迎え討った。迎え討つ——というと聞えはいいが、これが刀を抜いて迎えると、浪人のほうもぴたっと立ちどまり、両者は向い合った。

双方の刀のきっさきの間隔は二メートル以上もある。それなのに、二人の足は作りつけになったように地面から動かず、顔は土気色であった。あごをつき出し、両腕をいっぱいにのばし、腰はいわゆるへっぴり腰だ。そのひたいにあぶら汗がひかって来て、それだけ大きく波打っていた肩がもう限度に達して——実に長い時間に思われたが、三、四分であったろう——乾性の呼吸音に喘鳴（ぜんめい）がまじり出すと、ふいに浪人者が、

「けえーっ」

というような怪声を発して、走りかかって来た。はね出されたように、供侍のほうも地面を蹴る。

両人の刀が相手めがけてふり下ろされた。打ち合うひびきは聞えなかった。どっちの刀も握っている人間の意志とは別に、ただ重力にひかれて鈍く動いたようであった。それなのに、二人とも、すれちがおうとして、突然丸太ン棒みたいに簡単に転がってしまったのである。

びっくりするほど大量の、びっくりするほど真っ赤な、粘り気のある血が地土にぶちまかれて、その中に、

「テーッ、テッ、テッ、テッ」

と、刀を放り出した浪人者がのたうちまわっていた。

一方の侍も転んだままもがいていたが、やがて立ちあがろうとしてまた転がって、「たたっ」とさけんだ。そのとき、それまで茫然としていた多くの連中が、やっと雪崩を打って駈け出し、侍の介抱と浪人の取押えにかかった。

その結果判明したのは、あれほど大袈裟に血を出したのに、浪人はふとももの肉の一片をそぎとられただけであり、侍のほうはどこも斬られず、転がったのはつんのめったものであり、立ちあがろうとしたとき、こぶしが刀のつかに粘りついて離れず、そのために自分の刀で自分の足の指を傷つけたということであった。

それからまた、山谷堀に飛び込んだ者の中には堀田氏もおり、田沼家の公用人の三浦は腰をぬかしていたということも判明した。

チャンバラといっても、実際はまったくあっけないものだ。侍が町人に——あとで知ったと

ころによると、それは魚屋ではなく八百善の板前だったそうだが——殴り倒されるなど、だらしないにもほどがある、と藪井氏は思った。しかし、実態はまあこんなものだろうとも考える。反面、これはこれなりにやはり凄味のあるもので、或る程度彼は満足した。とてもテレビのチャンバラの薄っぺらさの比ではない。

五

「あの件は、ひらに、ひらに」

と、あとで堀田通算氏は藪井氏に手を合わせて拝んだ。

あの騒ぎのとき、まっさきに堀に飛び込んだということを、だれにもいわないでくれというのだ。——京極藩であのことを知っているのは藪井氏だけだからであった。

「べつにかまわんでしょう。僕だって——チャンバラを見るという好奇心がなかったら——水へ飛び込んで逃げたと思いますよ」

と、藪井氏はいったが、堀田氏はまだ不安だったらしい。

春ももはや深くなってから、藪井氏を殿さまのところへつれてゆくといい出した。そしてもっと彼の地位を、京極家のお抱え医師として昇格させるというのだ。

「いや、僕は医者のことを何にも知らない。——」

と、彼はあわてて手をふりかけて、またあわてていい直した。

「みんな忘れちゃったですよ」

そうはいったが、すぐにまた、新しい好奇心が湧いた。殿さまのところへゆくって？　殿さまというやつをいちど見てやってもいいな、それに、また御馳走が食べられるかも知れない。

「今回は、御挨拶だけでよろしいが。——一応御挨拶しておかねば昇格のはからいが出来かねるのでな」

「いや、伺いましょう、是非殿さまにお目にかからせて下さい。医者のほうも何とかなるかも知れません」

そこで二、三日後、藪井氏はお屋敷のお召しという段取りを踏んで出かけることになった。

堀田氏は迎えの駕籠まで寄越してくれたが——いや、その窮屈なこと、ゆれかげんの不愉快なこともさることながら、速度の遅いのには、べつに急ぎはしないけれど、いらつかずにはいられない。

見ると、往来を、馬のひく大八車が通る。

「おいおい」

と、藪井は駕籠かきに呼びかけた。

「この駕籠をだね、あの大八車にのせて歩くという工夫をしたやつはないのかね」

「御冗談を」

「冗談ではない、昭和時代では——いや、げんにいまヨーロッパでは馬車が——馬車どころじゃない、ワットが蒸気機関車を走らせているんだ」

藪井氏は雑文書きのあいだに、日本も年号は昭和でやめにしてあとは西暦一本で通すべきだ、という意見を書いたことがあって、その理由の一つに世界史との対照の問題があったが、そのときの例にたまたま「例えば、アメリカの独立が日本の田沼時代だ、などということがすぐに浮かんで来る日本人がどれくらいあるだろうか」と書いたことを記憶していたのである。そして、ついでに、その少し前にワットが蒸気機関を発明し、カントやルソーやゲーテやベートーヴェンが生きていたのもそのころだということを知って、これも面白く思ったから記憶していたのである。

「何をいいなすってるんだか、サッパリわかりゃせんがね」

と、裸にふんどし一本の駕籠かきは、息杖をふりながら答えた。

「大八車にのせて走ったりしたら、駕籠がこわれちまいまさあ」

「こわれないような箱を作ればいいじゃないか。こわれないような道を作ればいいじゃないか。アスファルト——じゃなければ、せめて石だたみにして」

といって、藪井氏は、ワットが機関車を発明すると必然的に汽車のレールが必要となるが、それを大地に延々と敷くということをやってのけた西洋人の大胆さに、機関車以上に改めて敬服した。これは蒸気機関車以上に、日本人には絶対に出ない智慧だ。それから先はどうなるの

か、それから先どうすればよいのか、難しい、となると日本人の思考は一段階で停止してしまう。

また彼は、「人間の空想力は、ないものを欲しいと思うほうにだけ働いて、あるものがもしなかったらという空想力は奇妙なほど弱い」と慨嘆したが、よく考えると日本人は、それどころか、ないものを空想する力も、奇妙なほどにない。——

「道を石だたみなんかにしたら、橋が落ちまさあ」

と、駕籠かきは馬みたいにあえぎながらいった。

駕籠は長い木橋を渡っていた。それが永代橋だと教えられたが、幅は六メートルほどの木橋だ。なるほどこれでは敷石を並べたら危いかも知れない。

「なぜ落ちないような橋を作らないんだ?」

——とは、彼はもういわなかった。

それより彼は隅田川に見とれた。

この前、山谷堀にゆくときも眺めてウットリしたが、大川には水鳥が何千羽となく飛び交して、あちこち魚を採る舟も見えた。聞くと、白魚を採っているのだという。そこで、「月も朧ろに白魚の篝(かがり)もかすむ春の空」という文句を思い出し、藪井氏は、「なるほど」といった。いまはひる前だが、西の方に富士が小さく、しかしはっきりと見える。この光景だけは江戸時代にかぎる、と彼は認めた。

しかしまた、大名小路にはいってから、そこにならぶ大名屋敷の築地塀や練塀の長さ、唐破風をのせ、錆びた金の定紋を打った長屋門の燻し銀的豪壮さにも感服した。いまの同じ場所、やはり丸の内の景観も悪くはないが、これはそれに勝るとも劣らぬ迫力があると思った。芸者の常磐津に迷いもなく濁りもないのに感心したが、これは純日本美が結集して権威のほうへ最高度に発揮された好例だと考えた。

これは帰りの話だが、日本橋から新橋まで歩いてみた。その名も、畳町、箱屋町、塗師町、具足町、弓町、槍屋町、紺屋町と、同じ職業が町々を形成し、店がまえやのれんの色が統一され、それが長い大通り全体として一種の結集美をなし、これはとうてい昭和の銀座の粗雑さかげんの比ではなかった。

藪井氏は昭和の銀座を見て、その大ビルや二階建てなどが混在して、その結果ただゴタゴタと貧乏たらしくさえ見える町並みに、何が花の銀座だ、何が世界の銀座だ、そんなことをいうやつは正気でいってるのかと失笑を禁じ得ず、そもそも日本人には都市美を創造する感覚が先天的に欠落しているのじゃないかと疑惑を抱いていたが、この江戸の銀座を見て、どうもそうでもないらしい、どこから変になっちまったのか知らん、とまた首をひねった。とにかく昭和の銀座の店主の美的感覚は、徳川時代の銀座の店の亭主にはるかに劣る。

さて、京極の殿さまである。

屋敷では——これはほかの大名屋敷にくらべると、同じ大名とは思われないほど小さなものであったが——堀田氏が出迎えた。彼はむろんふだんはここに住んでいるのである。

そして、ちょうど殿は御昼食中である。拝謁までのあいだ、自分といっしょに食事をしないか、といった。藪井氏はもとより快諾した。「大名料理」は、昭和の東京でも料理屋や温泉旅館の名物になっているところもあるくらいで、それを味わうために彼はきょうの挨拶に来たくらいである。

で、書院で堀田氏と向い合って昼餉をしたためることになったのだが。——

「失礼ですが」

と、ややあって藪井氏は、思いあぐねて聞かずにはいられなかった。

「きょうはこちらに何か縁起のお悪い日でもあるのでしょうか」

「いや、べつに」

と、堀田氏はけげんな表情をし、すぐに膳の上に眼をやって微笑した。

「これかな」

膳の上は、麦飯に梅干と沢庵だけであった。

「これは御当家におけるわれわれの平生の昼食である」

「殿さまも、ですか？」

「殿には——左様、これに煮豆が一皿おつけしてあるはずじゃが——朝は、味噌汁に沢庵だけ

じゃ。夕食には、このごろは塩ジャケの切身ひときれが加わる」

そして彼は粛然としていった。

「国の百姓の労苦を想う、というのがわが藩の藩祖以来の教えでな。それに事実、わが但馬藩は水呑み百姓の国でもある。徳義上、経済上、とても刺身に銀シャリなんぞ食ってはおれん」

六

それにしてはこのお留守居役はよくふとって、つやつやと血色もいいが――と考えて、たちまち藪井氏は先日の八百善を思い出した。

ついでに、堀田夫人――いや、オメカケの肌の色つやのよさをも思い出した。大将は必ず妾宅で、八百善とまではゆかなくても、相当の御馳走を食べているに相違ない。何が徳義上銀シャリなんぞ食えない、もあるものか。

「そうそう、縁起のわるい日、と申せばの」

と、堀田重役は梅干をしゃぶりながらいい出した。

「実は殿に、お案じ申しあげることが一つある。――わが殿はことしおん年三十歳に相なられるが、まだ奥方がおわさぬ。いや、廿三のおんとき、いちどさる大々名から輿入れのことがあったが……これが、運悪く、まるで河馬（かば）のごとき姫君でな、数日にして殿は、奥方を見ると柱にすがり壁にすがるという狂乱状態に相なられて、やむなく御離別のこととなったが。……」

「ほほう。――」

「それ以来、女性に対して恐怖症状を呈されて、もはや妻などいうものは欲しくないと仰せられるのじゃ。そうもいってはおられぬ問題じゃが、ま、おいやな御女性を迎えられてもおたがいに御不幸のもとと考え、焦慮しつつも日を重ねて来たが、それにしても、御庶子なりともお子がなければ御当家の前途に家臣一同不安を禁じ得ぬ。そこで殿に、とにもかくにもおん眼をつぶられ、腹は借物と心得られて一応お子をお作りおき下さるように、拙者ら老職、たたみを叩き涙をふるって御諫言申しあげた。その結果、殿もしぶしぶ御納得なされ、三年ほど前からとりかえひきかえ、御側妾を見つくろっておすすめ申しあげて来たのじゃが、それが、だれの眼にも文句のないはずの美女であるにもかかわらず、どうも首をたてにおふりなされぬ。従って、まだお子がおわさぬ。――で、きょうも三人、これからお目にかけるところなのじゃが」

どこが縁起のわるい日なのかよくわからない。聞いているうちに藪井氏は腹が立って来たが、いやこれはやっぱりあまり縁起のよくない話かも知れぬと思い直した。

「どうも恐れ多いが、罪は殿のほうにあらせられて、女人のほうにはないように思われる。……で、きょうの三人も、実のところ自信がない。――もし不首尾なら、わしに或る手段を取れという強硬派の意見さえある」

堀田氏は、妾宅にいるときとは別人のような苦悩を顔ににじませて嘆息した。

「どうじゃな、庄庵、何かうまい工夫はないか、殿が女好きになられるような。――」

「それは簡単！」

と、藪井氏はこのとき立腹かげんで返答したのである。いったい、そうまで到れり尽くせり女性の世話をしてもらって、やれしぶしぶ納得の、やれ気にいらぬという法があるか、ぜいたくにもほどがある、と腹を立てたのだが――彼が山彦の応ずるがごとく答えたのには、べつに理由がないでもない。

そもそもきょうここへ来たのでも、ただ食い気や好奇心ばかりでなく、お抱え医師とやらいう職業について、彼に変な自信が生じかかっていたこともあるのである。

むろん彼が医者などであるわけはないが――こりゃ、どうしても医者として暮してゆくよりほかはない、と覚悟するにつれて、いや、ひょっとすると、それでやってゆけるかも知れないぞ、と考え直したのだ。

江戸時代に何カ月か暮して見て、ほかの事象に対しても同様だが――周囲にくらべて自分の持つ知識はわれながら大したものだと思わざるを得ない。その知識が、現実に物を作るなどいうことにからきし無能力であるのはすでに痛感しているけれど、ただ純然たる知識をふりまわす職業なら、昭和時代の評論家のごとく、案外ゴマカシがきくのじゃないか。

いや、自分の素人としての医学的知識だって、ゴマカシどころではない。まわりの漢方医輩の千倍くらいはあるのではないか。だいいち人体の解剖学的生理学的知識にしろ――そうだ、

日本ではじめて蘭学者の杉田玄白らが小塚原で刑死人を解剖したのがたしかこの田沼時代であった。しかし、それにしたってごくないしょのことであろうし――一般の医者など、腎臓がどこにあっていかなる働きをしているか知りはすまい、彼らは腎虚などという言葉を作って、腎臓が精液の製造元だくらいに考えているにちがいない。

――あとで知ったところによると、徳川時代の医者は、国家試験はおろかお上の許可も要らない。甚だしきは医者の門に入って修業する必要さえない。自分で医者だと名乗りさえすればそれでいいとのことで、その開業の簡単なること、昭和時代の小説家みたいなものであった。

だから、結構やれるのじゃないか。争えないもので、堀田氏にしても、自分の言葉のはしばしに首をひねりながらも、相当いかれているふしがある。――と、思い出していたところへ、殿さまの女ぎらいの相談だ。

そんな男が、世の中にあるはずがない。――いったいこの世には、思いがけないものがきらいな人間がある。肉がきらい、生野菜がきらい、日本人のくせに味噌汁やお新香がきらい、というのも案外多い。ジャズがきらい、演歌がきらい、犬がきらい、猫がきらい、日本人がきらい、「このごろ」の新聞がきらいで天皇がきらい――万人すべてが好むというものはあり得ないのではないかと思われる中に、ただ一つ、お金がきらいという人間は見たことがない、と、藪井氏はかつて失笑したことがある。

いや、もう一つ、男から見て女、女から見て男がきらい、ということもまあなかろう。個人

的にあるいは時と場合で、あれには反感を持つ、これは憎らしいと思う人、時と場合はあっても、それはいくらビフテキが好きな人でもときには食いたくないことがあると同様で、本能として女ぎらいの男、男ぎらいの女があろうとは思えない。それでもあると主張するのは、それはふられたときか、もてないあまりのやけくそで、ちょうど儲けられない痩我慢を清貧と称するのとおんなじだ。

　こりゃ医学の問題ですらない。ちょっとしたやりよう、持ってゆきかたの問題だ。

　そこで思いあたることがある。自分と細君との関係である。――

　いまの怪奇のそもそもの発端、例の丸髷を「前世」の細君の頭に見たとき藪井氏は、文字通りかつらをかぶっているという異和感に噴き出しかけたが、さてこんど本物の丸髷を結(ゆ)った細君を見ると、決して捨てたものじゃない。そのしとやかな立居振舞と合わせて、彼は――ちょっと喪服の未亡人を見るのに似た――奇妙な欲情をおぼえた。

　そこで、久しぶりに細君を臥床に招いたのである。

「では。……」

　長襦袢一枚になった細君の伸子が――いや、お伸が、顔あからめて床のそばで、三つ指そろえてお辞儀し、

「失礼いたします」

　と、つつましやかにそっと入って来たときは、三分は可笑しさをおぼえながらも、七分は、

徳川時代も悪くはないな、と思ったくらいであったが、その後――ただ古ぼけた人形みたいに、ふんという鼻息も洩らさぬお伸の静けさを何度も経験するにつれて、三分の可笑しさが十分の物足りなさに拡大して来た。

「おい、何だかつまらないとは思わんかね」

と、異議を申し立てようにも、相手があまりに端然としていて、日常ほかにたしなめられ通しでもあり、彼自身びびっていて、どうにもならないのである。

　それはそれとして、藪井氏は前世で、最後の酔語はともあれ本気で徳川時代に生まれ変わりたいなんて思ったことはないけれど、ただ一つ、あれだけは昔のほうがよかったろうなと空想したことはある。それは、セックス面におけるお大名である。

　一夫多妻は生物学原理に叶う男性の最大願望の一つだが、現代――いや、前世においては容易に叶えられない。自分の女房一人すら養うのが精一杯で、瞬間々々の浮気はともかくとして永続出来るものではないし、二世帯も三世帯も持つなんて、或る年齢を過ぎたら、経済面を除いたっていろいろと厄介至極なものだ。天下に怖いものなしの総理大臣が、議会で追及されなくったって、暮夜ひとり思案していちばん落着かない顔になるのも、天下のことよりこの問題の始末だろう。

　ところが、徳川時代の大名たるや――領内の美女よりどり見どりで、召された女が抵抗してかみつくなどいうこともあるまいし、あらゆる点で後顧の憂いなどぜんぜんないどころか、十

人くらいは側妾を持つのが当然として家来もこれを勧めたと聞く。この面に関するかぎり、日本歴史上、大名ほど幸福な星の下に生まれた者はまたとあるまい――と、藪井氏は考えていた。それなのに、女があまり好きでない大名がいるとは。――あのここな、と藪井氏が立腹したのはこのことだ。

その原因は、おそらく――双方ともにあまり品格にこだわるからじゃなかろうか、と藪井氏は細君のことを頭に描きながら考えた。殿さまなら、いっそう甚だしいだろう。

「近う。もそっと、ひろげて苦しうないぞ」

「恐れ入りたてまつります」

それじゃあ面白いわけがない。

このことに関するかぎり、二人は獣にならなければだめだ、とくに男がライオンのごとくになることを――外見どんなにおしとやかな女も好む、このことを殿に御忠告申しあげよう、と藪井氏はうなずいて、そこで、

「それは簡単！」

と、いってのけたのだ。返事は簡単でも、近代人はかくのごとく複雑なる思索を背景とする。もっとも――実際は藪井氏は、「生前」の細君に、そんなにライオン的に臨んだことはいちどもないのである。近代人は、自分はやらなくたって理論でひとを煽動するのは最も得意とするところである。

かくて藪井氏は、堀田氏と打ち合わせた上、殿さまの前にまかり出た。

「御存じの藪井庄庵めでござりまするが、これがこのたび医術の上で開眼いたし、その説なかなか肯綮にあたるところ多く。……」

と、改めて堀田氏は紹介した。その崇敬のボーズたるや、聞きしにまさるもので、文字通りたたみにひれ伏していう。

しかたがないから藪井氏もひれ伏して、三分くらいしてからかまくびをもたげて、

――こりゃいかん。

と、思った。

上座に、京極甲斐守は坐っている。鼻の下にちょんと髭をはやして、キョトンとした顔である。頸が細長くて、襟からぬけ上ったようだ。顔色はよくない。体格も貧弱で、全身に何となく生気がない。

そして彼は、こちらに対して横を向いて坐っていて、その方向にならんだ四人の女を見つめていた。

「なかんずく、女人の御しかたについて、新知見、新工夫を開発いたしたとのことで、是非是非、殿に御披露のほどをと願ってまかり出でたる次第でござりまする」

堀田氏の言上にも知らん顔で、女たちを凝視している殿さまの眼には恐怖のひかりがあった。

女たちは——一人は老女だが、あと三人はみな若い。そしてむろん、みんな美人である。三人とも、昭和のテレビでよく見る女優や歌手にそれぞれ似ているような気がした。これがきょうお目通りの運びになった新側妾の候補者たちであろう。

「何とぞ、本日お遊びの女性（にょしょう）に、庄庵の秘伝をお試み下されたく。……」

何をしたって、こりゃだめだ、と、一目見るなり、藪井氏は匙を投げた。

女より先に食い物のほうが先決条件だ、と彼は直感した。殿さまにまず、もう少し栄養価の高いものを食わせなくっちゃあ……梅干に沢庵ばかりじゃどうしようもない。

「殿。……」

甲斐守のようすから、きょうもまた不首尾らしいと見たのであろう、堀田通算の声色（せいしょく）が改まった。

「本日、堀田は或る覚悟をきわめて出て参ったものでござりまするぞ。このところ藩中一同の要望火のごとく、今まで通算あえて抑えて来たものでござりまするが、きょうもまた例によって例のごとく殿に煮え切らぬ態（てい）あるを拝しては、もはや断の一字あるのみ、と決意せざるを得ませぬ」

彼はたたみを叩いた。妾宅や八百善でやに下がっていた堀田氏とは別人の観があるのに藪井氏は驚いた。

「恐れながらこの一事は、殿おひとりの御好悪の問題ではござりませぬ。京極藩一万二千石全

藩士の生活にかかわることでござりますぞ。左様に女色を拒否あそばし、ついに京極家にあとつぎの絶ゆるがごとき事態生ぜんか、お家は断絶、藩士はことごとく禄を失うことと相なりまする。いまどき浪人と相なれば、もはやふたたび扶持につくことはあり得ず、家族をも含めてその惨、名状しがたきものあり——」

堀田氏は声涙ともに下った。

「その惨を防ぐには、もはや今までのように甘い顔をして、ただ殿のおん雲ゆきばかりうかがってはおられませぬ。藩中の進言するがごとく、恐れながら殿を手籠めにいたしても女人と御交合のこと、お願い申しあげねば相なりませぬ。——」

「堀田!」

京極甲斐守はこちらを向き、両手をつき出し、壁をぬるような手つきをした。

「余は……おまえらの扶持を保証するための子供製造機なのか!」

恐怖と嫌悪に眼をむき出し、しぼり出した声は、どこか抑揚がおかしいが、人間としては最高度に悲痛なものであった。

「左様でござる。ただいま、お大名たるおかたの最大の義務はそのことでござる! ほかには、なんにもない。——」

堀田氏は無慈悲な、恐ろしい声を出した。そして、手を打った。

七、八人の武士が殺気に満ちて闖入（ちんにゅう）して来た。

「例の一挙、きょう決行とついに覚悟をきわめた。もったいないが、殿のおん手おん足をとって御寝所に移し参らせ、代る代る御女性(ごにょしょう)をかからせよ。ひるまず、怯(おく)れず、しゃにむに、御女性の御陰部をおしつけたてまつれ！」

堀田氏は命じた。

「京極家の興廃はこの一挙にあるぞ！　本日天気晴朗にして波高し！」

そして、猿のようにキイキイさけんで抵抗する殿さまを、侍たちが袋みたいに別室へかついでいった。ついで老女が、三人の美女をうながしてそのあとを追う。──

藪井氏などケシ飛ばされてしまった案配である。

が、堀田氏も藪井氏の存在を思い出したらしく、ふりかえって弁解するようにいった。

「前々からこの手よりほかにないとは思うておったが……きょうその運びになるとは思うておらなんだ。はからずも。……」

茫然としていた藪井氏は、われに返って口をぱくぱくさせた。

──私は知った！　殿さまが女ぎらいになったわけを。──といおうと思ったが、そのとき堀田氏がさらに恐ろしい形相をしたので、その声が出なくなった。

堀田氏は厳然といった。

「とにかく、ただいまおぬしが見たこと、口が裂けてもよそで洩らしては相ならぬぞ。もしよそで洩らしたことが明らかとなれば、おぬしの首はないものと思え。……」

七

「へへえ、逢ったのか、殿さまに」

と、いったのは平賀源内である。──京極家へいってから半月ばかり後のことであった。

「何か特別の用があったのか」

「いや、あったような、なかったような──何だか変なお目通りだった」

藪井氏は憮然たるおももちだった。

「そうだろう、あんたは、少くともこの正月から変だもの──もっとも私は、変どころじゃない、突然まともになったとよろこんでいるけれど──よく、あの堀田がつれていったものだ」

さすがの源内も、藪井氏のいうことをかんちがいしている。

──藪井氏の記憶するかぎりでは、源内と逢うのはこれで四度目である。以前にはわりに親しいほうだったそうだが、むろん藪井氏は記憶がない。とにかく源内が来たというのは藪井氏新生後間もないころで、ほんのしばらく見舞いがてらの話をしただけで、彼はすぐそそくさと立ち去ってしまった。用があるというのだ。

実際源内は忙しい男で、それっきり姿を見ないと思っていたら、秩父のほうへいっていたという。秩父の鉱山へいっていたという。それも決して景気のいい話ではなく、数年前彼は秩父のみならず秋田のほうへも出かけて金山に熱中した時期があったが、いずれもうまくゆかず、

そのあと始末に秩父へひっぱってゆかれたのだそうであった。

その他、彼のやっていることといえば、発明家、技術屋、企業家、ブローカー、博覧会屋、医者、戯作者――彼自身、「ま、古今の大山師だな」とうす笑いしたくらいで――その全貌は、彼自身より、藪井氏のほうがよく知っているだろう。

なんと、藪井氏は、べつに四回逢わなくったって、平賀源内のことをよく知っているのである。「昭和時代」に彼の伝記を二、三読んだことがあるのである。

さて、このことをどういう風に彼に告げたらよかろうか?

はじめのうちの混乱がようやく醒めて――とうてい完全に醒め切れるものではないが――藪井氏は、当然、「知っている人間」が「知らぬが仏」に対してのいらだたしさを感じ出した。

「あなたは、たしか火浣布(かかんぷ)とかいう不燃性の衣料を発明したんだってね」

「左様」

「あなたは、エレキテルとかいう摩擦起電機で人をびっくりさせたんだってね」

「左様」

大いに自分が彼を知っていることを伝えて驚かせてやろうと焦るのだが、相手は平気で澄ましている。――あたりまえだ、それは世人のだれもが知っていることなんだから。

そして、それ以上にこの平賀源内は、自分のことは天下のだれでも知っているはずだという天才特有のうぬぼれがあり、しかも一方では――おそらくそれらの発明が必ずしもうまくゆかなかったことを、彼だけは知っているのだろう――そんな話をされるのを、何となくいやがっている風でもあった。

いま知っているところではこれ以前に三回しか逢っていないのに、藪井氏は何となく源内が好きであった。天才だということを知っているせいもあるが、それよりまるでただ一人の昭和の人間と話しているような気がするからだ。それが大ゲサというなら、少くともいちばんそれにちかい。――

何はともあれ、親愛なる源内に告げなければならんことがある、と気がついて、彼が帰府したという噂を聞くと、すぐにここにやって来たのだが――さて、逢ってまず改めて親愛の情をあらわそうとして見たのだが、何だか調子が合わない。

場所は自宅近くのやはり深川の藪の内、源内の家だ。二階の書斎には、壁に、彼がかいたという西洋美人の油絵、羊を飼ってその毛で彼が織ったという国倫織(くにともおり)――国倫とは彼の名である――の衣服などがかかり、棚には、彼の発明にかかる寒暖計(タルモメートル)、世界地図を描いたいわゆる源内焼きの大皿、これまた彼の企業の製品であった革そっくりの紙製の金唐革(きんからかわ)、伽羅(きゃら)に象牙の歯をうえた菅原櫛(すがわらぐし)などがならべてある。

こういうと、いかにも絢爛としているように聞えるが、実際は何だかうら哀しくて、ふつうの家庭の飾りや道具より古ぼけてさえ見える。それはこれらの製品が、その大半が日本で最初のものであるにもかかわらず、そのすべてが企業として失敗したからにちがいない。町の話で

は彼は借金取りに追いまくられ、彼に落着きのないのはそのためだということで、これらの品物の印象はともかく、貧乏気は壁にも棚にもしみついており、この家だって、以前に住んでいた浪人が自殺し、次に住んでいた金貸しの検校が罰せられてその子が井戸に飛び込んで死んだというので、ただ同様に手にいれたという話で、そんな妖気はぞくぞくと漂っている。

藪井氏はここへも何度か来たことがあるそうだが、むろん憶えはない。

――というようなわけで、しゃべりかけて気勢をそがれ、さればとて黙っているのも変なので、つい先日、殿さまに拝謁にいったという話をしたわけである。

「滑稽なほど威張ってたろう」

と、源内が冷笑の眼でいう。

「いや、そうでもなかった。……お留守居役の堀田さんのほうが威張ってたようだった」

「つまり、堀田はあんたに威張り、殿さまは堀田に威張る。……馬鹿が、威張るだけの理由がないのに、ばかばかしいほどに威張る。――逆に堀田が殿さまの前に出ると、馬鹿みたいにへえつくばる。この世にどうしてこんなばかげた慣習が出来たかとわしは考えたんだが」

と、源内は早呑み込みのまましゃべり出した。

「大名が将軍にへえつくばるのは、家老に威張りたいためさ。おれだってあんな馬鹿にあんな風にへえつくばるんだから、お前たちも、たとえ馬鹿でもおれにあんな風にへえつくばれというんだな。そして侍は同じように家老にへえつくばり、百姓町人に威張り返る。つまり現在の

階級性を維持したいという特権階級の馬鹿なりにしぼり出した示威運動の智慧だな」

源内の罵倒が大変なことだと気がついたのはあとのことで、そのときは奇抜ではあるにしても当り前の見解だと聞いていた。驚いたのは、その調子のはげしさだ。

「あんたは……侍じゃなかったっけ？」

「浪人だよ」

「そうそう浪人だったね。しかし、あんたほどの人材をその年になるまでどこも召抱えないなんて変な話だな」

「高松藩お構い、ということになってるからさ」

「高松藩お構い――というと？」

「若いころ高松藩からね、医術修業という名目で三人扶持をいただいていたのさ」

「三人扶持――というと？」

「それも忘れたのか。一日あたり玄米一升五合だ。その薄禄で遠慮会釈もなく雑用にこきつかう。全然勉強など出来ないから、いっそおいとまを頂戴したいと願い出たら、藩の重役に意地のわるいやつがいて、こいつのかんに障(さわ)ったのだろう、よかろう、ただし藩お構いにする――と来た。それをやられると、高松藩以外のどこの藩でももう仕官は出来ないのさ。それから、かれこれ二十年。――」

ずいぶんむちゃな人権無視の法があったもんだ――と藪井氏は長嘆して源内を見つめたが、

よく考えて見ると、昭和時代にもかつて映画界にそんな話があったような気がする。いや、かたちはちがうけれど、ほかの世界にもそんな例はいっぱいあるような気がする。

「思えば、わしの一生の無意味な苦しみの根源は――特権階級がその特権を維持するための一つの法――この制度であったかも知れんな」

「そういわれて見ると、大名制度もよろしくないな。大名街を見たときは、徳川時代もそう捨てたものじゃないと思ったんだが……」

こういういいかたには、源内はやはりちらっちらっと変な顔をするが、もう何もいわない。

「それにまた大名もラクじゃないとも感じたんだが。……」

「ラクじゃないのは馬鹿だからだ。馬鹿が威張ろうとすればラクじゃないのは当り前だ」

と、源内は一刀のもとに裁断する。つづいて彼は痛嘆した。

「長崎へいってオランダの甲比丹(カピタン)に聞いた話だが、あちらにはわたしみたいな人間がウジャウジャおって、大事にされて、たっぷり金をもらって、毎年毎年新しい道具や機械を作り出しておるそうじゃ。それなのに日本では、このわしが五十過ぎて、まだ米代にも困って駈けずりまわっておるとは？」

彼は落涙した。一見、冷淡な顔をしているようで、なかなか感情家だ。

「わしのために泣くんじゃない。日本のために泣くんだ。日本人の愚かしさに対して泣くんだ！」

藪井氏もあやうくもらい泣きしかけた。

実際考えて見ると、田沼時代にこんな人物が突然変異のごとく出現したのは奇蹟だ。このあとつづく松平定信がしめあげた寛政、国定忠治などがあばれまわった天保、いや黒船で右往左往し、尊皇攘夷のテロの嵐が吹きまくった幕末なんかより、もっとこの時代のほうが新しいように思われる。

「それで、あんたの才能を生かそうという資本家はいないのかね？」

「ただ一人ある」

源内はふいに眼をかがやかせた。

「田沼さまだ」

「おう、田沼。――」

藪井氏は、いつぞや父がにがにがしげに「何かといえば田沼を持ち出す」とつぶやいたことを思い出したのみならず、源内の伝記に、彼がしきりと田沼にとりいろうと努めたとあったことを思い出した。なんだ、いるじゃないか。

しかしそれより彼は、このとき先日の八百善のことを強く思い出した。

「田沼といえば、こないだ八百善で、田沼……さまの公用人三浦……さまを囲む会があって、僕も堀田……さまにつれてゆかれたんだが」

「ほほう、あんたが八百善で、三浦さまと。――」

源内は羨望と好奇を満面に浮かべた。よく表情の変わる男である。

「なんでまたあんたを？　それで、どうだった？」

藪井氏は、これまた何のためにつれてゆかれたかわからないが、とにかく八百善の料理のウマかったことや、お留守居役の洗練された社交ぶりや、二人の刺客とのチャンバラについて感じいったことを述べた。

「ふうん、あんたをつれていったのは、堀田からすれば三浦さまへのお世辞の道具に使うつもりだったのだな」

そして源内は、なおそれ以上いろいろと詳しく聞いた。源内はよほどこんなことに興味があるらしかった。

で、何気なく藪井氏が、そのとき途中まで松平上総介という人も同座していたというと、

「それは大変だ！」

と、源内は愕然としたようであった。

「それは危険だ。田沼さまにお知らせせねば――」

「だって、そこには田沼……さまの公用人がいたのだぜ」

「ああ、そうか」

源内はあわてている。そして、三浦が語ったという一橋家と島津家の縁組その他の談話を問いただすと、

「では三浦さまは、わざとそのかたのお耳にいれようとしたのだな。いわばドスをきかせたのじゃ。しかし、そんなことが通じる相手か。逆効果じゃ。若いが、恐ろしい人物だ。――ひょっとすると、そのあとに現われたという刺客もその人物の手から出たのじゃないか……」

「えっ、まさか？　あの人は絶えずニコニコ笑っていたぜ。――」

「うん、まさかあのかたが、そんな愚かなまねはされまい。何しろ若いくせに、そして大反動のくせに、かつ徳川御一門のくせに、何くわぬ顔をして田沼家に賄賂(わいろ)を持って来るお大名だからな。……」

八

「おい、あの松平上総介って人はどういう人なのだ、え？」

「あれは田安中納言さまの若君で、いまは奥州白河十一万石のおん曹子。……」

「な、なに、それなら松平定信じゃないか！」

藪井氏は思わず大声を張りあげた。

松平越中守定信といえば、田沼を失脚させたのち、弛緩し切った徳川の治政をまた絞めあげたいわゆる寛政の改革をやった人物のはずだ。……

「松平定信……いくら何でも呼びすてはひどいな。しかし、なんでそんなに驚く？」

「それは、田沼……さまを叩きつける人だ」

妙な顔をしている源内にかまわず、
「ぼくはいまの未来を知っている。――」
妙な顔をしている源内にかまわず、
「平賀さん、あんたも、人を殺して牢にいれられて、そこで死ぬよ。――」
と、いった。――彼が源内に是非知らせなければならないと思っていたのはこのことであった。
「なんだって？　わしが人を殺す？」
源内はすっとんきょうな声をあげて、それから噴き出した。
「何かといえば人斬り包丁を持ち出すやつらを、腹の底から軽蔑しているこのわしが？　ぷっ、おまえさんが妙なことをいい出すのはきょうがはじめてじゃないが。……」
さすがにちょっとまじめな顔になった。
「しかし、聞かせてよ、あの松平上総介さまがどういう風に田沼さまをやっつけるのか。またこのわしが、何が原因で、だれを殺すのか。……」
聞かれて、藪井氏はつまった。
たしかに史書には、松平越中守――上総介の後年の名――が、田沼の悪政を改めたと書いてあったが、彼がどれほど田沼打倒のために動いたかはよくわからない。
それからまた平賀源内の殺人と入牢も何が原因であったか、いろいろな説があったようで、

結局これまたわからないとしかいいようがない。
「もういちど、よく考えてからということにしよう」
藪井氏はこう返答しないわけにはゆかなかった。竜頭蛇尾の感はまぬがれない。
それでもあとになって、史書とか史伝とかについていろいろ頭をひねったのだが、そこで考えたことの一つは、史書や史伝があまりあてにはならないということである。田沼失脚の段取りとか源内牢死の顚末とか、あいまい模糊としているものはそれなりにまだいいほうで、いかにもほんとうらしく書いてあるのに、故意か、無能力のせいか、嘘っぱちのことが少くない。中でも伝記――とくに日本人の伝記はそれが甚だしい。ほんとうのことを調べる気になれば或る程度決して不可能ではない同時代人が書いた昭和期の軍人とか政治家とか実業家のものとなると、いったい何のためにこんな伝記を書いたのか、まったく無意味にさえ思われる紋切型の文字の羅列だ。書かれる当人や遺族が、その暗い部分を書かれるのをいやがり、ほめたてられることばかりを好み、御用伝記作家がそれに媚びるためで、その結果の彰徳表は本人にはうれしいだろうが――しかしその本人も、自分が死んで死が生のすべてを絶ったことを確認したあとでこれを再読することが出来たら、そのときは腹をかかえて笑うだろうと思う。
平賀源内が、彼についての知識を披露しても案外驚かなかったのは、自分のことはだれでも知っているはずだという彼のうぬぼれ以外に、ひょっとするとその知識に――つまり後年の彼の伝記にまちがったところがあって、それで彼は驚かなかったのかも知れない。

で、そのときも、藪井氏の不吉な予言を源内は結局一笑して、

「それより、あんたはさっき大名屋敷を見るとこの世も捨てたものじゃないといったね。しかし、では、長屋はどうだ？」

と、いった。

「長屋？　あの落語に出て来る熊さん八さんの長屋か。それはまだ見たことがない――」

と、首をふる藪井氏に、源内はまた妙な表情をしたが、

「それじゃ、そこへ案内しよう。いやなに、もうそろそろ借金取りが来る時刻でな、夜までわしは姿をくらまさなければならん。で、その避難ついでに寄ってみよう」

と、そわそわと立ちあがった。

そこで藪井氏は、源内といっしょに、近くの長屋を見ることになった。――外はさみだれのふる日だ。

「江戸城の二十万坪は別格として、大名という大名が何万坪という上屋敷、それに何千坪という中屋敷、下屋敷、二百石くらいの小旗本でもきまりとして六百坪くらいの屋敷をもらっているというのに――まあ、見なさい」

二人は、そこを歩いた。

路地の両側はまさしく長屋だ。路地の幅は三尺、どぶ板が渡してあるが、その上にはなめくじが這い、その下には決して雨のせいではない臭い匂いのする水がたまっている。

長屋は――何となく概念的に知ってはいたが、江戸時代のそれがこんなに汚なくて、こんなに狭いものとは思わなかった。間口が九尺、奥行が二間、いわゆる九尺二間の棟割長屋というやつで、一軒あたり中は三坪、つまり六畳分しかないわけだ。

雨がふっているのに、戸をあけた家が多かったが、暗い中に――窓というものが一切ないらしい――どこでも女の尻や裸の子供が見え、どこからもどなり声、泣き声がしていた。あまり香ばしいとはいえない、ものを煮る匂いもした。

「これは貧民窟だな」

「貧民窟……にはちがいないが、これが江戸のふつうのいわゆる裏店（うらだな）さ。庶民の大半はこういう暮しをしている。この半分くらいの長屋もたんとある。それでも曲りなりにも台所や押入は作らなくちゃならないから、人間は折り重なって寝ているね」

「便所は？」

「雪隠（せっちん）はあそこさ」

源内があごをしゃくった路地のゆくてには掘立小屋が一つある。共同便所らしいが、戸もなくて、中でしゃがんでいる老婆が見えた。

昭和の東京は人口一千万、２ＬＤＫだの３ＬＤＫだのいう団地を、人によっては新しいスラムだと自嘲する声もあるくらいだが、これはそれどころじゃない、安アパートや間借りになお劣る。土地だけは、江戸時代は少しは手広（てびろ）に住んでいたと思っていたら。――

「これは不思議だ。土地はいくらでもあるだろうに」

まったく奇怪事にちがいない。――藪井氏の家だって昭和時代のものよりむしろ手狭なくらいであったし、江戸時代に生まれ変って案外悪くないと思うこともないではなかったが、予想外に悪かったのはこの住宅事情だ。

そういえば、一世を風靡した大流行作家滝沢馬琴が――これより少しあとの時代になるが――最盛期に住んでいた家もわずかに十六坪で、彼自身の書斎、書庫も四畳半と三畳に過ぎなかったと馬琴の日記で読んで、意外に思ったことがある。

「いま大名や侍が広いところに住んでるのは聞いたが、それにしてもだ、べつに会社や工場が――つまり大産業があるわけじゃなし」

「それなんだ。庶民の働く産業がないせいなんだ。収入がなければ、例え土地があったとしても買うことも住むことも出来ん」

源内は、天才的に藪井氏のいったことを理解した。

「産業がないのには、大まかにいって二つの理由がある。一つは産業を起す才能がないことだ。あるいは、その才能があってもそれを使う気を起さないことだ」

自分のことをいっているのだろう。源内の声には憤りのひびきがあった。

「もう一つは、それにつながることだが、新産業が起ったら、支配階級が困る――困るということを、馬鹿なりに本能的に知っているからだよ」

「なぜ困る?」

「いまの体制は士農工商の鉄の階段から出来上っている。ここに新しい産業が起ったら、その階段が炉の中の鉄みたいにとろけることをこわがっているんだ。百姓が土地から米をとる。その米をとりあげて三百の大名が――上に将軍、下に侍が生活している。その体制の原理に、別の、自分たちの手綱をとる自信のない新現象が入り込んじゃお手あげだと、そればかりこわがっているんだ」

藪井氏は感心して源内を見つめた。平賀源内は想像通りの進歩主義者であった。

「その犠牲者は庶民だが、庶民はそのことを知らない。このわしも犠牲者だが、わしはそのことを知っている」

番傘の下で、源内の眼が異様にかがやき出した。

「わしの希望の星が一つある。いや、七つ星というか?」

「七つ星?」

「田沼さまの定紋だ。これこそ天下にただ一人の世直し大明神。――」

路地をひき返して往来に出ると、すぐそこを歩いている陣笠に合羽の侍があった。

ゆき過ぎかけて、源内はあわててお辞儀した。

彼にはふさわしくない卑屈なお辞儀を意外に思い――十数歩いってから源内を見ると、彼はひどくおびえた表情をしていた。

「いまの人は、歩いていたのじゃない、さっきの路地の入口から急に歩き出した気配であったな」

「どうしたんだ」

「あれは八丁堀の隠密同心だ」

藪井氏はふりむいた。しかし、さみだれの中に、いまの侍の影はもう見えなかった。

「聞かれたかも知れない。いまのわしのおしゃべりを――ひょっとしたら、はじめから尾けられていたのかも知れない」

「なぜ？」

「わしは、町奉行所から眼をつけられているからな」

「何か――やったのかね？」

「わしのやったことは天下の人はみんな知ってるさ。そうじゃなくって、わしのしゃべることに眼をつけられているようなんだ。いまの奉行は、田沼さまもはばかっていなさるほどの頑固な反動だから」

「何という奉行だね？」

「曲淵甲斐守さま。――昔、田安中納言さまにひいきにされたかたでね、だから田安中納言さまの御子息たる松平上総介さまとも糸がつながっておるとわしは見ておる」

そういうことを上の空に聞いているほど、藪井氏は別のことに心を奪われていた。いま、ちらっと見ただけだが、陣笠の同心の顔に記憶があるのだ。鼻のわきに大きなほくろのある馬面――あれはだれだっけ？

「あっ、あれは。――」

と、彼は棒立ちになった。

「八百善で……刺客を殴り伏せた……八百善の板前の顔だ！」

「なんだって……八丁堀が、八百善の板前に――それはどういうことだ、おい、聞かせてくれ、庄庵……」

いよいよ顔色を変えて聞く源内の声もうつろなほど、また藪井氏はほかに心を奪われている。あの顔に、もう一つ記憶があるのだ。あれは、だれだっけ？

九

梅雨があけたころ、源内が、

「庄庵、わしは近いうち田沼さまのところへゆくことになってるんだが、おぬしもいっしょにゆかないか？」

と、誘った。

「御多忙でなかなか私などお目にかかる機会がないのだが、やっと道が通じて、きょうごろ御都合がいいとのことだ」

何かというと田沼を持ち出す源内なので、ちょっと意外な気がしたが、しかし現実に羽振りあまりよろしからざる源内を見ていると、まあこのあたりが現実だろうと思う。

藪井氏は承諾した。

田沼時代に生まれ変って、田沼に逢わないという法はない。

「そこでな、おぬしの例の未来話をしてもらいたいのだが」

「未来話？　しかし、あれはいちど三浦さまに話したが、ただばかばかしいといった顔をしただけで、何の反応もなかったぜ」

「いや、田沼さまを倒すのは、松平上総介さまだろうということさ」

「うん、それはまちがいない。松平上総介が松平定信ならね」

藪井氏は大地を打つ槌みたいにうなずいた。

「そういうことに、歴史はなっとるのだ」

「そうはっきりいわれても困るが、もう一つ、例の八百善の板前と八丁堀同心の話もしてもらいたい。なに、わしが横腹をこづいたらしゃべり出して、また横腹をこづいたら黙ってくれ。あとはわしがしゃべる」

そこで、田沼邸へゆくことになったわけだが、さて？　と、藪井氏は考えた。自分は田沼意次についてどういうことを知っているのだろう？

何でももとは無名の家に生まれ小姓として勤めていたのが、その後栄進を重ねて老中にまで

なり、江戸の歴史に「田沼時代」と呼ばれるほどの世相を作った。世には淫靡（いんび）の風が吹き、侍は堕落し、本人は賄賂の総本山でぜいたく驕慢のかぎりを尽したが、その果てに息子を殿中で殺され、それをさかいに没落したという人物だ。まあ徳川時代の奸物を十人あげろといわれたら、充分その中に入る資格はあるだろう。

出かけたのは、朝の早い夏もまだしらじら明けのころであった。

「これでも御門前に待つことになるだろう」

と、ならんだ町駕籠から源内が話しかけた。

「なにしろ――いつぞや田安中納言さまが、田沼さまのお屋敷が大き過ぎる、成上り者の分際として少し控えたほうがよかろうにという意味のことを、にがにがしげに側近にもらされたのを田沼さまが聞かれて、毎日面会に来る客が数百人もあるのに、小さな屋敷では駕籠の置場所もなくて、かえって近所に迷惑だろう、と笑われたという話があるくらいだから。もっともそれに対して中納言さまは、なんのために毎日そんなに客が来るような破目にしたのじゃ、と苦笑されたそうだがね」

田沼意次の屋敷は、神田橋御門の外にあった。

いって見て、藪井氏は眼をまるくした。まだ朝の日がさしはじめたころなのに、源内の話した通り、もう門の内外におびただしい駕籠や馬がびっしりだ。「……いよいよひどくなったな」と、源内さえも驚いたようであった。

一時間ほど待って、五、六十人は入れようかと思われる広い侍部屋に通された。隣りの控えの間には、置いた刀が波のように、そして大小形状さまざまな包みが山のように見える。それぞれ包みを抱えて入って来た客は、これを見てと胸をつかれた表情になり、やがて沈痛の顔色でそこに控える。

「進物もこう大っぴらになるとうれしいな。……その栄冠を競うこと、ま、一種の物産会だな」

と、源内がささやいた。物産会とは、彼がよくやったという博覧会のことらしい。藪井氏の知っている言葉だと、コンクールといったほうが適当かも知れない。

「以前にだれか、大きな総桐の箱に京人形仕立ての美人を贈ったという話もある。田沼さまは、賄賂を芸術の域に高めて愉しんでおられるふしも見える。そのうち日本人の好きな、道、賄道なんてものが出来るかも知れん」

皮肉だが、怒っているようではない。ゆらりと長いあごを庭にしゃくった。

「あの池を掘られての、なるべく早く鯉が欲しいの、とつぶやいて田沼さまが、登城なされて御帰邸になったら、もう何十両か何百両かの進物の鯉が池から溢れんばかりに泳いでいたという」

藪井氏も案外驚かない。昭和時代の与党の政治家だって、たいてい池を掘って鯉を飼っているだろうが、その鯉の素性はまずたいていこのたぐいのものだろう。「政治資金」が泳いでい

るわけだ。

「しかし、いったい何が目的で？」

「ま、陳情、請託、謝礼、それにいんぎんの意を表そうとするものが大半だろうな。いままでの老中だって……いや、江戸城そのものの生活が献上で成り立っているから、何も田沼さまにはじまったことじゃないが、とくに田沼政権になってから、今までだれもやらなかった大規模な開墾、埋立、鉱山や運河の開発、幕府の専売事業の拡大や問屋の指定などぐっとふえたし。……」

源内はにやにやした。

「税の取立てなど智謀湧くがごとしだ。酒、油、酢、醤油などいう嗜好品からはうんと冥加金をとりあげる代りに、海産物には運上を免除して増産をはかる。面白いのは、吉原以外の隠し売女すなわち岡場所にも上納会所を置いて、客から遠慮なく税金を召しあげられるようになったことだ。……働く者から税金を取るより、その分だけこういう分野から取り立てるというのは合理的でよろしいな」

「昭和時代も、ホステスから税金をとるようになったが」

と、藪井氏はいった。

「しかし、どうも正業におけるほど徹底しないようだ。とくに政治家のゆく料亭などは。……それに、東京……いや、江戸で競馬をやって儲けていたのを、都……町奉行さまがひどくいや

がられてやめられたということもあった。それにくらべて売春街にお上(かみ)の税金取立所をおくというのはえらいな」

「そうなんだ。とにかく田沼さまは偽善的じゃないよ」

むろん、ささやきの会話である。まわりにも同じトーンのささやきが、波のようにながれている。——源内に怒りの調子のないことはいまいったが、ちょっと痛嘆のひびきがあった。

「みんな、結局献上の何倍かのものをお上からひき出そうとして献上しておるのだ。わしはいま金目のものは献上出来んが、ほんの虫ケラの涙ほどの御予算を廻していただければ、逆に何百倍かの値打ちのものをお国にお返し出来るんだが。——」

といった口の下から、彼はまた眼をかがやかせた。

「いや、田沼さまはよくわかっておられる。あのかたは新しいものがお好きだから。——幕閣の御老中の中で、オランダ渡りの晴雨計(ウエールガラス)、観白玉(ゾンガラス)、暗室写真鏡(ドンクルカームル)など、それらを御覧になってあれほど興味を示されたおかたはない。原理を説明すればよくおわかりになるのだから大したものだ。経済上の新工夫でも、ただ金儲けのためじゃなく、その根本精神のなせるわざとわしは見ておる。……」

一時間ほどたって、彼らは招かれた。二十人あまりが一組だ。——それまでにも同じ人数くらいが、十分おきくらいに呼び出されていたのである。

それでいよいよ会見か、というと、またその前段階だということが、いって見てわかった。

やや小さいが、さらに立派な座敷で、ここからは奇岩を配置した庭が見える。この岩も田沼の反偽善性の証拠物件だろう。

ここには例の公用人の三浦がいて、藪井氏を見て、はてなというような変な顔をした。それから、思い出した風で、

「源内。……その男にまた例の夢物語をしゃべらせにつれて来たか。あんな他愛もない話、殿にお聞かせしてもしようがないぞ」

と、いった。

源内は膝でいざっていって、三浦の耳に何やらささやいた。三浦は動顛(どうてん)した表情になり、うなずき、その後は何もいわなかった。

源内は戻って来て、しばらくしてから、笑いをふくんだ低声で藪井氏にいった。

「八丁堀と八百善の件をいった。……それから、例の騒ぎのときの三浦さまをおぬしが見ておったということもな」

その前に三浦はしゃべっている。さっきからの話のつづきらしい。

あとで考えると、客の一人が、先年の貨幣改鋳で金(かね)の値打ちが下がり、物の値段があがって世間に非難の声がある、といい出したのに対する弁明であったようだ。

「朝三暮四(ちょうさんぼし)という諺がある。御存じかな」

人をくった顔は、とてもあのときの腰をぬかした男のようではない。

「猿に木の実を、朝三つ、暮に四つやろうとしたら猿は大いに怒った。そこで朝四つ、暮に三つやることにしたら、猿は大いによろこんだという。政治の妙諦（みょうてい）をこれほど辛辣に示した例えはない。まったくこの通りで、人間、いつまでも収入（みいり）が同じだと不満にたえんが、年とともにそれがふえれば元気づく。なに、実際は物の値段があがっておるからおんなじことなのじゃが。……だから、収入も物価もあがることは、むしろ猿にひとしい民の怒りをそらせ、きいきいと歯をむいてよろこばせる最善の法だとわしは思うんじゃが」

ふっと、藪井氏は昭和時代の政府のインフレ推進政策を思い出した。

みな、ゲラゲラと笑った。三浦も得意そうに笑ったが、いまの質問者の気配を見て、ちょっとまじめな顔に戻って、

「物が高うなって、庶民が悩んでおるというのはまことかな？　それはごく一部の、働きのない惰民どもの泣きごとに過ぎんのじゃないか？」

と、疑わしそうにいった。

「公平にみて、わが殿御登場以来、景気はいい」

藪井氏の頭に、意味もなく先日の八百善の御馳走を無造作につっついていた三浦の姿が流れた。

「米があがれば百姓がよろこぶ、米を扶持（ふち）として暮しておる侍もよろこぶ。田沼は町人ばかりひいきにするという評判じゃが、あながちそうでもないことはこれでもわかるじゃないか？」

が、相手がますます陰鬱な顔をしてにらんでいるので、三浦はついに本音を吐いた。

「実は銭の値打ちを下げたのは――二百年ちかい所帯の無理勘定がたたって、幕府が窮乏して来たからじゃよ。見せかけにしろ、今までと同じやりくりをしてゆくためには、額面だけは同じ銭を大量に作るより手はないのじゃよ。ま、正直なところをいって、以前と同じ値打ちのない一両を同じ一両だといっておしつけるのだから、ていのいいサギじゃが、しかしだれがやってもいまのところこれしか手はない。当事者の苦衷を察してくれ、のう、佐野どの？」

藪井氏はその男を見て、首をかしげた。

年は二十五くらいだろう。どうやら旗本らしい感じだが、いかにも貧乏たらしくて、はなやかなまわりの客の中に一個の異物のように見える。どうしてこんな男が、ここに混り込んだのだろう？　それだけに、さすが円転滑脱の三浦をへどもどさせるような蕭殺（しょうさつ）の気がその若者から立ちのぼっていた。

もっとも、自分がここにいるのだってそれ以上に異物的だ。

それにしても「朝三暮四が政治の秘術だ」とはうまいことをいう。どうやらインフレ政策のことをいっているらしいが、昭和の政府だって同じ手を――三浦はサギだと告白したが――さらに臆面もなく使っていたし、国税を減税するが地方税を増税するといったたぐいの、頭のてっぺんを撫でながら後頭部をなぐりつけるような大秘術に大わらわであった。

木の実を四つもらって、歯をむいてうれしがっている一億匹の猿の幻影を頭にえがいている

と、小姓が入って来た。うなずいて、三浦がいった。
「さっき平賀といっしょに来られた組のうち、右の方へ坐っているかたがた、さあどうぞ」
藪井氏をふくむ十人あまりが案内された。佐野とかいう旗本もその中に入っていた。
こんどこそいよいよほんものの謁見であった。

十

広いが、静雅な座敷に、田沼意次とその子の意知が坐り、その前に七、八人が——前の面会者たちであろう——残っていた。
新しく入っていった者たちは、平蜘蛛(ひらぐも)みたいにお辞儀をした。藪井氏はちょっと遅れたので、それが見えたのだが、ただ一人、例の旗本だけは何となく素直でないお辞儀のしかたをしたようである。
「おう、佐野、久しぶりじゃの、よう参った」
と、意次はまず愛想よく声をかけた。
「その後、国のほうへは帰ったかな。あちらの話を聞きたいが」
これに対して佐野は聴取不能な言葉を、口の中で重くつぶやいただけであった。
意次はこだわらない。次々に、顔を知っている者に、気軽にねぎらいの言葉をかける。源内に対しても、「やあ源内か、またなんぞ面白い思いつきを持って来たか」といった。——

源内に紹介されるまでもなく、藪井氏には、意次と意知はすぐにわかった。しかし、ちょっと意外でもあった。彼は何となく、田沼意次は強欲奸悪を絵にしたような人物像か、あるいは、たっぷりふとって、享楽的な、むしろ公用人の三浦にちかい人相を脳裡に描いていたのである。
しかし、現実の意次は、痩せがたで、知的で、洗練された紳士か学者のような風貌の持主であった。決して陰性ではなく、どこかそれに大阪商人みたいな快活さが加味されている。そして、年こそ六十前後だが、日本人には珍しいほどの美男だ。
彼がやりてであったことは疑いないが、しかしその異例の出世にはこの美男ぶりが大いに役にたったこともまちがいない。彼ばかりではなく、彼によく似た存在であった元禄時代の柳沢吉保(よしやす)にしても、絵島生島事件当時の間部詮房(まなべあきふさ)にしても、田沼よりあとの阿部正弘にしても、それらが実力者になったのには、その美男ぶりが少なからず影響している。それはつまり大奥からの声援があったからで、そこに住む三千の女たちは、昭和時代の選挙権を持つ女性に匹敵する政治力を行使していたのである。逆にいえば昭和時代の女性票は、徳川期の大奥票に似たところがないでもない。
これにくらべて、息子の若年寄山城守意知も父の血を伝えてやはり美男だが、三十半ばの若さだけにすこぶる肉欲的な感じもあり、かつ覇気がその長くふさふさとのばしたもみあげにそよいでいる。
「……さっきの話じゃがな、わしの情報ではオロシヤはそう心配することはないと思う」

と、意次はしゃべり出した。残っていた前の組の人々に向ってである。

「あちらはエトロフや蝦夷の土地が欲しいというより、いまのところは交易を求めているのではないかと思われる。――だから、わしはゆくゆくそれに応じてやってもいいと思う」

いいまわしは慎重で、語感は快活であったが、いっていることは大胆不敵であった。これに対しておそるおそる「――では、鎖国を解かれるので？」という意味のことをきいた者がある。

意次はこんなことをいった。

「とはいえ、夷狄のことは遅かれ早かれお国にとって最大の問題となるだろう。そのときまずだれもが考えるのは武力による防衛だろうが、自分の考えるところでは、それより大事なのは、日本の富と知力だ。いや、富と知力あってこそものの役に立つ武力が生じる。その富と知力を養うには、甚だ矛盾しているようだが、夷狄と交易し、学ぶべきところは学ばねばならん。自分の見るところでは、日本はとても一等国どころではない」

むろん、この通りにいったのではない。

ニコニコして、ちょうど彼の公用人三浦庄二と同じように――というより、三浦こそ主人に感化されたのであろう、機智と諧謔を混え、それにどこかすっとぼけたような味があって、みなを笑わせつつ――その話の根幹をとり出すと、実に驚くべき右のような意見を述べたのであった。

そして、

「近江屋、伊勢屋、富と知力ということになると、侍たちよりおまえたち商人の肩にこれからの日本はかかっておるものと思っていてくれ」

どうやら一座に、札差か商人も混っていたらしい。そう笑いながらいうと、

「わしはこれからお城に参らねばならん。あとは意知と、みな心おきなく話していってくれ」

軽やかに起って出ていった。

藪井氏は、非常に感心した。そのときは田沼の話術に魅惑されて、その内容に驚嘆したのはあとのことだ。話術――ではない。この田沼という人物そのものが実に魅力的であった。ほんの短い会見であったが、さすがに一介の小姓から一国の首相になるのは、ただ幸運や世渡り術やもののはずみではない。それだけのことはあると思った。

源内よりもまだ昭和人的である。……昭和人といっても、藪井氏の知っている昭和の首相の中で、こんなあかぬけした感じの人はいないようだ。強いていえば……外形が似ても似つかないので甚だ突飛だが、いちばん吉田茂に似たところがあると思った。吉田の剛腹、貴族性に対して、これは知性的で開放的で、それも正反対にちがいないが、ウイットの洒脱さと自由自在と――それから何となく人をくった感じが似ている。ただし、これとてほかの野暮ったい首相にくらべれば、まだしもこんな共通点があるというまでの話である。それより藪井氏は、洗練された大外交官を見るような気がした。

その源内は、消えた意次を、口をあけて見送っていた。あきらかに失望の態に見えた。彼は

藪井氏を手品のたねにして、田沼に何かねだろうとしていたのだろうが、あっというまにその機会を逃がしてしまったのである。

「いまの世の武士の頽廃の根源はやはりここであった！」

突然さけび出したのは佐野であった。

「武士よりも町人を重しとするとは——武士よりも町人を買うとは！」

口から泡を吹き、怒りのためにあとの言葉も出ないありさまを、田沼山城守は軽蔑的な笑みを浮かべて眺めた。

「武士の頽廃はいまはじまったことではない。ずっと以前から、二百年の泰平の間に武士はもう存在意義を失っている。存在意義のないものは頽廃せざるを得ない」

と、彼は肉感的なよく透る声でいった。

「少なくとも、これからは町人のほうに存在意義がある」

「ただ、この世を色と欲の濁った沼と変えて——」

佐野はまたあえぐようにいった。

「われわれはこの世を、以前のようなあらゆる意味においての貧寒さから脱却させようと苦心しているのだ。武士も町人もただ倹約倹約と縛りつけられている状態からは何も生まれない」

意知はやり返した。

「日本を貧乏から救って富と知力の国と変えるのはただ新産業の開発と育成あるのみだ。その

ためには、色と欲を抑えてはならん。あらゆるものは、色と欲から生まれる。われわれはそう信じて努力しておる！」

「て、天罰が下り申すぞ」

佐野はしゃっくりのようにさけんだ。

「天罰とは、暗殺のことか。——いつぞや三浦が襲われたというが——そういうおどしにわれわれは屈しない」

意知は傲然といった。

「いっておくが、佐野、われわれは、われわれの政治に、われわれなりのいのちをかけておる」

そして彼は小姓をふり返った。

「次の客と変えろ」

——十数分後、藪井氏は門の内外の依然たる雑踏の中でうろうろしていた。動顛しつつ、屋敷を出て来るあいだに、源内の姿を見失ってしまったのだ。

と、その人混みの中を、例の佐野が肩で人をつき飛ばさんばかりにして向うへ歩いてゆくのが見えた。それを見送っているうちに、藪井氏はやっと或ることを思い出して、はっとした。

「おい」

肩を叩かれて、ふり返ると、源内が立っている。手に、来るときには持っていなかった包みを持っていた。

「田沼さまは、やはり大したおかただなあ。いや、大殿のほうだがね、いまお小姓に呼びとめられて、殿が御登城の前に、源内にこれをやれと申してゆかれたが、と頂戴したのがこれさ」

源内は手の包みを胸に捧げて恐悦した。

「これだけ人が集まる中に、やはりわしのことを忘れてはおられなんだ」

「何だ、それは」

「砂糖だということだが——この重さからして、はてな」

——これは家に帰ってからの話になるが、その砂糖折の中には百両も入っていたそうであった。

「それより、あそこをあの怒り屋のお侍がゆくが、あれはたしか佐野善左衛門という人だろう？」

「おや、なぜおぬし、名まで知っておる？」

「あの人は、そのうち、田沼……さまの若殿のほう、山城守意知さまをほんとうに斬るぞ」

「——えっ？」

「いま思い出したんだ。歴史がそうなっとるんだ」

「また、それか」

源内はウンザリした顔になったが、しかしすぐにまたまじめな表情に戻って、

「いや、あの人ならやりかねない。わしも以前、オランダまがいの器械展示会をひらいたらあばれ込まれて、いのちがけでおひきとり願ったことがある」

と、いった。

「いまお小姓に、どうしてあんな人を入れたんだと聞いたら、大殿さまがべつにかまわぬと申されたというので……何でも田沼さまの御先祖が、佐野善左衛門の故郷の下野（しもつけ）だという縁なんだそうだ。今じゃ一方は飛ぶ鳥落す御老中、一方は五百石の旗本だが……ちょっと、きちがいじみておる」

源内は急にあわてて出した。

「それに、聞いたところによると、やっとうのほうは新陰流の達人だそうだ。まったくきちがいに刃物とはこのことだ。ああいうのが思いつめるとこわい。ほんとに何をやり出すかわからない」

彼は砂糖折をもういちど眼の高さに捧げてから、

「ちょっと、あの人のゆくえを追ってみよう」

と、いい出した。あとで思うと源内は、その砂糖折の中身を或る程度看破していて、それで田沼に対する忠誠心をいよいよかきたてたものとみえる。

「どこへ？」

「家へ帰るのかも知れないが……おぬしにそういわれてみると、何やら気にかかる。尾けてみよう」

こうして二人は、神田橋御門からぶらぶらと佐野善左衛門を尾行したのである。佐野のいったさきは、八丁堀であった。

もっとも例の同心の組屋敷ではない。同じ八丁堀だが、奥州白河藩松平越中守の江戸屋敷に入っていったのだ。

上総介はまだ越中守にならず、この越中守は彼の養父にあたるが、上総介がいまここに住んでいることにまちがいはない。――二人は遠くから、いま佐野善左衛門の入っていったその門を眺めて茫然とした。

「まさかと思っていたが……やはり、糸はつながっておったか」

源内も衝撃を受けたようだ。

「してみると、いつかの八百善の刺客の出どこも？　いちどは、お若いが深謀遠慮のおかたと聞いておる上総介さまが、まさかとわしも否定したが、田沼さまへのお憎しみは、それほどあのかたを血迷わせていると見える。……」

「やはり、主義の相違かな」

「いや、私怨も大いにあると見る。将軍さまに御世子がないので、一橋豊千代君があとをつがれることになったが、一橋さまより田安さまがお兄筋に当る。その田安家の御曹子であった上総介さまが十一代さまにあてられても、べつに不思議じゃないのだ。御当人はそのほうが順当だと思っておられるだろう。それを田沼さまが強引に斥けられて一橋を立てるのに策動したと憎んでおられるだろうから。……もっとも、田沼さまが上総介さまを斥けられたのも、田沼さまは田沼さまなりのお見通しがあってのことにちがいない」

そういう曰く因縁も史書には書いてあったのだろうが、藪井氏は忘れている。ただいつか三浦が上総介に聞えよがしにしゃべった一橋と島津の結婚問題を「ドスをきかせた」と源内がいった意味をやっと了解した。どっちもどっちというところだろう。

「あのときの刺客はその後どうなったのかな」

と、藪井氏は改めて思い出した。

「たしか二人ともつかまえられたが、それに泥を吐かせれば、暗殺の手の筋がわかったろうに」

「それが、町奉行所の手に渡ったために――中で消されたのじゃないかとわしは見ておる」

「町奉行所で消された？」

「ほら、いつかもいったろう。いまの町奉行は田安派で、松平上総介さまの息がかかっておると。同心が――おそらく江戸お留守居役たちの言動を探るために――八百善の板前に化けて入っていたとすると、その刺客があれからどういう扱いを受けたか想像されるがね。……あっ」

ふいに源内は小声でさけんで、歩き出した。

「どうしたんだ?」
あわててそのあとを藪井氏は追ったが、源内は返事もしない。顔色が真っ蒼になって、からだじゅうがこんにゃくの化物みたいにふるえていた。
一町もいってから、源内はうしろをふりむいて、色のない唇でつぶやいた。
「いま立っていたすぐななめうしろに辻番所があったろう。その中に坐って煙管をくわえている男を番人だと思っていたが……それが、あの、いつかの隠密同心だったのだよ!」

十一

江戸に転生して意外だったことは数々あるが、田沼の人物像がこちらの考えていたのと少なからずちがっていたことなど、その大きいほうの一つだろう。
こちらの考えていた――といっても、よく考えると、もとは史書だ。彼の読んだ史書に関する限り、田沼の評判はさんざんであった。さらにその理由を考えてみると、どうやら田沼の次に出て「寛政の改革」をやった松平定信時代の評価で決ってしまったらしく、その定信時代が終ってもそのままになったのは、史家ないし評論家が、たいてい定信型の――つまり本質的に硬派の人間だからだ、といった気がする。エコノミックかつエロチックアニマルたる巷の庶民が書いたら、また別の――ほんとうの意次像が残ったろう。たとえ史家が庶民の者として紹介したものであっても、その取捨は彼次第なのだから、全面的には信じられない。

例えば史書には、田沼意次はともかくやりてであったにしても、その子の意知は虎の威を借る手のつけられぬ馬鹿息子であったように書かれていたと思うが、源内によると――源内が田沼びいきのせいもあるだろうが――長崎出島の商館長チチングは、実際に意知に会って、あとで「進取の気象の旺盛な非凡な能力を持つこの青年が父のあとをついだときの日本こそ愉しみだ」と許したそうだ。藪井氏が見た意知の像も、たしかに決して愚か者とは見てなかった。
そして、田沼意知は支配者としてまちがいなく比類ない魅力を持つ人物であった。のみならず彼は、日本の経済の近代化を推進し、どうやら開国をさえ想定しているらしい。――
つらつらと世の中を見渡すと、まったく田沼のような政策をとらないとどうにもならない社会状態だ。二百年の泰平のおかげで、人々はぜいたくになり――少なくともあれほど清新な蕪村やハイカラな源内のような詩人や科学者を生むほど精神的には進んでいるのに、二百年前に決めた米本位制の経済と階級制で、強引に縛りつけようとしたってそりゃだめだ。この分でゆくと、働くにも働きようのないあの長屋の連中や、うだつのあがらない源内のような浪人は相呼応して幕藩体制をゆるがせはじめ、加うるに外国からの強大な圧迫に処理を誤れば、日本は収拾のつかない一大動乱期に入るだろう。――
入るだろう、ではない、入るのである。それは「歴史できまっとる」のである。
それを知っている自分は何をなすべきか。実はいっとき藪井氏は、こりゃおれは天下も取れるのではないか、と考えたことがある。未来に何が起るかちゃんと知っている者は、魔神的な

力を持っているといってよいのではないか。――

しかし、その自信や誘惑は間もなく衰弱した。

一番目に、まず自分がこれだけの知識を持っているのに、現実的には何も作れない、近い将来作れる見込みもないという例の自信喪失があった。二番目に、天下をとってみてもどうしようもないという興味の消失があった。

毎日何百人かの陳情客を迎えるなどいうことは、考えただけでもウンザリするし、京人形の贈り物といったたぐいのことには食指が動かないでもないけれど、自分の場合は、ヘタをすると、京極甲斐守さまの二の舞いに追い込まれそうなおそれを感じる。いずれにしても老中や大名も、決してラクなものじゃない。――

その上、刺客の心配もある。田沼意知は「われらもいのちをかけておる」と壮絶な覚悟のほどをもらしたが、実際彼はそのうちあの佐野善左衛門の凶刃に斃れることに「なっとる」のである。桑原、桑原、とてもそんな身分にはなりたくない。

さらに、スパイ！

刺客の心配はともかくとして、思い、ここに到って、藪井氏はぎょっとした。どうやら田沼はあれほどの権力者のくせに完全に警察権を掌握していないらしく――それも源内の言によれば、田沼の自由放任主義のせいだというが――奉行所の隠密は、田沼から源内へ、はては自分の身辺にもだんだん迫って来るような気がする。

日本がアメリカに敗けたとき、G・H・Qには日本人の密告の手紙が山をなしたそうだ。日本人の密告好きは、ひょっとしたら徳川時代の隠密や奉行所、民間の岡っ引、手先、五人組制などによる「国民総スパイ」的な警察網の歴史に淵源しているのではないかと藪井氏は考えたことがあるが、それは事実であった。江戸時代で、もっとも感心しないからくりの一つだ。

――はて、あのほくろの同心は、どこかで見たことがあるが、あれはだれだっけ？

藪井氏の恐怖は的中した。

平賀源内がやられたのである！

源内が人を殺して奉行所に拘引された、という知らせを藪井氏が聞いたのは、十一月二十一日の午後のことであった。

藪井氏は棍棒で頭を殴られたような思いで駈けつけた。

いって見ると、源内の家の前には、隣人らしい七、八人の男女が恐ろしそうに佇んで、ひそひそ話をしているだけで、むろん源内はいなかったが、そこで話を聞いてみると――さあ、よくわからない。

けさがた、源内の家でどたばたする音と大声があがり、近所の人が飛び出すと、間もなく源内が三人の男に縛られて出て来た。三人の男は捲羽織の八丁堀の同心で、「源内は人を殺したからつかまえてゆく」といいおいて、曳いていったという。いつ人を殺したのかというと、少

なくともこの家から死人は運び出されなかったから、以前のことだろうという。

「その役人の一人に、顔にほくろはなかったかね?」

藪井氏は、ふと思いついて訊ねた。すると、町人が、

「ああ、ありやした、ありやした、鼻のわきに。――」

と、答えた。藪井氏は水を浴びたような感じがした。

さて、それからあとも、いろいろと巷のひそひそ話を聞くと、それがさまざまである。

いちばん軽いのは、源内は米代が払えなくて米屋と口論になりこれを斬り殺してしまったというのから、源内が田沼の別荘の設計をやり、その費用の見積りが常識の半分なので、もともと請負っていた棟梁が不審だといい出し、担当の役人と酒を呑んで談合中、源内が酔いつぶれてしまったすきに棟梁がその設計図を見ようとして、これに気づいた源内が立腹して斬ったという説、またさらに神秘的に、彼は切支丹バテレンの秘書を所持していて、それを偶然に見た人間を「……見たな?……見たな?」とさけびながらうしろから斬りつけたという説もある。

それから一方では、凶事のたたりで突然発狂したのだという説もあった。

要するに、何が何だかわからないのである。

ここにおいて藪井氏は、自分が源内に忠告しようとして、事があいまいで竜頭蛇尾の結果に終ったわけを知った。事件がいつ起るか、日どりまで憶えていなかったためもあるが、とにかくこの事件についての史書の記述そのものが、右のごとくあいまいなものであったせいに相違

ない。――

しかし、藪井氏だけはいまほんとうの理由を知った。源内はにぎやかなことは好きな男であったが、酒のほうはさっぱりだった。ふだんから、すぐに刃物をふりまわす野蛮な手合いを軽蔑していた。その源内が、酒を呑んで人を斬るわけがない。

平賀源内はかねてからその「進歩的な」言動に眼をつけられていたのだ。そして、田沼に凶念を抱く人間があの黒幕とつながっていることをつきとめたということを知られて、それでやられたのだ。

しかも彼は、たしか裁判にもかけられず、牢内で消されてしまうはずだ。それは、いつのことだっけ?

いや、彼だけの運命ではない。自分だって危い。――

藪井氏は恐怖にうなされるような気がした。自分も黒い手に狙われているにちがいない。

――ところが、助けを求めようにも、警察が――町奉行所が黒い手のぬしなのだから助からない。

そうだ、田沼さまへ!

藪井氏は宙をかきさぐるような手つきをした。あれほど源内をひいきにしていた田沼意次がいまの老中ではないか? そしておそらく田沼はこのことを知らないに相違ない。

ところが、――藪井氏は、立往生してしまった。

田沼に連絡するすべがないのである。源内でさえ、田沼に面会するのは大変なことであった。自分ひとりがノコノコ出かけてもあの屋敷にはいれるわけがない。手紙を出したって本人にはとどくまいし、電話もない。やんぬるかな。江戸時代——と、歯ぎしりしたが、よく考えると、昭和時代の首相だって同じことだろう。

十二月十九日の氷雨のふる午後であった。藪井氏のところへ、二人の人間が訪れた。

「こちらに藪井庄庵どのはおられるか」

来た！　と、彼はぎょっとしたが、来訪者は四十半ばの医者風の人物と、もう少し若い男で、この医者風の人が、

「私は平賀源内どのと親しくおつき合い願っておる杉田玄白と申すものでござるが」

と、いった。藪井氏は眼を大きく見ひらいた。

「ああ、あなたが蘭学事始の……」

「実は、源内どのは昨年亡くなられたそうで」

と、杉田玄白は、蒼然たる顔色でささやいた。

「牢病による死だということで……で、きょう伝馬町の牢より、衣類や履物を下げ渡すという通知がこの者のところへあったのでござるが——これは源内どのの妹婿でござる——それは表向きのことで、実は遺骸も下げ渡されることになっております。と、いって、自宅に運んで通夜をするということもなりかねる場合、そのままひそかに葬るよりほかはないが、平賀は御存じのごとく四国高松の出で、まだ江戸に墓がない。承われればあなたは同じこの町内で源内とお親しかった由、もしお許し下さるなら、お宅の御墓所の隅にでも埋めてやって下さるまいかと、そのお願いに参ったのでござる。……」

藪井氏は妻のお伸を呼んで、菩提寺を聞いた。浅草の橋場、総泉寺という寺だそうであった。

藪井氏はうなずいた。

「承知いたしました」

それは、驚愕して眼で反対の意思表示をした細君の口を封じるほど沈痛な声調であった。

その夕ぐれ、伝馬町の牢屋敷から一つのもっこがかつぎ出された。裏門の外で受けとり、屍骸を改めた玄白は、少しあとになってからであったが、「……一服、盛られたな」と、ひとりごとをいった。源内は、別人かと思われるほどやつれはてていたが、いかにも傷らしいものはどこにも見えなかった。それにしても、つかまってから一ト月もたたないうちに、かかる姿になり果てようとは！

浅草へ向うもっこについて、師走の氷雨の中を、藪井氏は、杉田玄白らといっしょに歩いていった。彼は、昭和初年小林多喜二の屍体を運んだ人々はこうであったろうと考えた。

源内の辞世なるものも、もっこの中にあった。

「乾坤の手をちぢめたる氷哉」

獄卒には何の意味か了解出来なかったろうが、藪井氏にはよくわかった。

それはまさに天地にひろがるばかりの野心を持ちながら、氷獄の中に——未開反動の黒い手で封殺されてしまった天才の自嘲の悲歌であり、かつ自分の死の真相を伝えようとする恐ろしい報告であった。

総泉寺の墓地の隅に埋めるとき、玄白が悲痛な偈をたむけた。

「嗚呼、非常ノ人
非常ノ事ヲ好ミ
行イ是レ非常
何ゾ非常ノ死ナル。……」

そして彼は慟哭した。

「わしは、ほんとうなら非情の死といいたい。しかし、これ以上、わしは何もいえぬ。……」

いまになって思い出すと、藪井氏は昭和時代に読んだ杉田玄白の「蘭学事始」に、たしか、いかに源内と親しくしたか、いかに源内が奇才であったかが書かれていたような気がするが、それにもかかわらずこの大才の末路は何も記されていなかったように思う。藪井氏はその理由をいま知った。

十二

さて、藪井氏は江戸時代に生まれ変わって、はじめて義憤をおぼえたのである。

好きで好きでたまらない、というほどではなかったが、とにかく源内は、自分と語るに足る、語って通じる唯一の人間であった。これだけ江戸時代に住んで、藪井氏はまだ自分の細君にさえ違和感をぬぐい切れない。なんだか異邦人と暮しているようで、源内が忽然と消えてしまったことは、アフリカに同行した一人の友人を失ったような気がした。

それより、あんな天才を——日本に近代の黎明を告げようとした稀有の芽を、あのように無造作に踏みつぶしてしまった愚か者どもには、心から痛憤を禁じ得ない。

平賀源内のみならず、たしかこのあと田沼意知も黒い手の犠牲になり、田沼時代は去るのだが、いったいそのあと日本にはどういう時代がめぐって来たか。——

社会が貧乏だからといって体制を変えるようなことは許されない。貧乏なら切りつめて暮せばよいという寛政時代、そのあとに、それ見たことか、「もとの濁りの田沼恋しき」といいたい、しかも全然近代の匂いのない、ただ膿みただれたような文化文政時代、次にまた大反動の天保時代を経て、いよいよ幕末の大動乱期に入る。

寛政、文化文政、天保なんて日本のために要らないのじゃないかと、藪井氏は考えた。田沼時代からすぐに明治につないだほうがよかったのではないか？　そういえば、源内は文明開化のころに生まれたら幸福な科学者として功成り名とげたにちがいないし、蕪村も明治の詩人にふさわしいのではないか？　子規が芭蕉よりも共鳴したのもむべなるかな。

寛政や天保は要らないといったって、実際あったんだからどうしようもない、と笑ってはい

けない。昭和人にも、昭和前期は抹殺したいほどに恐縮している文化人はうんとあった。昭和前期どころか、中国の首相から日清戦争も謝まれと叱られると、まったくその通りですといわぬばかりに愛想笑いしている連中ばかりであった。その分でゆくと、明治時代もなくなってしまったほうがいいのだろうが——藪井氏はそうは考えない。そうは考えなかったが、いま江戸時代に生まれ変わってそんなことを大まじめに思いついたところを見ると、右のような虫のいい昭和文化人の歴史否定の精神の影響を、やはり受けていたのかも知れない。

しかし、歴史は過去に厳然として存在していたのだ。——ということは、藪井氏の場合には成り立たない。彼にとって、寛政も文化文政も天保も未来のことであった。

その未来を変えることは出来ないか？　と藪井氏は考えた。

未来を変えるなんて大変なことだが——しかしそれは未来を知らないからのことである。自分はそれを知っているのだ。

しかし、いざとなると藪井氏は絶望をおぼえずにはいられなかった。未来を変えるといったって、どこから手をつけていいかわからない。彼は、太平洋戦争前の米内光政や山本五十六はこんな感じがしていたのかも知れない、と考え出した。

が、また米内や山本がついに時の潮におし流されたのも、神ならぬ身として実はその未来の見通しがそれほどたしかなものでなかったせいもあるだろう。あの大破局を明確に知っていたら、いのちを張っても何とか手を打ったろう。——藪井氏は気力をふるい起した。

さて、田沼時代はこのまま敗滅させては惜しい。これがさしあたっての彼の念願だ。

この時代に転生して、田沼の人間像を意外に感じたといったが、それは必ずしも彼が後世伝えられたようなただ賄賂好きの奸物ではないということである。賄賂をとりいれるのに遠慮のないことはげんに目撃した通りだが、その点で彼を責めるなら、昭和の政治家など大半首でも吊らなくてはなるまい。田沼のころは賄賂は公然たる政治的慣習として認められていたのだが、昭和時代はやっちゃいかんということになっているのだから。

それより、政治家として彼のやったことだが——彼のやったことは、この時代としてそれ相応に理由のあるものだ、ということがわかった。後世、何かとあげつらっても、その時代にはその時代の必然性があるのだ、ということが実感としてわかった。——東条の言動だって、太平洋戦争突入前後には、決して盲従ではなく日本人の大半を首肯させる理由があったのである。——ましてや田沼は、おさきまっくらな東条などとちがって、未来の必然性さえ予見して、驚くべきことに開国の意思さえ担っていると見られるふしがある。

もっとも、そんなことをいうなら、寛政や天保の反動期だって必然性があるわけだが、自分の都合のいい事実だけに眼をひかれて論じたてる昭和期の文化人のはしくれとして、藪井氏もそのほうは考えない。まあ、公平なところ好みの問題で、彼は田沼父子（おやこ）が気に入ったのである。

田沼意知を殺してはならぬ！

好みの問題からいえば洒脱（しゃだつ）な父の意次のほうが好ましいけれど、何といっても六十を越えて

いる。だいいちこっちは暗殺の心配はないことになっている。それより若い意知のほうに望みを託すべきで、あのやる気充分の闘志から見ても、彼ならうまく明治につなげてくれるかも知れない。

意知を生き永らえさせるには、彼を佐野の凶刃からふせいでやらなければならぬ。そのためには、まず彼にその危険を知らせてやらなければならぬ。——

藪井氏はワクワクしだした。

未来を知っているというせっかくの魔力を、無能のせいで自分自身のためにどう使ってよいやら途方にくれ、宝の持ち腐れとしかいいようのない状態であったが、しかしいまようやくその魔力の使用法を発見したのだ。それは歴史の進行を変えるということであった。

いや、それも実はなすすべも知らなかったのだが、何もあまり大がかりなことを思案することはない。ただ老中の子田沼意知を暗殺から防御してやるということだけで、未来の歴史はすべてその流れを変えるのだ。そうなったあとの日本は、いかにムダなく近代へ進行するか。

——

それこそは悲劇的な死をとげた畏友平賀源内への何よりの手向けではあるまいか。藪井氏はムシャぶるいした。

ところが、さて。

田沼意知にどうしてそれを知らせるのか。例の問題で彼はまた、はたと処置に窮してしまっ

たのだ。その法がないうえに、たとい通じたとしても、果して向うが信じるか。——源内でさえ笑ってとり合わなかったではないか。

当人のためになることを——いのちにさえかかわることをせっかく教えてやろうとしても、一人民から権力者にはそれが通じない。そのじれったさに、藪井氏はついに、これは本質的に一人民のことなど念頭にない権力者というものの自業自得だ、とかんしゃくを起したほどである。

が、勝手にしろ——と、匙を投げ出すには、事はあまりに重大で、苦悶の末藪井氏は、そうだ、こっちのほうを何とかすればいいじゃないか、と思いついた。

暗殺予定者の佐野善左衛門である。

こっちなら何とか手がとどくだろう——と考えて、これまた藪井氏はうんとうなってしまった。佐野なら、あのときちらっと見ただけだが、その相貌といい言動といい、一種の狂信者であることはたしかであった。しかも新陰流の達人であるという。藪井氏は何となく——よくは知らないけれど、昭和十年陸軍省で永田鉄山を刺殺した相沢中佐はこんな人物ではなかったろうかと想像した。

佐野を何とかすれば、といって——何をするのか。ピストルがあれば、いくら新陰流だって、と、ちらっと考えた。

しかし、そんなものを製造する能力はないし、だいいちいかに歴史変更の意思はあっても、

自分がそんなものをふりまわすほどの気になるまではまだ相当距離がある。
そして、訴えようにも、これまた町奉行所が黒幕の一派らしい疑いが濃厚なのだ。よく考えると、ひとを狙うどころじゃない、自分のほうが危い。――幾夜か彼は、家の外を歩く跫音にぎょっと枕から首をもたげ、じわんと汗が全身ににじみ出すような気がした。
「……なるほどなあ、あとでさかしら顔で批判するのは簡単だが、その渦中にあると、わかっていても歴史の進行を変えるなんてことは大変なことだなあ。……」
と、彼は長嘆した。いろいろ考えても、何もやらなければ、何も考えないにひとしい。彼は自分が兵隊さんになったような気がした。
その一方で藪井氏はべつのごたごたに悩まされ、そのほうに神経と精力を奪われ出した。

十三

いったい人間は――どんな傍若無人な英雄でも――一生のうち自分の仕事よりも、身辺のくだらないいざこざに、どれほど心と肉体を労することか。お金にしたって、真に自分自身のために必要なのは、全収入の何十分の一かに過ぎないだろうが、それと同様にあらゆる人間の全精力と全時間の大半は、そんな瑣事に使われてその生涯を終るのではあるまいか、といつか藪井氏は考えて苦笑したことがあるが、その通りであった。
歴史の潮を変えて見せる、などという壮大な望みに彼が腐心しているところに、ひょっこりその瑣事が飛び込んで来た。

だれか訪なう女の声に、偶然玄関に出た藪井氏は、
「や、君は」
と、棒立ちになった。
女はじいっとこちらを見つめていたが、
「あんた、どうしたんだよう」
と、いいながら、いきなり藪井氏のくびったまに飛びついて来て、泣き出した。
なんと、新宿のバーのホステスの加代なのである。むろんこれも髷を結って、しかも水商売風のきものを着ていたが、とにかく加代にまちがいなく、あまりの懐しさに藪井氏は、アフリカにたった一人でいるところへ、はるばる日本から知合いの女が訪ねてくれたような感動に襲われて、ひしとばかりに抱きしめてキスをした。
「よく来てくれた、よく来てくれたね。……」
「あんた、ひどい、ひどい！　あんな約束してサ！」
「どんな約束したっけ？　どんな約束でも履行してやるよ、いったい、どうしたんだ？」
藪井氏は涙さえこぼしながら、またキスをした。
すると――背後からその襟に冷たい手がふれた。すうとひかれて藪井氏はふりかえり、ぎょっとした。妻のお伸が立っていた。

「わたしが藪井家の妻として御挨拶いたします。あなたはしばらくあちらにお控え下さりましょう」

藪井氏はスパイの現行犯を現地国の女警官につかまったような気持で、ふらふらと命じられた座敷に戻って、玄関での低い女同士のささやきを聞いていた。

――さて藪井氏は江戸時代を、思っているほど悪くない時代だと考えたこともあり、夢みていたほどよくもない時代だと考えたこともあるが、その中で文句なく気に入ったのは、何といっても家庭内の礼儀だ。

朝から、妻のみならずあのやくざ息子の庄助までがひれ伏して挨拶し、食前には両掌を合わせてふし拝んだのち、「頂戴つかまつりまする」と、つつましやかに箸をとる。

はじめのうちは感心どころか感動して、涙さえ、もよおしたほどであったが、そのうち江戸時代の家庭もラクじゃない、と思い出した。彼自身どんなに努めても立居振舞いに崩れたところがあって、お伸は庄助に、

「……父上はまだお病気なのですから」

と、弁解してくれていたが、それでも何かのはずみで、きっと彼をにらみつけることがある。

江戸時代で藪井氏が意外としたものの一つは、家庭内で女性になかなか権威があることであった。とくに子に対する母の態度といったら厳然たるもので、従って妻に対する夫の態度もそうふざけてはいられない。徳川時代、女は奴隷的存在であった、なんていったやつはだれだ、

といいたいくらいであった。とにかく昭和時代「孝」を笑ってから「貞」も失われ、家庭は崩壊したと思う。はてな、だんだんおれは江戸時代人に感化されて来たぞ。……藪井氏は次第に恐妻病にかかって来たが、見ていると、外では二本差しで威張って歩いている侍も、内では存外恐妻家が多いことを知った。

お伸がひとりでひき返して来て、ぴたりと坐った。

「三十両つかわして、帰してござります」

「えっ、三十両？」

藪井氏は仰天した。それでは米が百俵も買える。一俵四斗、六十キロとして六トン分の米代にあたる。――藪井氏も、このごろは日々に急騰する米代には恐怖を感じていた。田沼のインフレ推進政策のためではない。地方では大変な饑饉だということで、そのせいであった。

彼はおどおどして顔をあげた。

「ありゃ、いったい何者かね？」

すると。――

「京極家お抱え御医師の御身分として、おとぼけなさりまするな、御卑怯でござりましょうぞ！」

と、裂帛(れっぱく)の声が返って来た。

さて、それから苦心惨憺して聞き糺(ただ)してみると、お加代は門前町の矢場(やば)の女だということで、

それと藪井氏は深い仲になって、近いうちに独立して店を出させてやるとか何とか約束したっきりになったらしい。藪井氏はむろん夢にもおぼえはないが、お仲もきょうはじめてそのことを知ったのである。

三十両というと、これまでお仲が苦心の家計の結果貯（た）めた金の大半であった。その心中は察するに余りがある。が、藪井家の名誉を保つためにはやむを得ない、と、きっぱりと彼女はいった。

さあ、それからが大変だ。

夜かならずお仲は藪井氏と同衾する。しかも、とうてい以前のように、「では失礼いたします」と三つ指そろえての挨拶などはない。

「ええ、このものが矢場の女ごときに」

と、ひっつかんでねじまわさんばかりの責め折檻（せっかん）に悲鳴をあげると、

「これくらいのことが何でござります。わたしは藪井家の名誉を保つために、いのちをかけておつとめをしているのでござりまするぞ！」

と、お仲はいった。藪井家の当主にふしだらをする余力なからしめる、という意味だろう。実際に枕もとには、いつもひとふりの懐剣が置いてあった。

こういう夫婦の雲ゆきが、いつしか外にも感じられはじめたのであろう。そのうちに庄助が絶えず出歩くようになった。家に帰っても、陰鬱な顔でむっと書見をしている。声をかけようにも、庄助は軽蔑的な眼で藪井氏を見返すだけで、その口を封じてしまう。

――こりゃ、何だか、だんだん昭和時代の断絶に似て来たぞ。……

とにかくこれでは歴史の進行を何とかするどころではない。それにこういう事態は彼の知っている未来国にぜんぜんないので、これから先どうなるか見当もつかない。

「庄庵、一大事じゃ」

父の庄斎が恐怖の眼で藪井氏の座敷に入って来たのは、そういう日々が重ねられた後の或る春の日であった。そして老人は一冊の書籍を彼に見せた。

「柳子新論（りゅうししんろん）」

庄助の机の中にあったものだという。――これは禁制の書どころか、十五年ほど前、山県大弐（だいに）という叛逆者が著わして、そのために処刑されたという恐ろしい本だということがわかった。それで藪井氏も、おぼろげながら、山県大弐が徳川時代はじめて幕府に対して革命的思想を打ち出した浪人学者だったということを思い出した。

その夜藪井氏は、庄助をひきすえて、血相かえて訊問した。その結果庄助は、蒼白な顔で、勤皇の思想のもとに集まり、幕府打倒の運動を起そうとしていること、自分と同様の若い同志はすでに数十人に達していることを白状したのである。

「――それは、早過ぎる！」

と、藪井氏はさけんだ。

「それは、安政とか……文久とか……までゆかなきゃだめなんだ。時期尚早だ！」
彼は必死に未来を思い出そうとした。さすがに子の生命にかかわるとなると、彼も死物狂いにならざるを得なかったが、庄助はなかなか父のわけのわからない説得に応じようとはしなかった。何といわれても同志を裏切ることは出来ないといった。
「それなら、――」
藪井氏はやっと思い出した。この次に来る寛政時代、松平定信が朝廷に対して「太上天皇事件」で徹底的な弾圧を加えたことを。
「倒幕ということと現在の対象は田沼ということになるのだろうが、おまえたちの敵は別にある。
――」
放っておけば、田沼の時代はやがて終る。次に立つのは松平越中守定信で――そのころ上総介はもう越中守になっていた――これが幕府の体制を反動的に再建強化し、朝廷をすら絞めあげるであろう、と藪井氏は神がかり的に説いた。狙うなら、そっちだ。嘘だと思うなら、松平越中守さま及びその周辺の人物や思想を探ってみるがいい。――
藪井氏ははからずも息子たち若者の猛気の鼻づらをねじまげ、さらに――歴史の潮を変える法を発見したのである！
「ただし、おまえは手を出してはならんぞ。それは同志にまかせろ」
この点だけは厳重に釘をさした。おそらくこの予言や希望に、ふつうでない――魔術的な迫力が醸（かも）し出されたのであろう、さすがの庄助も毒気をぬかれたように口をぽかんとあけ、まじまじと父の顔を見まもっているばかりであった。
「おまえにはまだやってもらうことがある。おまえが何をやるべきか、それは松平越中守さまがこの世から消えられたとき改めて教える。ゆめゆめ父を疑うなかれ。……」

三月廿四日の夜明前であった。庄助が藪井氏のところへやって来て、ひそかにささやいた。
「本日、決行します」
「何を？」
「松平越中守さま御登城の機を狙い、われら同志これに斬り込みます」
「なんだって？　……しかし、お、おまえは――」
「いえ、私は遠くからこれを見張り、目的達成ののち傷ついた同志があればこれを運ぶ組の中に入っております。父上も是非これを御覧下さいますよう」
――
藪井氏はふるえあがったが、しかし歯をくいしばって踏んばった。大変なことになったが、これをやめさせれば別の大変なことが起る。やっぱりこの大変はやりとげなければならない。
彼は、息子とともに深川から八丁堀に駈けつけた。この一画は大名町になっていて、朝の通りにはまだ人影も見えなかったが。――

「同志たちは、あちらの塀のかげ、こちらの門のかげにひそんでおります」
と、藪井氏と同じ編笠をかぶった庄助がささやいた。
やがて松平邸の門がひらいて、一挺の駕籠をかこんで侍や中間たちが現われた。意外に少人数で十人内外である。その中に――おや、あの佐野善左衛門もいる！
突然、庄助がさけび出した。
「ここでござる、ここでござる。――正当な歴史の進行をさまたげようとする同志の敵はここでござる！」
そして、驚愕して飛び上り、狼狽して逃げ出そうとする藪井氏の腕を、息子の庄助はしっかととらえた。
「父上、もったいのうはござりますけれど、裏切者は父上とても総括にかけねば相成りませぬ。私は、佐野善左衛門どのに近づいて、ことごとく共鳴つかまつった。ただわれらの邪魔者というだけではない、御覧なされ、日本中を襲っておる饑饉の嵐を。――これ、田沼の悪政に対する天譴でなくて何でござろうか？　これに眼をつぶり、悪政を糺さんとする人をさまたげようとする者は、たといなんびとであろうと天魔と認める！」
「そこか」
凄じい砂塵をまきあげて、佐野善左衛門が駈けて来た。すでに大刀をひっさげている。
藪井氏は、未来の歴史の中に饑饉のことを失念していたことにやっと気がついた。米が余って困る時代に生きていた名残りの不注意だ。

しかし、これは天災だ。天災は田沼の責任ではない。思えば田沼の悪政と呼ばれる現象の中には天災のせいがずいぶんある。天災を何かといえば天罰論に持ってゆくのは、日本人独特の土俗的迷信だ。これはよろしくない――。そんな理屈が頭にひらめいたが、口はぱくぱくあえぐだけで、足は大地に打ち込まれた杭のようであった。
「これからお城に上って田沼山城守に天誅を下す」
佐野善左衛門は前に立ちふさがり、仁王立ちになり、大刀をふりかざした。
「その血祭りだ。やぁっ」

十四

「ぎゃー」
さけんで、藪井氏は地面にうち倒れ、はねまわった。
それから、真っ向から唐竹割りになったはずだが――と、キョロキョロまわりを見まわして、それが昭和時代の自分の家の炬燵のそばだということに気がついた。
「――夢だったのか」
と、つぶやいた。
そんな馬鹿な！　と、まばたきし、あれが夢だとは、そんな手はないぜ！　と、頭をふった。

しかし、ほんとうに夢だったらしいから——夢にちがいないのだからどうにもいたしかたがない。

藪井氏はくしゃみをした。が、まだ頭の中にはアルコールと、さまざまな夢の映像が混沌と渦巻いているようだ。

いま、相当大きな悲鳴をあげたのは自分でも聞いたし、さらに大きなくしゃみさえしたのに、座敷にはだれも来ない。電燈がともっているところを見ると、夜らしい。——炬燵の上には、食いちらした正月料理と徳利が汚ならしくならんでいた。

彼はふらふらと立ちあがった。紋付袴のままであった。

「おい」

細君の伸子がはいって来た。

「あら、お目ざめ？　よく飲んだわね」

そういったが、丸髷を結った彼女はひどく厳しい顔をしている。藪井氏は股間を押えて、恐怖の表情になった。

「あなた、ちょっと玄関に出て下さらない？」

「どうしたんだ」

「庄助が、いまお友達を二人つれて来たんだけど。……」

藪井氏は、やっとけさ庄助がどこかへ飛び出し、自分がそれを追っかけて飛び出したあたりから天地晦瞑の状態におちいったことを思い出した。

「お父さんにお願いがあるって」

ただならぬ伸子のようすに、藪井氏はけさからのことを聞くのも夢の話をするのも忘れて、玄関に出ていった。

玄関には、庄助が——上にもあがらないで、長髪の若者二人とともに立っていたが、出て来た藪井氏を見ると、両掌を合わせて、

「父上、お願いつかまつる！」

と、ふし拝んだ。藪井氏はまたぎょっとした。

「この二人、同志なんだ。それがポリに追われていて……うちをアジトにするつもりでつれて来たんだけど……移動に、わざと正月を狙ったんだけど……」

「もうデカに尾けられた。たしか、やつはそこらをうろうろしているはずだよ。……」

と、庄助はあえぐようにいった。

「同志？　アジト？　デカ？」

藪井氏は奇声を発した。

「おまえ……連合赤軍か？」

「しいっ。……それで至急またアジトを変えなきゃならないんだけど、とにかく外のデカをまかなきゃ動きがとれないんだ。お父さん、それやってくれないか？」

「お、おれが？　デカをまく？」
「そのチョンマゲつけた恰好でさ、ここを出てゆけばデカはそれに気をとられるだろうと思うんだ」
藪井氏は頭に手をやり、例のチョンマゲが――あれほど夢の中で騒ぎまわったにもかかわらず、まだ執念ぶかくそこにのっていることに気がついた。
「そのすきに、ぼくたちは逃げる。……お願い、早く！」
藪井氏は泳ぐように外へ出ていった。出るとき、彼は庄助から棒を渡された。
元日の夜は暗く、こがらしだけが吹いて、人影もなかった。藪井氏はまだ江戸時代の夢を見ているように、ふらふらと往来を歩いた。十分以上も歩いてから、たしかに自分のあとをつけて来る跫音が聞えた。
藪井氏はふりむいた。街燈の下に、鼻のわきにほくろのある馬面が浮んで消えた。
「八丁堀の同心か」
反射的にゲバ棒をとり直し、厳然と構えると、要するに昭和時代もおんなじじゃないか、という怒りのこがらしが胸を吹いて、藪井氏は叱咤した。
「犬め！」

解説

長谷部史親（はせべふみちか）（文芸評論家）

たいていの場合において時代小説は、歴史上の出来事を背景に据えつつ作者固有の史観を反映したり、あるいは史料が正確に伝えてくれない部分を推測で補うかたちで成り立っている。いわゆる史実が占める比重は作品によってまちまちで、必ずしも一定しているわけではない。できるかぎり史料にしたがって、歴史上の事件の再現を試みたものがある一方、さほど史料にとらわれずに破天荒な物語を繰り広げたものもある。前者の典型をとくに歴史小説と呼び、後者の典型を伝奇小説と呼ぶこともあるが、個々の作品を前にすると機械的な分類がむずかしくなるのも、文芸作品が生き物だといわれるゆえんだろう。
山田風太郎作品の時代ものでは、史料によって伝わっていることを十全に踏まえながらも、そこに卓抜な発想をからめて逆転してみせたり、正反対とはいわずとも従来の通説とは少し異なった局面を構築したものが多い。これはあくまでも歴史が過去の人々の証言の集合体であって、つねに別の主観の介在する余地が残されているからである。なおかつ歴史に対して有力な証言を付加してきたのは、おりおりの権力側に属す者であった。

いささか唐突な話題だが、かりに自動車が人を轢き殺した状況を想像してみることにしよう。現場に複数の目撃者がいたとして、彼らの証言と加害者たる運転手の証言は、故意に嘘をつくつもりがなくても、置かれた立場が異なるために矛盾しがちである。それどころか複数の目撃者の証言も、互いに争う必然性がないにもかかわらず、往々にして完全には一致しない。もしも被害者が死なずに生きていたなら、またちがった証言が出てくるだろう。そして警察官が介入し、様々な法手続きを経て処理が済んだときに、そこで導かれた結論が客観的事実の記録として歴史の中に繰り込まれてゆくのである。

この簡単な図式から類推できるように、過去の出来事に対する解釈や評価は、けっして一様ではありえない。そもそも二人の人間が同じ小犬を目にしたときに、片方がかわいいと感じ、もう一方が食べたら美味しそうだなどと思うことが珍しくない以上、過去の出来事には当事者の人数分の主観が埋もれているはずだろう。そして個々の主観を掘り起こすことができたとして、それを検証するのもまた主観なのである。山田風太郎作品の面白さは、とりもなおさず作者の主観によって、過去の出来事に眠る多様な主観がみごとに統御されている点にあるといってもよかろう。その底に流れているのは、歴史の表舞台に立つ権力者を額面どおりには受け取らない反骨精神にほかならない。

本書『江戸にいる私』には単行本初収録となる表題作をはじめ、全部で六つの作品が収められている。背景を概観すると戦国時代末期から江戸中期といったところで、作品ごとに歴史の

いろいろな節目が鮮やかに再現されると同時に、作者独自の史観が絶妙な効果を発揮している点に注目したい。

巻頭の「山田真竜軒」は、剣豪として知られる荒木又右衛門を描いたものである。伊賀国（現在の三重県）に生まれた荒木又右衛門は、大和郡山藩に剣術師範として召し抱えられ、寛永十五年（一六三八年）に数え四十一歳で物故した。死の少し前の寛永十一年に、伊賀上野で河合又五郎を討った話が有名で、講談などでは三十六人斬りと伝えられる。だがこれはとんだ誇張であって、実際には河合側の死者四名のうち、又右衛門が斬ったのは二人だけだったという。

この「山田真竜軒」は、伊賀上野での三十六人斬りの虚構性を暴く一方で、船賃が払えぬ浪人を取り囲んだ船頭衆三十六人を、居合わせた荒木又右衛門がバッタバッタと斬り伏せる場面から始まる。それが事実であったか否かはともかく、つまりは又右衛門の剣技のほどを物語っているのであろう。又右衛門と河合又五郎との角逐もさることながら、鎖鎌を武器とする山田真竜軒を介して仇討ち模様が複雑に交錯してゆく経緯が面白い。また、あたかも講談などの話芸を意識したような語り口も特色といえようか。

続く「悲恋華陣」では、天正七年（一五七九年）の播州三木城が陥った苦境が題材に選ばれている。播州の別所一族は、いったんは織田信長への恭順を示していたが、天正六年に信長の命を受けた羽柴秀吉が西国攻めの一環として播州に入ると、信長に反旗を翻して三木城にたて

こもった。秀吉勢の包囲に耐えて一年半ばかりが過ぎるうちに、さすがに食糧が底をついて城内には飢餓が忍び寄ってくる。乾坤一擲の反撃も失敗に帰した。

そんなおり合戦で死んだと思われた左馬之助が生還し、城の副家老の粕谷玄蕃に宛てた敵陣の戸田左門からの密書を携えているという。これはすなわち左馬之助が捕虜になっていたことを意味し、誇り高き玄蕃にとっては許しがたい汚辱である。だが今は敵どうしに別れているとはいえ、玄蕃と左門は昔からの親友であり、玄蕃の娘の沙羅と左馬之助は許婚者の間柄だった。入り組んだ人間関係の中で、玄蕃と沙羅がそれぞれに下した決断が、この作品の最大のポイントである。合戦の知略の陰に潜む苛酷さが、アイロニーのまじった悲哀を醸し出していて実に印象深い。

三つ目の「黒百合抄」では、婢として北政所に仕える美也から、淀君に仕える武家の家臣の主水正に宛てた書簡の体裁がとられている。いうまでもなく北政所は豊臣秀吉の正室で、妻妾たちの中で最も地位が高かったが、秀吉の跡継ぎを生むことができなかった。これに対して側室ながら秀頼の母となった淀君は、秀吉の死後に勢力を伸ばしたことで、豊臣家内や傘下の武将の間に派閥抗争の原因をつくったといわれる。

物語は秀吉の死去の翌年にあたる慶長四年（一五九九年）に幕を開け、大坂城を後に京へ移った北政所はこのとき五十一歳だった。次の年の関ケ原合戦を経て、慶長八年に高台院の院号を許された北政所は、翌々年に洛東に高台寺を建てている。しかしながら北政所の影響力が、

これによって完全に消え失せたわけではない。やがて慶長十九年の大坂冬の陣、および翌年の大坂夏の陣によって淀君と秀頼が滅ぼされるわけだが、そこへ至るまでに北政所が演じた役割の大きさが、美也のたおやかな筆を通して浮き彫りにされている。北政所と淀君という二人の女性の心理闘争もなかなか凄まじいが、そこに内包されるエネルギーが時代を動かすメカニズムの妙味に留意したい。

第四話「明智太閤」は、いかにも山田風太郎作品らしく、大胆な仮定のもとに成り立っている。天正十年（一五八二年）六月、天下取りを表明した明智光秀が謀叛を起こし、織田信長を本能寺に討ったのは誰でも知っている史実だろう。秀吉は西国攻めの最中にあったが、その報を聞いて迅速に転戦し光秀の軍勢に襲いかかった。光秀は敗走の途中で落命したことになっているため、実はひそかに生き延びたという俗説もあるわけだが、ここではあまり関係ないのでこれ以上はふれない。

余談はともあれ、本能寺の変の第一報が、もしも秀吉ではなく敵方に入っていたなら、明智をめぐる事態はどのように展開しただろうかというのが、この作品の骨子である。情報伝達の鍵として、一日半で七十余里を走る飛脚を堺の茶屋四郎次郎が雇っているのに加えて、それを上回る健脚の持ち主が登場してくるのが、いかにも山田風太郎作品らしい。ある意味で戦国の世における勝敗の分かれ目は紙一重であり、ちょっとしたことで歴史が大きく変わっていたと想像できるのも、この時代に対する興味のひとつであろう。

五つ目の「叛心十六歳」は、民部之介という十六歳の少年を主人公とするものである。彼は楠木正成の子孫と称する楠不伝が江戸牛込に構える軍学道場に、下僕として奉公していた。その民部之介は、年に一度くらいの割合で道場へふらりとやってくる人物に関心を抱く。一方で彼は少し年上の女性に思慕の念を寄せたり、あるいは身分を隠して道場に通う未来の徳川将軍の暗愚さにあきれたりもするが、彼の心を大きく揺り動かしたのは、江戸の町で貧窮する浪人たちの姿であった。

武士は現代ならさしあたって役人に相当し、浪人はいわば失業した公務員であろうか。徳川時代の初期には幕府が厳しい改易や転封政策を進めた結果、とりつぶされたり縮小を余儀なくされた藩から大量の浪人が発生した。新たな仕官の口が見つからなければ、彼らは自分の才覚で生きてゆかねばならない。俗に傘張り浪人という言葉があるように、簡単な手内職を覚えてどうにか糊口をしのぐうち、いつしか町人に同化した者もあれば、武芸をもとに町道場の師範になったり、ときには犯罪に手をそめる者もあった。こうした浪人たちが抱える不満が、慶安四年（一六五一年）に起きた由比正雪の乱（慶安事件）につながったとされる。この作品ではやはり、十六歳の民部之介に世の中のもろもろの矛盾を観察させる手際が見どころであろう。

巻末の「江戸にいる私」は、本書の表題作であるとともに分量も最も多い。平凡な勤め人の藪井庄一氏が、新宿の古道具店でチョンマゲのかつらを買ったところから、物語は奇妙な方向へ歩み始める。正月を迎えた家庭内で妻子と口論し、苦々しい思いで酒杯を重ねるうちに泥酔

した藪井氏は、ふと気がついてみると江戸時代に入り込んでいた。どうやら彼は医者の家柄で、友人には平賀源内がおり、幕府では老中の田沼意次が権勢をふるっているらしい。あまりの環境の変化にとまどいつつも、藪井氏は何とか適応しようと試み、やがては歴史の変革という壮大な野望まで抱くに至った。

一般に過去の時代にタイム・スリップする小説では、主人公が以後の歴史の知識を持っている分だけ優位に立てる反面、その知識に立脚して歴史の修正をもくろむと、自分がもといた世界が成立しなくなるという矛盾が生じる面白さがある。さらにここでは、通常では金権腐敗政治の元凶と見なされる田沼意次への評価をはじめ、平賀源内が麻雀を広めた逸話など些末な部分も含めて、いつの世でも先見性に富む人物ほど社会の埒外にはじき出されやすい史的必然性が、うまくとらえられている点に注目したい。これもまた、作者特有の反骨精神のたまものであろう。なおかつこの作品が昭和三十四年に書かれたことを思うと、いわゆるＳＦの流れとの関連性も無視できない。

●底　本

「山田真竜軒」（『不知火軍記』所収　桃源社　昭和三十四年五月刊）
「悲恋華陣」（『不知火軍記』所収　桃源社　昭和三十四年五月刊）
「黒百合抄」（『明智太閤』所収　東京文藝社　昭和四十二年十一月刊）
「明智太閤」（『明智太閤』所収　東京文藝社　昭和四十二年十一月刊）
「叛心十六歳」（『明智太閤』所収　東京文藝社　昭和四十二年十一月刊）
「江戸にいる私」（単行本未収録「小説サンデー毎日」昭和四十八年三月号）

「お断り」
本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

江戸にいる私

特選時代小説

著　者　山田風太郎

発行者　櫻井道弘

発行所　廣済堂出版

〒105-8548

東京都港区芝3丁目4番12号

電話　03(5445)1202(営業)

03(5445)1204(編集)

振替　00180-0-164137

印刷所　廣済堂印刷株式会社

〈編集担当〉伊藤秋夫

定価は、カバーに明示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-60658-9 C0193